

BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

八登崇之 (Takayuki YATO; aka. “ZR”)





v1.7b [2018/01/28]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザーマニュアル `bxjscls-manual.pdf` を参照してください。

目次

1	はじめに	3
2	オプション	7
3	和文フォントの変更	36
4	フォントサイズ	37
5	レイアウト	42
5.1	ページレイアウト	43
6	改ページ (日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ)	56
7	ページスタイル	57
8	文書のマークアップ	61
8.1	表題	61
8.2	章・節	66
8.3	リスト環境	78
8.4	パラメータの設定	85
8.5	フロート	86
8.6	キャプション	88
9	フォントコマンド	89

10	相互参照	91
10.1	目次の類	91
10.2	参考文献	97
10.3	索引	98
10.4	脚注	100
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	102
12	いろいろなロゴ	106
13	amsmath との衝突の回避	107
14	初期設定	107
付録 A	和文ドライバの仕様 罨	112
付録 B	和文ドライバ : minimal 罨	113
B.1	補助マクロ	113
B.2	(u)pTeX 用の設定	115
B.3	pdfTeX 用の処理	119
B.4	X _Y TeX 用の処理	120
B.5	後処理 (エンジン共通)	120
付録 C	和文ドライバ : standard 罨	123
C.1	共通処理 (1)	124
C.2	pTeX 用設定	132
C.3	pdfTeX 用設定 : CJK + bxcjkatype	135
C.4	X _Y TeX 用設定 : xeCJK + zxcjatype	137
C.5	LuaTeX 用設定 : LuaTeX-ja	139
C.6	共通処理 (2)	142
付録 D	和文ドライバ : modern 罨	143
D.1	フォント設定	143
D.2	fixltx2e 読込	144
D.3	和文カテゴリコード	144
D.4	完了	144
付録 E	和文ドライバ : pandoc 罨	144
E.1	dupload システム	145
E.2	lang 変数	145
E.3	geometry 変数	146
E.4	CJKmainfont 変数	146
E.5	paragraph のマーク	147

E.6	全角空白文字	147
E.7	完了	148
付録 F	補助パッケージ一覧 	148
付録 G	補助パッケージ : bxjscompat 	148
G.1	準備	148
G.2	X _Y TeX 部分	149
G.3	LuaTeX 部分	149
G.4	完了	151
付録 H	補助パッケージ : bxjscjkat 	151
H.1	準備	151
H.2	和文カテゴリコードの設定	152
H.3	ギリシャ・キリル文字の扱い	152
H.4	初期設定	159
H.5	完了	159
付録 I	補助パッケージ : bxjspandoc 	159
I.1	準備	159
I.2	パッケージ読込の阻止	159
I.3	fixltx2e パッケージ	160
I.4	cmap パッケージ	160
I.5	microtype パッケージ	160
I.6	Unicode 文字変換対策	161
I.7	PandoLa モジュール	162
I.8	完了	162

1 はじめに

この文書は「BXJS ドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

<code><article></code>	<code>bxjsarticle.cls</code>	短いレポート (章なし)
<code><report></code>	<code>bxjsreport.cls</code>	長いレポート (章あり)
<code><book></code>	<code>bxjsbook.cls</code>	書籍用
<code><slide></code>	<code>bxjsslide.cls</code>	スライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる「p_{La}TeX 2_ε 新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラスに関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは L^AT_EX3 Project の `classes.dtx` と株式会社アスキーの `jclasses.dtx` に基づいて奥村が改変したものです。権利については両者のものに従います。奥村は何の権利も主張しません。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upL^AT_EX 対応パッチを取り込みました。

以下では実際のコードに即して説明します。

```
1 %<*cls>
2 %% このファイルは日本語文字を含みます.
```

`\bxjs@clsname` 文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

```
3 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
4 %<book>\def\bxjs@clsname{bxjsbook}
5 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
6 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}
```

`\ifjsc@needsp@tch` [2016-08-22] 従来 `jsclasses` では、pL^AT_EX や L^AT_EX の不都合な点に対して、クラスファイル内で独自に対策を施していました。しかし、2016 年以降、コミュニティ版 pL^AT_EX が次第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで、新しい pL^AT_EX カーネルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使用するフラグを定義します。

```
7 \newif\ifjsc@needsp@tch
8 \jsc@needsp@tchfalse
```

■ BXJS クラス特有の設定

長さ値の指定で式を利用可能にするため `calc` を読み込む。

```
9 \RequirePackage{calc}
```

クラスオプションで key-value 形式を使用するため `keyval` を読み込む。

```
10 \RequirePackage{keyval}
```

クラスの本体ではこの他に `geometry` パッケージが読み込まれる。

互換性のための補助パッケージを読み込む。

```
11 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
12   \let\jsAtEndOfClass\@gobble
13   \RequirePackage{bxjscompat}%
14 }{}
```

`\jsDocClass` [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等：`\jsArticle=bxjsarticle`、`\jsBook=bxjsbook`、`\jsReport=bxjsreport`、`\jsSlide=bxjsslide`。

```
15 \let\jsArticle=a
16 \let\jsBook=b
17 \let\jsReport=r
18 \let\jsSlide=s
19 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
20 %<book>\let\jsDocClass\jsBook
```

```

21 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
22 %<slide>\let\jsDocClass\jsSlide

\jsEngine [暗黙文字トークン] エンジン (TEX の種類) の種別: j = pTEX 系、x = XYTEX、p =
pdfTEX (含 DVI モード)、l = LuaTEX、J = NTT jTEX、O = Omega 系、n = 以上の何
れでもない。

23 \let\jsEngine=n
24 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
25   \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
26   \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
27   \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
28 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
29 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
30 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=O}
31 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
32 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
33 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=l}

\ifjsWithupTeX [スイッチ] エンジンが (内部漢字コードが Unicode の) upTEX であるか。
34 \newif\ifjsWithupTeX
35 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
36   \jsWithupTeXtrue
37 \fi\fi
38 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX

\ifjsWithpTeXng [スイッチ] エンジンが pTEX-ng であるか。
39 \newif\ifjsWithpTeXng
40 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}

\ifjsWitheTeX [スイッチ] エンジンが  $\epsilon$ -TEX 拡張をもつか。
41 \newif\ifjsWitheTeX
42 \bxjs@test@engine\epsilonTeXversion{\jsWitheTeXtrue}

非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
※ NTT jTEX と Omega 系。

43 \let\bxjs@tmpa\relax
44 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
45 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
46 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
47 \else
48   \ClassError\bxjs@clsname
49   {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
50   {It's a fatal error. I'll quit right now.}
51   \expandafter\@firstofone
52 \fi{\endinput\@@end}

\bxjs@protected  $\epsilon$ -TEX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
53 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected

```

```

54 \else \let\bxjs@protected\@empty
55 \fi

\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。
56 \ifjsWitheTeX
57 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
58 \else
59 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand*}
60 \fi

\ifjsInPdfMode [スイッチ] pdf $\TeX$  / Lua $\TeX$  が PDF モードで動作しているか。
※ Lua $\TeX$  0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
61 \newif\ifjsInPdfMode
62 \@nameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}
63 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
64 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning
65 \RequirePackage{ifpdf}
66 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
67 \@nameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
68 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf

\bxjs@cond \bxjs@cond\ifXXX……\fi{⟨真⟩}{⟨偽⟩}
 $\TeX$  の if-文 ( $\ifXXX……\langle\text{真}\rangle\else\langle\text{偽}\rangle\fi$ ) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。
69 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%
70 #1\expandafter\@firstoftwo
71 \else\expandafter\@secondoftwo
72 \fi}

\bxjs@cslet \bxjs@cslet{⟨名前 1⟩}\制御綴 :
73 \def\bxjs@cslet#1{%
74 \expandafter\let\csname#1\endcsname}

\bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{⟨名前 1⟩}{⟨名前 2⟩} :
75 \def\bxjs@csletcs#1#2{%
76 \expandafter\let\csname#1\expandafter\endcsname\csname#2\endcsname}

\bxjs@catopt \bxjs@catopt{⟨文字列 1⟩}{⟨文字列 2⟩} : 2 つの文字列を , で繋いだ文字列。ただし片方が空の場合は , を入れない。完全展開可能。
77 \def\bxjs@catopt#1#2{%
78 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}

\jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)
79 \def\jsAtEndOfClass{%
80 \expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@k\endcsname}

```

Lua \TeX の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリコードを一時的に 11 に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の Lua^AT_EX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処理は特段の意味を持たない。しかし、昔は 12 になっていて、この場合、日本語文字のコントロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを 11 に変更する必要がある。

```

81 \@onlypreamble\bxjs@restore@jltrcc
82 \let\bxjs@restore@jltrcc\@empty
83 \if 1\jsEngine
84 \def\bxjs@change@jltrcc#1{%
85   \xdef\bxjs@restore@jltrcc{%
86     \bxjs@restore@jltrcc
87     \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%
88   \catcode`#1=11\relax}
89 \@tfor\bxjs@x:=西曆\do
90   {\expandafter\bxjs@change@jltrcc\bxjs@x}
91 \fi

```

`\jsInhibitGlue` は `\inhibitglue` が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何もしない。

```

92 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
93   \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

```

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了させる。

```

94 \if@compatibility
95   \ClassError\bxjs@clsname
96   {Something went chaotic!\MessageBreak
97     (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
98     I cannot go a single step further...}
99   {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak
100    then there'll still be hope....}
101   \expandafter\@firstofone
102 \else \expandafter\@gobble
103 \fi{\typeout{Farewell!}}\endinput\@@end}

```

2 オプション

これらのクラスは `\documentclass{jsarticle}` あるいは `\documentclass[オプション]{jsarticle}` のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ（論理変数）を定義します。

`\if@restonecol` 段組のときに真になる論理変数です。

```
104 \newif\if@restonecol
```

`\if@titlepage` これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

```
105 \newif\if@titlepage
```

`\if@openright` `\chapter`, `\part` を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要

するに片起こし，奇数ページ起こしになります。

```
106 %<book|report>\newif\if@openright
```

```
\if@openleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。
```

```
107 %<book|report>\newif\if@openleft
```

```
\if@mainmatter 真なら本文，偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。
```

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

```
108 %<book|report>\newif\if@mainmatter \@mainmattertrue
```

```
\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。
```

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

```
109 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse
```

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 1m^2 ，縦横比 $1:\sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1, A2, …です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が 1.5m^2 ですが，ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は $1000\text{mm} \times 1414\text{mm}$ です。このため， \LaTeX 2_ϵ の `b5paper` は $250\text{mm} \times 176\text{mm}$ ですが， $\text{p}\text{\LaTeX 2}_\epsilon$ の `b5paper` は $257\text{mm} \times 182\text{mm}$ になっています。ここでは $\text{p}\text{\LaTeX 2}_\epsilon$ にならって JIS に従いました。

デフォルトは `a4paper` です。

`b5var` (B5 変形, $182\text{mm} \times 230\text{mm}$)，`a4var` (A4 変形, $210\text{mm} \times 283\text{mm}$) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に `geometry` パッケージを用いる。用紙サイズ設定は `geometry` に渡すオプションの指定と扱われる。

```
110 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
111 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
112 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
113 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
114 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
115 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper{{257trueem}{364trueem}}}
116 \DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{{182trueem}{257trueem}}}
117 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{{128trueem}{182trueem}}}
118 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
119 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
120 \DeclareOption{b4j}{\bxjs@setpaper{{257trueem}{364trueem}}}
```



```

121 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{257truemm}}}
122 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
123 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}

```

※...var を Pandoc で使えるように後ろに paper をつけた形を用意する。

```

124 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
125 \DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
126 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
127 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
128 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}

```

■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```

129 \newif\if@landscape
130 \@landscapefalse
131 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}

```

■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったの、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

```

132 \newif\if@slide

```

BXJS ではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

```

133 %<!slide>\@slidefalse
134 %<slide>\@slidetrue

```

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに、8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです（従来の 20pt も残しました）。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から 10 を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag* を新設しました。

\@ptsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は

`\jsUnusualPtSize` (= -20) にする。

```
135 \newcommand{\@ptsize}{0}
136 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
137 \def\jsUnusualPtSize{-20}
```

`\bxjs@setbasefontsize` 基底フォントサイズを実際に変更する。

```
138 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
139   \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
140   \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}%
141   \ifdim\@tempdima=10pt      \long\def\@ptsize{0}%
142   \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}%
143   \else\ifdim\@tempdima=12pt  \long\def\@ptsize{2}%
144   \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}
```

`\bxjs@setbasefontlength` `base`、`jbase` で指定される長さ（式）のための特別な `\setlength`。与えられた式が“(実数)Q”の形の場合、Q 単位の長さを代入する（この場合“式”は使えない）。

※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、 \LaTeX はファイルの読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で `\jq` をサポートすることは原理的に不可能である。

```
145 \def\bxjs@setbasefontlength#1#2{%
```

ここで `true` の長さが使われるのは不合理なので、式が“true”を含む場合には警告を出す。

```
146   \bxjs@setbasefontlength@a#2true\@nnil
```

式の末尾が“Q”である時は特別に扱い、それ以外は `\setlength` に移譲する。

```
147   \ifx j\jsEngine \setlength#1{#2}%
148   \else
149     \bxjs@setbasefontlength@b#2\@nil Q\@nil\@nnil
150     \ifx\bxjs@tmpa\relax \setlength#1{#2}%
151     \else \@tempdimc0.25mm #1=\bxjs@tmpa\@tempdimc
152     \fi
153   \fi}
154 \def\bxjs@setbasefontlength@b#1Q\@nil#2\@nnil{%
155   \ifx\@nnil#2\@nnil \let\bxjs@tmpa\relax
156   \else \def\bxjs@tmpa{#1}%
157   \fi}
158 \def\bxjs@setbasefontlength@a#1true#2\@nnil{%
159   \ifx\@nnil#2\@nnil\else
160     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
161     {You should not use 'true' lengths here}%
162   \fi}
```

`\ifjsc@mag` は「`\mag` を使うか」を表すスイッチ。

`\ifjsc@mag@xreal` は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

```
163 \newif\ifjsc@mag
164 \newif\ifjsc@mag@xreal
165 %\let\jsc@magscale\@undefined
166 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
```

```

167 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
168 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
169 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
170 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
171 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
172 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
173 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
174 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
175 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
176 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
177 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
178 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
179 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
180 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
181 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
182 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
183 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
184 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}

```

JS クラス互換の magstyle 設定オプション。

```

185 \DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}
186 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
187 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}

```

■ トンボオプション トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は p_{La}T_EX 2_ε 本体で行います (plcore.dtx 参照)。オプション `tombow` で日付付きのトンボ、オプション `tombo` で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ `\hour`, `\minute` は p_{La}T_EX 2_ε 本体で宣言されています。

取りあえず、p_TE_X 系の場合に限り、JS クラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```

188 \if j\jsEngine
189 \hour\time \divide\hour by 60\relax
190 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
191 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
192 \DeclareOption{tombow}{%
193   \tombowtrue \tombowdatetrue
194   \setlength{\@tombowwidth}{.1\p}%
195   \@bannertoken{%
196     \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
197     \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}}%
198   \maketombowbox}
199 \DeclareOption{tombo}{%
200   \tombowtrue \tombowdatefalse
201   \setlength{\@tombowwidth}{.1\p}%

```

```
202 \maketombowbox}
203 \fi
```

■面付け オプション `mentuke` で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これもアスキー版のままです。

```
204 \if j\jsEngine
205 \DeclareOption{mentuke}{%
206 \tombowtrue \tombowdatefalse
207 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
208 \maketombowbox}
209 \fi
```

■両面, 片面オプション `twoside` で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。
[2003-04-29] `vartwoside` でどちらのページも傍注が右側になります。

```
210 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
211 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
212 \DeclareOption{vartwoside}{\@twosidetrue \@mparswitchfalse}
```

■二段組 `twocolumn` で二段組になります。

```
213 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
214 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
```

■表題ページ `titlepage` で表題・概要を独立したページに出力します。

```
215 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
216 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
```

■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを `openright` と表すことにしています。 `openany` で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] `openright` は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは \LaTeX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、`jsclasses` では新たに `openleft` も追加しました。

```
217 %<book|report>\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse}
218 %<book|report>\DeclareOption{openleft}{\@openlefttrue\@openrightfalse}
219 %<book|report>\DeclareOption{openany}{\@openrightfalse\@openleftfalse}
```

■`eqnarray` 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。

`eqnarray` \LaTeX の `eqnarray` 環境では `&` でできるアキが大きすぎるようですので、少し小さくします。また、中央の要素も `\displaystyle` にします。

```
220 \def\eqnarray{%
221 \stepcounter{equation}%
222 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
```

```

223 \global\@eqnswtrue
224 \m@th
225 \global\@eqcnt\z@
226 \tabskip\@centering
227 \let\\\@eqnocr
228 $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
229     \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnse1
230     &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{##}$\hfil
231     &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
232     &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
233     \tabskip\z@skip
234 \cr}

```

leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出力されます。森本さんにしただって訂正しました。

```

235 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
236 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}
237 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
238 \def\eqnarray{%
239     \stepcounter{equation}%
240     \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
241     \global\@eqnswtrue\m@th
242     \global\@eqcnt\z@
243     \tabskip\mathindent
244     \let\=\@eqnocr
245     \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
246     \ifvmode
247         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
248     \fi
249     \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
250     \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
251     \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
252     \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
253     $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
254     \bgroup
255     \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnse1
256     &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{##}$\hfil
257     &\global\@eqcnt\tw@
258     $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
259     &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
260     \tabskip\z@skip\cr
261 }

```

■文献リスト 文献リストを open 形式（著者名や書名の後に改行が入る）で出力します。これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。

```

262 % \DeclareOption{openbib}{%
263 %     \AtEndOfPackage{%
264 %         \renewcommand\@openbib@code{%

```

```

265 %      \advance\leftmargin\bibindent
266 %      \itemindent -\bibindent
267 %      \listparindent \itemindent
268 %      \parsep \z@}%
269 %      \renewcommand\newblock{\par}}

```

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォントしか使えません。AMSTeX や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん使うと “Too many math alphabets ...” というエラーが起こってしまいます。disablejfam オプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラスでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam [暗黙文字トークン] enablejfam オプションの状態：

```

270 %\let\bxjs@enablejfam\undefined

enablejfam オプションの処理。
271 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
272 \def\bxjs@kv@enablejfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f}
273 \def\bxjs@kv@enablejfam@default{\let\bxjs@enablejfam\undefined}
274 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
275   \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

```

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

```

276 \DeclareOption{disablejfam}{\let\bxjs@enablejfam=f}

```

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せにより、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。

[2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft JS クラスは \ifdraft という公開名のスイッチを用いているが、これは ifdraft パッケージと衝突するので、代わりに \ifjsDraft の名前を用い、本文開始時に \ifdraft が未定義の場合に限り、\ifjsDraft を \ifdraft にコピーする処理にする。

※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、\ifdraft は 2.0 版で廃止を予定する。

```

277 \let\ifjsDraft\iffalse
278 \@onlypreamble\bxjs@draft
279 \def\bxjs@draft#1{%
280   \expandafter\let\expandafter\ifjsDraft\csname if#1\endcsname}

```

```

281 \DeclareOption{draft}{\bxjs@draft{true}\setlength\overfullrule{5pt}}
282 \DeclareOption{final}{\bxjs@draft{false}\setlength\overfullrule{0pt}}
283 \AtBeginDocument{%
284   \expandafter\ifx\csname ifdraft\endcsname\relax
285     \expandafter\let\csname ifdraft\endcsname\expandafter\endcsname
286     \csname ifjsDraft\endcsname
287   \fi}

```

■和文フォントメトリックの選択 ここでは新しい jis フォントメトリックを標準で使いますが、古い min10, goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。また、winjis オプションで winjis メトリックが使えます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize [スイッチ] papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプションで無効にできる。

※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。

```

288 \newif\ifbxjs@papersize
289 \bxjs@papersizetrue
290 \DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}
291 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}

```

■英語化 オプション english を新設しました。

```

292 \newif\if@english
293 \@englishfalse
294 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}

```

■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していましたが、新しく jsreport クラスも作りました。どちらでも好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み L^AT_EX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの

動作となります。デフォルトは `jslogo` で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、`nojslogo` を既定とする。

```
295 \newif\if@jslogo \@jslogofalse
296 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
297 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}
```

■BXJS 特有のオプションの一覧

- エンジンオプション：`xelatex` 等。
- ドライバオプション：`dvipdfmx` 等。
- 複合設定オプション：`pandoc` 等。
- `nopapersize`：`papersize`（既定で有効）の否定。
- `zw` / `noz`：`\jsZw` と等価な命令として `\zw` を定義する／しない。
- `js` / `nojs`：JS クラスを読込済として扱う／扱わない。
- `precisetext` / `noprecisetext`： \XeTeX の “generateactualtext” を有効／無効にする。
- `simplejasetup` / `nosimplejasetup`： \XeTeX の “linebreaklocale” を有効／無効にする。
- `bigcode` / `nobigcode`： \upTeX で CMap として UTF8-UCS2 の代わりに UTF8-UTF16 を使う／使わない。
- `oldfontcommands` / `nooldfontcommands`：古い “二文字フォント命令” に対する警告を抑止する／しない。
- `base=<dimen>`：基底フォントサイズを直接指定する。（`xxpt` オプションの代用なので、既定値は 10pt である。）
- `jbase=<dimen>`：基底フォントサイズを “和文規準で” 直接指定する。
- `scale=<real>`：和文フォントのスケールを表すマクロ `\jsScale` の値を設定する。もちろんこの値を何らかの方法で和文処理モジュールに渡さないと意味を成さない。既定値は 0.924715 (= 13Q/10pt)。
- `noscale`：`scale=1` と等価。
- `mag=<int>`：`\mag` 値の直接設定。既定は `base` から算出する。
- `paper={<dimen:width>}{<dimen:height>}`：用紙サイズ設定。用紙サイズオプションの代用で、既定値は `a4paper` 相当。
- `ja=<name>`：使用する和文ドライバの指定。
- `jafont=<name>`：和文フォントプリセットの指定。
- `japaram=<name>`：和文フォントパラメタの指定。
- `magstyle=<name>`：“版面拡大” の実現方法の選択。
- `dvi=<name>`：DVI モードの時のみに参照されるドライバ指定。
- `geometry={class | user}`：`geometry` パッケージの読込を自動的に行うかユーザに

任せるか。

- `fancyhdr=<bool>` : `fancyhdr` パッケージ用の調整を行うか。
- `layout=<name>` : レイアウト変種の指定。
- `textwidth-limit=<number>` : `bxjsbook` における、`\textwidth` の上限の全角単位での値。
- `paragraph-mark=<char>` : パラグラフのマーク。
- `whole-zw-lines=<bool>` : 行長を全角単位に丸めるか。
- `hyperref-enc=<bool>` : `hyperref` の文字コード指定補正を行うか。

`\bxjs@invscale` `\bxjs@invscale` は $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば `\bxjs@invscale\dimX{1.3}` は `\dimX=1.3\dimX` の逆の演算を行う。

※局所化の `\begingroup`～`\endgroup` について、以前は `\group`～`\egroup` を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが 128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
298 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
299 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259
300 \def\bxjs@isc@sl@h{65539 }
301 \def\bxjs@invscale#1#2{%
302   \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
303   \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@
304     \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@ccclvi
305     \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@ccclvi
306   \else
307     \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb
308     \multiply\@tempcnta\p@ \let\bxjs@isc@sl\bxjs@isc@sl@h
309   \fi
310   \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
311   \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
312   \@tempdimb\@tempcnta\@ne
313   \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb
314   \advance\@tempcnta\bxjs@isc@sl \@tempdimc\@tempcnta\@ne
315   \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
316     \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc
317     \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
318     \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
319       \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
320     \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
321   \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
322   \endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}
```

■複合設定オプション

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断さ

れる場合に用意される。

`\bxjs@composite@proc` 複合設定オプションのための遅延処理マクロ。

```
323 \let\bxjs@composite@proc\relax
```

`pandoc` オプションは、Pandoc で \LaTeX 用の既定テンプレートを用いて他形式から \LaTeX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

```
324 \DeclareOption{pandoc}{%
```

和文ドライバを `pandoc` に、エンジン指定を `autodetect-engine` に変更する。

※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

```
325 \def\bxjs@composite@proc{%
326   \bxjs@oldfontcommandstrue
327   \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%
328   \let\bxjs@engine@given=*\%
```

ドライバオプションを `dvi=dvipdfmx` 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる (オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

```
329 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
330 \bxjs@dvi@opttrue}
```

■エンジン・ドライバオプション

`\bxjs@engine@given` オプションで明示されたエンジンの種別。

```
331 %\let\bxjs@engine@given\@undefined
```

`\bxjs@engine@opt` 明示されたエンジンのオプション名。

```
332 %\let\bxjs@engine@opt\@undefined
```

エンジン明示指定のオプションの処理。

※ 0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は `...latex` に限定する。`xetex` や `pdfTeX` は一般的な \LaTeX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。

```
333 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
334   \let\bxjs@engine@given=*\%
335 \DeclareOption{latex}{%
336   \def\bxjs@engine@opt{latex}%
337   \let\bxjs@engine@given=n}%
338 \DeclareOption{platex}{%
339   \def\bxjs@engine@opt{platex}%
340   \let\bxjs@engine@given=j}%
341 \DeclareOption{uplatex}{%
342   \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
343   \let\bxjs@engine@given=u}%
344 \DeclareOption{xelatex}{%
345   \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
```

```

346 \let\bxjs@engine@given=x}
347 \DeclareOption{pdflatex}{%
348 \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
349 \let\bxjs@engine@given=p}
350 \DeclareOption{lualatex}{%
351 \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
352 \let\bxjs@engine@given=l}
353 \DeclareOption{platex-ng}{%
354 \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
355 \let\bxjs@engine@given=g}
356 \DeclareOption{platex-ng*}{%
357 \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
358 \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
359 \let\bxjs@engine@given=g}

```

`\bxjs@driver@given` オプションで明示されたドライバの種別。

```

360 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
361 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
362 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
363 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
364 \let\bxjs@driver@@xetex=3
365 \let\bxjs@driver@@dvips=4
366 \let\bxjs@driver@@none=5

```

`\bxjs@driver@opt` 明示された「ドライバ指定」のオプション名。

```

367 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined

368 \DeclareOption{dvips}{%
369 \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
370 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
371 \DeclareOption{dviout}{%
372 \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
373 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
374 \DeclareOption{xdvi}{%
375 \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
376 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
377 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
378 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
379 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
380 \DeclareOption{nodvidriver}{%
381 \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
382 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
383 \DeclareOption{pdftex}{%
384 \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
385 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
386 \DeclareOption{luatex}{%
387 \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
388 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
389 \DeclareOption{xetex}{%

```

```

390 \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
391 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}

```

「もし DVI モードであればドライバを dvipdfmx にする」というオプション。
 ※ 1.2 版で dvi オプションが新設されたが、互換性のためこのオプションも残す。

```

392 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
393 \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}

```

■その他の BXJS 独自オプション

`\ifbxjs@usezw` `\jsZw` の同義語として `\zw` を使えるようにするか。既定は真。

```

394 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue

```

`zw`、`noz` オプションの定義。

```

395 \DeclareOption{noz}{%
396 \bxjs@usezwfalse}
397 \DeclareOption{zw}{%
398 \bxjs@usezwtrue}

```

`\ifbxjs@disguise@js` JS クラスの派生クラスのふりをするか。既定は真。

```

399 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue

```

`nojs`、`js` オプションの定義。

```

400 \DeclareOption{nojs}{%
401 \bxjs@disguise@jsfalse}
402 \DeclareOption{js}{%
403 \bxjs@disguise@jstrue}

```

`\ifbxjs@precisetext` \TeX の “generateactualtext” を有効にするか。既定は偽。

```

404 \newif\ifbxjs@precisetext

```

`noprecisetext` / `precisetext` オプションの定義。

```

405 \DeclareOption{noprecisetext}{%
406 \bxjs@precisetextfalse}
407 \DeclareOption{precisetext}{%
408 \bxjs@precisetexttrue}

```

`\ifbxjs@simplejasetup` \TeX の “linebreaklocale” を有効にするか。既定は真（であるが多くの場合は後に無効化される）。

```

409 \newif\ifbxjs@simplejasetup \bxjs@simplejasetuptrue

```

`nosimplejasetup` / `simplejasetup` オプションの定義。

```

410 \DeclareOption{nosimplejasetup}{%
411 \bxjs@simplejasetupfalse}
412 \DeclareOption{simplejasetup}{%
413 \bxjs@simplejasetuptrue}

```

`\ifbxjs@bigcode` `upTeX` で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、このファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、オプションで指定することとする。

```
414 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodefalse
```

その上で、「`TeX` 環境がある程度新しければ利用可能であろう」と判断し `bxjs@bigcode` の既定値を真とする。具体的な判断基準として、「`TeX` のバージョンが 3.14159265 (2014 年 1 月) 以上であるか」を採用する。

```
415 \edef\bxjs@tmpa{\expandafter\noexpand\csname\endcsname}
```

```
416 \def\bxjs@tmpb#1 #2#3\@nil{%
```

```
417 \ifx1#2\bxjs@bigcodetrue \fi}
```

```
418 \expandafter\bxjs@tmpb\meaning\bxjs@tmpa1 0\@nil
```

`nobigcode` / `bigcode` オプションの定義。

```
419 \DeclareOption{nobigcode}{%
```

```
420 \bxjs@bigcodefalse}
```

```
421 \DeclareOption{bigcode}{%
```

```
422 \bxjs@bigcodetrue}
```

`\ifbxjs@oldfontcommands` `\allowoldfontcommands` を既定で有効にするか。

```
423 \newif\ifbxjs@oldfontcommands
```

`nooldfontcommands`、`oldfontcommands` オプションの定義。

※ `oldfontcommands` オプションの名前は memoir クラスに倣った。ちなみに KOMA-Script では `enabledeprecatedfontcommands` であるがこれはチョットアレなので避けた。

```
424 \DeclareOption{nooldfontcommands}{%
```

```
425 \bxjs@oldfontcommandsfalse}
```

```
426 \DeclareOption{oldfontcommands}{%
```

```
427 \bxjs@oldfontcommandstrue}
```

■keyval 型のオプション

```
428 \def\bxjs@setkey{%
```

```
429 \expandafter\bxjs@setkey@a\expandafter{\CurrentOption}}
```

```
430 \def\bxjs@setkey@a{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}
```

```
431 \DeclareOption*{\bxjs@setkey}
```

`\bxjs@safe@setkeys` 未知のキーに対してエラー無しで無視する `\setkeys`。

```
432 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
```

```
433 \let\bxjs@KV@errx\KV@errx
```

```
434 \let\KV@errx\bxjs@safe@setkeys@a
```

```
435 \setkeys{#1}{#2}%
```

```
436 \let\KV@errx\bxjs@KV@errx}
```

```
437 \def\bxjs@safe@setkeys@a#1{}
```

```
\bxjs@set@keyval \bxjs@set@keyval{\key}{\value}{\error)}
```

`\bxjs@kv@⟨key⟩@⟨value⟩` が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。

```
438 \def\bxjs@set@keyval#1#2#3{%
439   \expandafter\let\expandafter\bxjs@next\csname bxjs@kv@#1@#2\endcsname
440   \ifx\bxjs@next\relax
441     \bxjs@error@keyval{#1}-{#2}%
442     #3%
443   \else \bxjs@next
444   \fi}
445 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
446 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
447   \ClassError\bxjs@clsname
448   {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
```

`\ifbxjs@scaleset` 和文スケール値が指定されたか。

```
449 \newif\ifbxjs@scaleset
```

`\jsScale` 〔実数値マクロ〕和文スケール値。

```
450 \def\jsScale{0.924715}
```

`base` オプションの処理。

```
451 \define@key{bxjs}{base}{\bxjs@setbasefontsize{#1}}
```

`jbase` オプションの処理。ここでは `\jsScale` の値を使用する。`scale` の処理との順序依存を消すため、`jbase` の処理の実行を遅延させている。

```
452 \@onlypreamble\bxjs@do@opt@jbase
453 \let\bxjs@do@opt@jbase\relax
454 \define@key{bxjs}{jbase}{\bxjs@setjbasefontsize{#1}}
455 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
456   \def\bxjs@do@opt@jbase{%
457     \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
458     \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
459     \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}}}
```

`scale` オプションの処理。

```
460 \define@key{bxjs}{scale}{%
461   \bxjs@scalesettrue
462   \edef\jsScale{#1}}
```

`noscale` オプションの処理。

```
463 \DeclareOption{noscale}{%
464   \bxjs@scalesettrue
465   \def\jsScale{1}}
```

`\bxjs@param@mag` `mag` オプションの値。

```
466 \let\bxjs@param@mag\relax
```

`mag` オプションの処理。

```
467 \define@key{bxjs}{mag}{\edef\bxjs@param@mag{#1}}
```

`paper` オプションの処理。

```
468 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
```

`\bxjs@jadriver` 和文ドライバの名前。

```
469 \let\bxjs@jadriver\relax
470 %\let\bxjs@jadriver@given\@undefined
```

`ja` オプションの処理。

※ `jadriver` は 0.9 版で用いられた旧称。

※単なる `ja` という指定は無視される (Pandoc 対策)。

```
471 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver{#1}}
472 \define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%
473   \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver{#1}\fi}
```

`\jsJaFont` 和文フォント設定の名前。

```
474 \let\jsJaFont\@empty
```

`jafont` オプションの処理。

```
475 \define@key{bxjs}{jafont}{\edef\jsJaFont{#1}}
```

`\jsJaParam` 和文ドライバパラメタの文字列。

```
476 \let\jsJaParam\@empty
```

`japaram` オプションの処理。

```
477 \define@key{bxjs}{japaram}{\edef\jsJaParam{#1}}
```

`\bxjs@magstyle` `magstyle` 設定値。(古いイマイチな名前。)

```
478 \let\bxjs@magstyle@mag=m
479 \let\bxjs@magstyle@real=r
480 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
```

(新しい素敵な名前。)

※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、`\bxjs@magstyle@xreal` の方を優先させる。

```
481 \let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
482 \let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real
483 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
```

`\bxjs@magstyle@default` は既定の値を表す。

```
484 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
485 \ifx l\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
486   \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
487 \fi\fi
488 \ifjsWithpTeXng
489   \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
490 \fi
491 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
```

`magstyle` オプションの処理。

```
492 \define@key{bxjs}{magstyle}{%
493   \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
```

```

494   bxjs@magstyle@#1\endcsname
495   \ifx\bxjs@magstyle\relax
496     \ClassError\bxjs@clsname
497     {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
498     \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
499   \fi}

```

\bxjs@geometry geometry オプションの値。

```

500 \let\bxjs@geometry@class=c
501 \let\bxjs@geometry@user=u
502 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

```

geometry オプションの処理。

```

503 \define@key{bxjs}{geometry}{%
504   \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
505     bxjs@geometry@#1\endcsname
506   \ifx\bxjs@geometry\relax
507     \ClassError\bxjs@clsname
508     {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
509     \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
510   \fi}

```

\ifbxjs@fancyhdr [スイッチ] fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。

```

511 \newif\ifbxjs@fancyhdr \bxjs@fancyhdrtrue

```

fancyhdr オプションの処理。

```

512 \let\bxjs@kv@fancyhdr@true\bxjs@fancyhdrtrue
513 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
514 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
515   \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}

```

\ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。

```

516 \newif\ifbxjs@dvi@opt

```

DVI モードのドライバとドライバ種別との対応。

```

517 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
518 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
519 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
520 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
521 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none

```

dvi オプションの処理。

```

522 \define@key{bxjs}{dvi}{%
523   \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
524     bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
525   \ifx\bxjs@tmpa\relax
526     \ClassError\bxjs@clsname
527     {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
528   \else

```



```

\bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
529 \def\bxjs@driver@opt{#1}%
530 \let\bxjs@driver@given\@undefined
531 \bxjs@dvi@opttrue
532 \fi}

\ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
※ layout が v1 の場合はアレになる。
533 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin

\ifbxjs@force@chapterabstract [スイッチ] abstract 環境を chapterabstract にするか。
※ bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
534 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
535 %<book>\bxjs@force@chapterabstracttrue

layout オプションの処理。
536 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
537 %<book>\bxjs@layout@buggyhmargintrue
538 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
539 }
540 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
541 %<book>\bxjs@layout@buggyhmarginfalse
542 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
543 }
544 \define@key{bxjs}{layout}{%
545 \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}

\bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。 \textwidth の上限。
546 %\let\bxjs@textwidth@limit\@undefined
547 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
548 \edef\bxjs@textwidth@limit{#1}}

\bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。 パラグラフのマーク。
549 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
550 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
551 \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}

\ifbxjs@whole@zw@lines [スイッチ] whole-zw-lines の指定値。
552 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue
553 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue
554 \let\bxjs@kv@wholezwlines@false\bxjs@whole@zw@linesfalse
555 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}[true]{\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}

\ifbxjs@jaspace@cmd [スイッチ] jaspacercmd の指定値。
556 \newif\ifbxjs@jaspace@cmd \bxjs@jaspace@cmdtrue
557 \let\bxjs@kv@jaspacercmd@true\bxjs@jaspace@cmdtrue
558 \let\bxjs@kv@jaspacercmd@false\bxjs@jaspace@cmdfalse
559 \define@key{bxjs}{jaspacercmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacercmd}{#1}{}}
560 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacercmd}{#1}{}}

```

`\ifbxjs@fix@at@cmd` [スイッチ] `fix-at-cmd` の指定値。

```
561 \newif\ifbxjs@fix@at@cmd \bxjs@fix@at@cmdtrue
562 \let\bxjs@kv@fixatcmd@true\bxjs@fix@at@cmdtrue
563 \let\bxjs@kv@fixatcmd@false\bxjs@fix@at@cmdfalse
564 \define@key{bxjs}{fix-at-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{fixatcmd}{#1}{}}
```

`\ifbxjs@hyperref@enc` [スイッチ] `hyperref-enc` の指定値。

```
565 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
566 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
567 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@false\bxjs@hyperref@encfalse
568 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}
```

`\bxjs@everyparhook` `everyparhook` の指定値。

```
569 \chardef\bxjs@everyparhook@none=0
570 \chardef\bxjs@everyparhook@compat=1
571 \chardef\bxjs@everyparhook@modern=2
572 \if j\jsEngine
573 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat
574 \else
575 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern
576 \fi
577 \def\bxjs@kv@everyparhook@none{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@none}
578 \def\bxjs@kv@everyparhook@compat{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat}
579 \def\bxjs@kv@everyparhook@modern{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern}
580 \define@key{bxjs}{everyparhook}{\bxjs@set@keyval{everyparhook}{#1}{}}
```

■ オプションの実行

L^AT_EX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれると正常に処理ができない。これに対処する為 `\@removeelement` の実装に少し手を加える(仕様は変わらない)。

※クラスに `\DeclareOption*` がある場合は `\@unusedoptions` は常に空のままであることを利用している。

```
581 \let\bxjs@ltx@removeelement\@removeelement
582 \def\@removeelement#1#2#3{%
583 \def\reserved@a{#2}%
584 \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty
585 \else \bxjs@ltx@removeelement{#1}{#2}{#3}%
586 \fi}
```

デフォルトのオプションを実行し、dvi ファイルの先頭に dvips の `papersize special` を書き込みます。この special は dvips や最近の dviout が対応しています。multicols や url を `\RequirePackage` するのはやめました。

```
587 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
```

```

588 %<book>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,onecolumn,titlepage,openright,final}
589 %<report>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}
590 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}
591 \ProcessOptions\relax
592 \bxjs@composite@proc

  後処理

593 \if@slide
594   \def\maybeblue{\@ifundefined{ver@color.sty}{}{\color{blue}}}
595 \fi
596 \if@landscape
597   \setlength\@tempdima {\paperheight}
598   \setlength\paperheight{\paperwidth}
599   \setlength\paperwidth {\@tempdima}
600 \fi

```

■ グローバルオプションの整理

グローバルオプションのトークン列に { } が含まれていると、やはり後のパッケージの読み込みで不具合を起こすようである (\ProcessOptions* がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

```

601 \@onlypreamble\bxjs@purge@brace@elts
602 \def\bxjs@purge@brace@elts{%
603   \def\bxjs@tmpa{\gobble}%
604   \expandafter\bxjs@purge@be@a\@classoptionslist,\@nil,%
605   \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
606 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@a
607 \def\bxjs@purge@be@a#1,{%
608   \ifx\@nil#1\relax\else
609     \bxjs@purge@be@b#1{}\@nil
610     \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
611     \expandafter\bxjs@purge@be@a
612   \fi}
613 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@b
614 \def\bxjs@purge@be@b#1#{\bxjs@purge@be@c}
615 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@c
616 \def\bxjs@purge@be@c#1\@nil{%
617   \ifx\@nil#1\@nil \@tempwattrue \else \@tempwafalse \fi}
618 \bxjs@purge@brace@elts

```

papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性があるため、グローバルオプションから外す。

```

619 \@expandtwoargs\@removeelement
620 {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
621 \@expandtwoargs\@removeelement
622 {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
623 \@expandtwoargs\@removeelement
624 {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

```

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが `uplatex` オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] `pLATEX`/ `upLATEX` を自動判別するオプション `autodetect-engine` を新設しました。`upLATEX` の場合は、グローバルオプションに `uplatex` を追加することで、自動判定に応じて `otf` パッケージにも `uplatex` オプションが渡るようにします。

[2016-11-11] `pLATEX` の場合は、オプション `uplatex` が指定されていれば必ずエラーを出します。`autodetect-engine` が有効になっていてもエラーを出しますが、これは `otf` パッケージに `uplatex` オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

現在の（正規化前の）和文ドライバの値を `\bxjs@jadriver@given` に保存する。

```
625 \ifx\bxjs@jadriver\relax\else
626   \let\bxjs@jadriver@given\bxjs@jadriver
627 \fi
```

エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するかを検査する。

```
628 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
629 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng
630   \let\bxjs@tmpb=g
631 \fi\fi
632 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
633   \let\bxjs@tmpb=u
634 \fi\fi
635 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
636   \let\bxjs@tmpb=n
637 \fi\fi
```

（この時点で `\bxjs@tmpb` は `\bxjs@engine@given` と同じ規則で分類したコードをもっている。）

```
638 \ifx *\bxjs@engine@given
639   \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
```

エンジン指定が `autodetect-engine` であり、かつ実際のエンジンが (u)pL^AT_EX だった場合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。

```
640 \ifx j\bxjs@engine@given
641   \g@addto@macro\@classoptionslist{,latex}
642 \else\ifx u\bxjs@engine@given
643   \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
644 \fi\fi
645 \fi
646 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
647   \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
648     \ClassError\bxjs@clsname
649     {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
650 \fi
```


```
651 \fi
```

エンジンが pT_EX-ng の場合、グローバルオプションに `uplatex` を追加する。

```
652 \ifjsWithpTeXng
```

```
653   \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
```

```
654 \fi
```

■ **ドライバ指定**  ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合するかを検査する。

```
655 \@tempswatrue
```

```
656 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
```

```
657   \ifjsInPdfMode
```

```
658     \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
```

```
659       \@tempswafalse
```

```
660     \fi
```

```
661 \else\ifx x\jsEngine
```

```
662   \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
```

```
663     \@tempswafalse
```

```
664   \fi
```

```
665 \else
```

```
666   \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
```

```
667     \@tempswafalse
```

```
668   \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
```

```
669     \@tempswafalse
```

```
670   \fi\fi
```

```
671   \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
```

```
672     \@tempswafalse
```

```
673   \fi\fi
```

```
674 \fi\fi
```

```
675 \fi
```

```
676 \if@tempswa\else
```

```
677   \ClassError\bxjs@clsname
```

```
678     {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
```

```
679 \fi
```

DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。

```
680 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
```

```
681 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
```

```
682 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
```

```
683 \else \@tempswatrue
```

```
684 \fi\fi\fi
```

```
685 \if@tempswa
```

ドライバオプションがない場合は警告を出す。

※ただし `ja` 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。

```
686 \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
```

```
687   \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
```

```
688     {No driver option is given}
```

```
689 \fi\fi
```

dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオプションに XXX を追加する。)

```

690 \ifbxjs@dvi@opt
691   \edef\bxjs@nxt{%
692     \let\noexpand\bxjs@driver@given
693     \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
694     \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
695     {,\bxjs@driver@opt}%
696   }\bxjs@nxt
697 \fi
698 \fi

```

エンジンが pTeX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、エンジンオプションが latex-ng* (*付) の場合、および既に dvipdfmx が指定されている場合を除く。

```

699 \ifjsWithpTeXng
700   \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
701     \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
702   \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
703     \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
704   \fi\fi
705 \fi

```

ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。

```

706 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none
707   \bxjs@papersizefalse
708 \fi

```

■その他の BXJS 特有の後処理 ☞ \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は minimal に変える。ただしエンジンが (u)pTeX である場合は standard に変える。

```

709 \def\bxjs@@minimal{minimal}
710 \ifx\bxjs@jadriver\relax
711   \ifx j\jsEngine
712     \def\bxjs@jadriver{standard}
713   \else
714     \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal
715   \fi
716 \fi

```

エンジンオプションがない場合はエラーを出す。

※ただし ja 非指定の場合はスキップする。

```

717 \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
718   \ifx\bxjs@engine@given\@undefined
719     \ClassError\bxjs@clsname
720     {An engine option must be explicitly given}%
721     {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak
722       engine option.\MessageBreak\@ehc}
723 \fi\fi

```

新しい Lua_T_EX (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されていた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag* であり、エラーの場合は既定値に置き換えられる。)

```

724 \ifx\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else
725   \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
726     \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
727     \ClassError\bxjs@clsname
728     {The engine does not support 'magstyle=usemag'}%
729     {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak
730       The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \@ehc}
731   \fi
732 \fi

```

オプション処理時に遅延させていた jbase の処理をここで実行する。

```

733 \bxjs@do@opt@jbase

```

\Cjascale 和文クラス共通仕様 (※ただし ZR 氏提唱) における、和文スケール値の変数。

```

734 \let\Cjascale\jsScale

```

8bit 欧文 T_EX の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を通用させるため。)

```

735 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
736   \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100
737     \catcode\@tempcnta\active
738     \advance\@tempcnta\@ne
739   \repeat
740 \fi

```

js オプション指定時は、jsarticle (または jsbook) クラスを読込済のように振舞う。

※「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に異常ではない。

```

741 \ifbxjs@disguise@js
742 %<book|report>\def\bxjs@js@clsname{jsbook}
743 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}
744 \@namedef{ver@\bxjs@js@clsname.cls}{2001/01/01 (bxjs)}
745 \fi

```

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

```

746 \g@addto@macro\@classoptionslist{,nosetpagesize}

```

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

```

747 \ifbxjs@oldfontcommands
748   \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}
749 \fi

```

■papersize スペシャルの出力 dvips の papersize スペシャルを出力します。これで dvips や新しい dviout で出力領域が自動設定できます。トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが、いわゆる「ノビ」サイズという縦横 1 インチずつ長い用紙に出力することを考えて、1 インチずつ加えました。ところが pL^AT_EX 2_ε はトンボ出力幅を両側に 1 インチとっていますので、dvips 使用時に

```
-0 -0.5in,-0.5in
```

というオプションを与えて両側 0.5 インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて 1 インチを 2 インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は `\stockwidth`、`\stockheight` と呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」`\stockwidth`、`\stockheight` を定義するようにしました。

BXJS では出力用紙サイズ記録は `geometry` パッケージが行う。

また、JS クラスと異なり、`\stockwidth`、`\stockheight` は常に定義される。

```
750 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
751 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
752 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname
753 % \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
754 \setlength{\stockwidth}{\paperwidth}
755 \setlength{\stockheight}{\paperheight}
756 \advance \stockwidth 2in
757 \advance \stockheight 2in
758 \fi
```

■基準となる行送り

`\n@baseline` 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

```
759 %<slide>\def\n@baseline{13}%
760 %<!slide>\ifdim\bxjs@param@basefontsize<10pt \def\n@baseline{15}%
761 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi
```

■拡大率の設定

`\bxjs@magstyle` の値に応じてスイッチ `jsc@mag` と `jsc@mag@xreal` を設定する。

```
762 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
763 \jsc@magtrue
764 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
765 \jsc@mag@xrealtrue
766 \fi\fi
```


サイズの変更は $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ のプリミティブ `\mag` を使って行います。9 ポイントについては行送りも若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / `\mag` に相当する `\inv@mag` を定義しました。`truein` を使っていたところを `\inv@mag in` に直しましたので、`geometry` パッケージと共存できると思います。なお、新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意：

- `geometry` 側でオプション `truedimen` を指定してください。
- `geometry` 側でオプション `mag` は使えません。

設定すべき `\mag` 値を (基底サイズ)/(10 pt) \times 1000 と算出。BXJS クラスでは、`\mag` を直接指定したい場合は、`geometry` 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

```
767 \ifx\bxjs@param@mag\relax
768   \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
769   \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25
770   \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
771   \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
772 \else
773 % mag 値が直接指定された場合
774   \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
775   \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@param@mag}
776   \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
777 % 有効な mag 値の範囲は 1--32768
778   \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
779   \advance\@tempcnta100000
780   \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\@tempdima=#2#3#4.#5\p@}
781   \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
782   \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
783 \fi
784 \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
785 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
786 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
787 \edef\jsc@magscale{\strip@pt\@tempdima}
788 \let\jsBaseFontSize\bxjs@param@basefontsize
789 %\typeout{\string\jsDocClass: \meaning\jsDocClass}
790 %\typeout{\string\jsEngine: \meaning\jsEngine}
791 %\typeout{\string\jsBaseFontSize: \jsBaseFontSize}
792 %\typeout{\string\bxjs@param@mag: \bxjs@param@mag}
793 %\typeout{\string\jsc@magscale: \jsc@magscale}
794 %\typeout{\string\ifjsc@mag: \meaning\ifjsc@mag}
795 %\typeout{\string\ifjsc@mag@xreal: \meaning\ifjsc@mag@xreal}
```

[2016-07-08] `\jsc@empt` および `\jsc@mmm` に、それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

`\mag` する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応

じて、`\jsc@mp` を `\p@?` と書く。その上で、`\mag` する場合は `?` を無視して `\p@` と解釈させ、`\mag` しない場合は `?` を英字扱いにして `\p@?` という制御綴を `\jsc@mp` と同値にする。
※（多分 2.0 版あたりで）JS クラスに合わせるため `\p@?` 表記を止める予定。

```

796 \newdimen\jsc@mp
797 \newdimen\jsc@mmm
798 \ifjsc@mag
799   \jsc@mp=1\p@
800   \jsc@mmm=1mm
801   \catcode\?=9 % \p@? read as \p@
802 \else
803   \jsc@mp=\jsc@magscale\p@
804   \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
805   \catcode\?=11 \let\p@?\jsc@mp
806 \fi
807 \chardef\bxjs@qmc=\catcode\?\relax

```

ここで pTeX の `zw` に相当する単位として用いる長さ変数 `\jsZw` を作成する。約束により、これは `\jsScale` × (指定フォントサイズ) に等しい。

`noz` 非指定時は `\zw` を `\jsZw` と同義にする。

```

808 \newdimen\jsZw
809 \jsZw=10\jsc@mp \jsZw=\jsScale\jsZw
810 \ifbxjs@usezw
811   \providecommand*\zw{\jsZw}
812 \fi

```

`\zwspace` 全角幅の水平空き。

```

813 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}

```

そして、`magstyle` が `nomag*` の場合は、NFSS にパッチを当てる。

```

814 \ifjsc@mag@xreal
815   \RequirePackage{type1cm}
816   \let\jsc@invscale\bxjs@invscale

```

ムニャムニャムニャ……。

```

817 \expandafter\let\csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax
818 \expandafter\let\csname OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax
819 \let\jsc@get@external@font\get@external@font
820 \def\get@external@font{%
821   \jsc@preadjust@extract@font
822   \jsc@get@external@font}
823 \def\jsc@fstrunc#1{%
824   \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
825   \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
826 \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
827   \if#5*\else
828     \edef\jsc@tmpa{#1%
829     \ifnum#2#3>\z@ .#2\ifnum#3>\z@ #3\fi\fi}%

```

```

830 \fi}
831 \def\jsc@preadjust@extract@font{%
832 \let\jsc@req@size\f@size
833 \dimen@f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
834 \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
835 \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
836 \let\f@size\jsc@ref@size}
837 \def\execute@size@function#1{%
838 \let\jsc@cref@size\f@size
839 \let\f@size\jsc@req@size
840 \csname s@fct@#1\endcsname}
841 \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
842 \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
843 \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
844 \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
845 \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
846 \def\gen@sfcnt{%
847 \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
848 \empty@sfcnt}
849 \def\genb@sfcnt{%
850 \edef\mandatory@arg{%
851 \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
852 \empty@sfcnt}
853 \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}
854 \fi

```

[2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている `\smallskip` の、単位 `pt` を `\jsc@mpt` に置き換えた `\jsc@smallskip` を定義します。これは `\maketitle` で用いられます。`\jsc@medskip` と `\jsc@bigskip` は必要ないのでコメントアウトしています。

```

\jsc@smallskip
\jsc@medskip 855 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
\jsc@bigskip 856 %\def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
857 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}

```

```

\jsc@smallskipamount
\jsc@medskipamount 858 \newskip\jsc@smallskipamount
859 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
\jsc@bigskipamount 860 %\newskip\jsc@medskipamount
861 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
862 %\newskip\jsc@bigskipamount
863 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt

```

[2016-07-11] 新しく追加した`\stockwidth`, `\stockheight` も`\mag`にあわせてスケールします。

[2017-01-11] トンボオブションが指定されているとき「だけ」`\stockwidth`, `\stockheight` が定義されています。

■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力します。

[2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。

```
864 % \ifpapersize
865 %   \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
866 %   \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
867 %   \iftombow
868 %     \advance \@tempdima 2truein
869 %     \advance \@tempdimb 2truein
870 %   \fi
871 %   \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
872 % \fi
```

3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、 \LaTeX の `\def\@{\spacefactor\@m}` という定義 ($\@m$ は 1000) では `I watch TV\@.` と書くと `V` とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次のような定義に直し、`I watch TV.\@` と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の \LaTeX で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて `{}` を補いました。

BXJS クラスでの変更点：

- `fix-at-cmd` オプションが偽の場合は再定義しない。
- 固定の 3000 でなく実際のピリオドの `sfcode` 値を使う。
- 「防御的な \@」での不具合を防ぐため、大文字直後の \@ は標準と同等の動作にする。

```
873 \chardef\bxjs@periodchar=`\ .
874 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{%
875   \ifnum\spacefactor<\@m \spacefactor\@m
876   \else \spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar
877   \fi}
878 \ifbxjs@fix@at@cmd
879   \def\@{\bxjs@SE{}}
880 \fi
```

4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令 (`\normalsize`, `\small` など) の実際の挙動の設定は、三つの引数をとる命令 `\setfontsize` を使って、たとえば

```
\setfontsize{\normalsize}{10}{16}
```

のようにして行います。これは

`\normalsize` は 10 ポイントのフォントを使い、行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の L^AT_EX の内部命令 `\xpt` を使っています。この `\xpt` の類は次のものがあり、L^AT_EX 本体で定義されています。

<code>\@vpt</code>	5	<code>\@vipt</code>	6	<code>\@viipt</code>	7
<code>\@viipt</code>	8	<code>\@ixpt</code>	9	<code>\@xpt</code>	10
<code>\@xipt</code>	10.95	<code>\@xiipt</code>	12	<code>\@xivpt</code>	14.4

ここでは `\setfontsize` の定義を少々変更して、段落の字下げ `\parindent`、和文文字間のスペース `\kanjiskip`、和文・欧文間のスペース `\xkanjiskip` を変更しています。

`\kanjiskip` は pL^AT_EX 2_ε で 0pt plus .4pt minus .5pt に設定していますが、これはそもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに、プラスになったりマイナスになったりするの、追い出しと追い込みの混在が生じ、統一性を欠きます。なるべく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが、ごくわずかなマイナスは許すことにしました。

`\xkanjiskip` については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あるいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても空けなくても同じ出力になります。

`\parindent` については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。

[2008-02-18] english オプションで `\parindent` を 1em にしました。

`\setfontsize` `\fontsize` 命令 (`\large` 等でなく) でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行されるように、`\setfontsize` ではなく `\set@fontsize` に対してパッチを当てるように変更。

```
881 \def\bxjs@tmpa{\def\set@fontsize##1##2##3}
882 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%
883   \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%
884 % 末尾にコードを追加
885   \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%
886     \size@update
887     \jsFontSizeChanged}%
888 }
```

`\jsFontSizeChanged` フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。`\jsZw` を再設定している。その後でユーザ定義用のフック `\jsResetDimen` を実行する。

```
889 \newcommand*\jsFontSizeChanged{%
890   \jsZw=\f@size\p@
891   \jsZw=\jsScale \jsZw
892   \ifdim\parindent>\z@
893     \if@english \parindent=1em
894     \else       \parindent=1\jsZw
895   \fi
896   \fi\relax
897   \jsResetDimen}
```

`\jsResetDimen` ユーザ定義用のフック。

```
898 \newcommand*\jsResetDimen{}
```

`\jsc@setfontsize` クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した `\jsc@setfontsize` を `\@setfontsize` の代わりに用いることにします。

```
899 \ifjsc@mag
900   \let\jsc@setfontsize\@setfontsize
901 \else
902   \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
903     \@setfontsize#1{#2\jsc@empt}{#3\jsc@empt}}
904 % microtype 対策
905   \ifjsWithTeX\if j\jsEngine\else
906     \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
907       \edef\bxjs@sfs@next{%
908         \unexpanded{\@setfontsize#1}%
909         {\the\dimexpr#2\jsc@empt\relax}{\the\dimexpr#3\jsc@empt\relax}%
910       }\bxjs@sfs@next}
911   \fi\fi
912 \fi
```

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、`\emergencystretch` に訴えます。

これはフォントサイズ非依存なので `\Cwd` で書くのが適当だが、`\Cwd` はまだ定義されていない。

```
913 \emergencystretch 3\jsZw
```

`\ifnarrowbaselines` 欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

`\narrowbaselines` [2003-06-30] 数式に入るところで `\narrowbaselines` を実行しているの

`\widebaselines` `\abovedisplayskip` 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対して、しっぱ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] `english` オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。

TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに `\narrowbaselines` が呼ばれるが、このコードでは「数式中で `\normalsize` などのサイズ命令 (`\@currsize` の実体) が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、`\@setfontsize` 中の `\@nomath` 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないなので、BXJS クラスの実装では、`\narrowbaselines` の時だけ警告が出ないようにする。

```
914 \newif\ifnarrowbaselines
915 \if@english
916   \narrowbaselinestrue
917 \fi
918 \def\narrowbaselines{%
919   \narrowbaselinestrue
920   \skip0=\abovedisplayskip
921   \skip2=\abovedisplayshortskip
922   \skip4=\belowdisplayskip
923   \skip6=\belowdisplayshortskip
924 % 一時的に警告を無効化する
925   \let\bxjs@ltx@nomath\@nomath
926   \let\@nomath\@gobble
927   \@currsize\selectfont
928   \let\@nomath\bxjs@ltx@nomath
929   \abovedisplayskip=\skip0
930   \abovedisplayshortskip=\skip2
931   \belowdisplayskip=\skip4
932   \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
933 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}
```

`microtype` パッケージを読み込んだ場合、`\normalsize` 等のフォントサイズ変更命令の定義の中に `if` 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは `microtype` が邪悪なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

```
934 \def\bxjs@ifnarrowbaselines{%
935   \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
936   \else \expandafter\@secondoftwo
937   \fi
938 }
```

`\normalsize` 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし `\narrowbaselines` で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント（アスキーのものの 0.961 倍）である

こともあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25 \approx 1.73$ であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75) に近づきました。

`microtype` 対策のため if 文を避ける。

```

939 \renewcommand{\normalsize}{%
940   \bxjs@if@narrowbaselines{%
941     \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xipt
942   }{%else
943     \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
944   }%

```

数式の上のアキ(`\abovedisplayskip`), 短い数式の上のアキ(`\abovedisplayshortskip`), 数式の下のアキ(`\belowdisplayshortskip`) の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] `TEX Q & A 52569` から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

```

945 \abovedisplayskip 11\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?
946 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
947 \belowdisplayskip 9\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?
948 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

```

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ `\@listI` を、`\@listi` にコピーしておきます。`\@listI` の設定は後で出てきます。

```

949 \let\@listi\@listI}

```

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

```

950 \normalsize

```

`\Cht` 基準となる長さの設定をします。p \LaTeX 2 _{ϵ} カーネル (`plfonts.dtx`) で宣言されているパラメータに実際の値を設定します。たとえば `\Cwd` は `\normalfont` の全角幅 (1zw) です。

`\Cwd` [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コード 0x3441) へ変更しました。

`\Chs`

`\Cwd` 等の変数は p \TeX 系以外では未定義なのでここで定義する。

```

951 \ifx\Cht\@undefined \newdimen\Cht \fi
952 \ifx\Cdp\@undefined \newdimen\Cdp \fi
953 \ifx\Cwd\@undefined \newdimen\Cwd \fi
954 \ifx\Cvs\@undefined \newdimen\Cvs \fi
955 \ifx\Chs\@undefined \newdimen\Chs \fi

```

規約上、現在の `\jsZw` の値が `\Cwd` である。BXJS では `\Cht` と `\Cdp` は単純に `\Cwd` の 88% と 12% の値とする。

```

956 \setlength\Cht{0.88\jsZw}
957 \setlength\Cdp{0.12\jsZw}

```



```

958 \setlength\Cwd{1\jsZw}
959 \setlength\Cvs{\baselineskip}
960 \setlength\Chs{1\jsZw}

```

`\small` `\small` も `\normalsize` と同様に設定します。行送りは、`\normalsize` が 16 ポイントなら、割合からすれば $16 \times 0.9 = 14.4$ ポイントになりますが、`\small` の使われ方を考えて、ここでは和文 13 ポイント、欧文 11 ポイントとします。また、`\topsep` と `\parsep` は、元はそれぞれ 4 ± 2 , 2 ± 1 ポイントでしたが、ここではゼロ (`\z@`) にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の `\footnotesize` も同様。

```

961 \newcommand{\small}{%
962   \bxjs@if@narrowbaselines{%
963     %<!kiyou>   \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
964     %<kiyou>    \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
965   }{%else
966     %<!kiyou>   \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
967     %<kiyou>    \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
968   }%
969   \abovedisplayskip 9\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?
970   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
971   \belowdisplayskip \abovedisplayskip
972   \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
973   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
974             \topsep \z@
975             \parsep \z@
976             \itemsep \parsep}}

```

`\footnotesize` `\footnotesize` も同様です。`\topsep` と `\parsep` は、元はそれぞれ 3 ± 1 , 2 ± 1 ポイントでしたが、ここではゼロ (`\z@`) にしました。

```

977 \newcommand{\footnotesize}{%
978   \bxjs@if@narrowbaselines{%
979     %<!kiyou>   \jsc@setfontsize\footnotesize\@viipt{9.5}%
980     %<kiyou>    \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
981   }{%else
982     %<!kiyou>   \jsc@setfontsize\footnotesize\@viipt{11}%
983     %<kiyou>    \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
984   }%
985   \abovedisplayskip 6\p@? \@plus2\p@? \@minus3\p@?
986   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
987   \belowdisplayskip \abovedisplayskip
988   \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
989   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
990             \topsep \z@
991             \parsep \z@
992             \itemsep \parsep}}

```

`\scriptsize` それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し

`\tiny`

`\large`

`\Large`

`\LARGE`

`\huge`

ます。特に注意すべきは `\large` で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、行送りを `\normalsize` と同じにすることによって、節見出しが複数行にわたっても段間で行が揃うようにします。

[2004-11-03] `\HUGE` を追加。

```

993 \newcommand{\scriptsize}{\jsc@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viipt}
994 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vpt}
995 \if@twocolumn
996 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
997 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large{11.111}{\n@baseline}}
998 \else
999 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{17}}
1000 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large{11.111}{17}}
1001 \fi
1002 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
1003 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
1004 \newcommand{\LARGE}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
1005 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
1006 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
1007 \newcommand{\HUGE}{\jsc@setfontsize\HUGE{30}{40}}

```

別行立て数式の中では `\narrowbaselines` にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では `\narrowbaselines` にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は `amsmath` の `smallmatrix` 環境を使うのがいいでしょう。

```

1008 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

```

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず `amsmath` の `equation` 関係は `okumacro` のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道があれば教えてください。

見出し用のフォントは `\bfseries` 固定ではなく、`\headfont` という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは `\sffamily \bfseries` でいいと思いますが、通常の中ゴシックでは単に `\sffamily` だけのほうがよさそうです。『`LaTeX 2ε` 美文書作成入門』(1997 年)では `\sffamily \fontseries{sbc}` として新ゴ M と合わせましたが、`\fontseries{sbc}` はちょっと幅が狭いように感じました。

```

1009 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
1010 \newcommand{\headfont}{\sffamily}
1011 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

```

5 レイアウト

■二段組

`\columnsep` `\columnsep` は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt ですが、2zw にしました。
`\columnseprule` このスペースの中央に `\columnseprule` の幅の罫線が引かれます。

```

1012 %<kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}
1013 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
1014 \setlength\columnseprule{0\jsc@empt}

```

■段落

`\lineskip` 上下の行の文字が `\lineskiplimit` より接近したら、`\lineskip` より近づかないようにします。元は 0pt ですが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

```

\lineskiplimit 1015 \setlength\lineskip{1\jsc@empt}
1016 \setlength\normallineskip{1\jsc@empt}
\normallineskiplimit 1017 \setlength\lineskiplimit{1\jsc@empt}
1018 \setlength\normallineskiplimit{1\jsc@empt}

```

`\baselinestretch` 実際の行送りが `\baselineskip` の何倍かを表すマクロです。たとえば

```
\renewcommand{\baselinestretch}{2}
```

とすると、行送りが通常の 2 倍になります。ただし、これを設定すると、たとえば `\baselineskip` が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行送りの伸縮はしないのが一般的です。

```
1019 \renewcommand{\baselinestretch}{}
```

`\parskip` `\parskip` は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここでは `\parindent` ゼロにしました。`\parindent` は段落の先頭の字下げ幅です。

```

1020 \setlength\parskip{0\jsc@empt}
1021 \if@slide
1022   \setlength\parindent{0\p@}
1023 \else
1024   \setlength\parindent{1\Cwd}
1025 \fi

```

`\@lowpenalty` `\nopagebreak`, `\nolinebreak` は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶようになっています。ここはオリジナル通りです。

```

\n@highpenalty 1026 \@lowpenalty 51
1027 \@medpenalty 151
1028 \@highpenalty 301

```

`\interlinepenalty` 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

```
1029 % \interlinepenalty 0
```

`\brokenpenalty` ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

```
1030 % \brokenpenalty 100
```

5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は `geometry` パッケージが担当している。

■準備

現状ではここで `\mag` を設定している。

`\topskip` も指定する。

```
1031 \ifjsc@mag
1032 \mag=\bxjs@param@mag
1033 \fi
1034 \setlength{\topskip}{10\p@?}
```

`\bxjs@param@paper` が長さ指定 (`{W}{H}`) の場合、`geometry` の形式 (`papersize={W,H}`) に変換する。

```
1035 \def\bxjs@read@a{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@read@b}
1036 \def\bxjs@read@b{%
1037   \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@read@c
1038   \else \expandafter\bxjs@read@d \fi}
1039 \def\bxjs@read@c#1#2#3\@nil{\def\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}}
1040 \def\bxjs@read@d#1\@nil{}
1041 \expandafter\bxjs@read@a\bxjs@param@paper\@nil
```

`\bxjs@layout@paper` `geometry` の用紙設定のオプション。

```
1042 \edef\bxjs@layout@paper{%
1043   \ifjsc@mag truedimen,\fi
1044   \if@landscape landscape,\fi
1045   \bxjs@param@paper}
```

`\bxjs@layout` `geometry` のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。

```
1046 %<*article|report>
1047 \def\bxjs@layout{%
1048   headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
1049   headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
1050   hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
1051   vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
1052 }
1053 %</article|report>
1054 %<*book>
1055 \ifbxjs@layout@buggyhmargin %---
1056 % アレ
1057 \def\bxjs@layout{%
1058   headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
1059   hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
1060   vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
1061 }
1062 \else %---
1063 % 非アレ
1064 \def\bxjs@layout{%
1065   headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
1066   hmargin=18\jsc@mmm,%
1067   vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
```

```

1068 }
1069 \fi %---
1070 %</book>
1071 %<*slide>
1072 \def\bxjs@layout{%
1073   noheadfoot,%
1074   hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
1075   vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
1076 }
1077 %</slide>

```

\fullwidth 〔寸法レジスタ〕 ヘッダ・フッタ領域の横幅。

```

1078 \newdimen\fullwidth

```

\jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕 bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。

```

1079 %<*book>
1080 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
1081 \ifx\bxjs@textwidth@limit\undefined\else
1082   \let\c@bxjs@cmta\@tempcmta
1083   \setcounter{bxjs@cmta}{\bxjs@textwidth@limit}
1084   \long\edef\jsTextWidthLimit{\the\@tempcmta}
1085 \fi
1086 %</book>

```

\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。

```

1087 \def\bxjs@postproc@layout{%
1088 % ドライバ再設定
1089   \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else
1090     \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
1091   \fi
1092 % textwidth 調整
1093   \ifbxjs@whole@zw@lines
1094     \@tempdimb=\textwidth
1095     \if@twocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
1096     \divide\textwidth\@tempdima \multiply\textwidth\@tempdima
1097     \advance\@tempdimb-\textwidth
1098     \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
1099     \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
1100   \fi
1101   \fullwidth=\textwidth
1102 %<*book>
1103   \ifdim\textwidth>\jsTextWidthLimit\Cwd
1104     \textwidth=\jsTextWidthLimit\Cwd
1105     \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
1106   \fi
1107 %</book>
1108 % textheight 調整
1109   \@tempdimb=\textheight
1110   \advance\textheight-\topskip

```

```

1111 \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
1112 \advance\textheight\topskip
1113 \advance\@tempdima-\textheight
1114 \advance\topmargin0.5\@tempdima
1115 % headheight 調整
1116 \@tempdima=\topskip
1117 \advance\headheight\@tempdima
1118 \advance\topmargin-\@tempdima
1119 % marginpar 設定
1120 \setlength\marginparsep{\columnsep}
1121 \setlength\marginparpush{\baselineskip}
1122 \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
1123   -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
1124 \ifbxjs@whole@zw@lines
1125   \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
1126 \fi
1127 % 連動する変数
1128 \maxdepth=.5\topskip
1129 \stockwidth=\paperwidth
1130 \stockheight=\paperheight
1131 }

```

`\jsGeometryOptions` geometry パッケージに渡すオプションのリスト。

※ geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。

```

1132 \edef\jsGeometryOptions{%
1133   \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}

```

■ geometry パッケージ読込

geometry オプションの値に応じて分岐する。

まずは geometry=class の場合。

```

1134 \ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

```

geometry は \topskip が標準の行高 (`\ht\strutbox`) より小さくならないようにする自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避（無効化）している。

```

1135 \@onlypreamble\bxjs@revert
1136 \let\bxjs@revert\@empty
1137 \edef\bxjs@tmpa{\the\ht\strutbox}
1138 \ht\strutbox=10\p@?
1139 \g@addto@macro\bxjs@revert{\ht\strutbox=\bxjs@tmpa\relax}

```

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

```

1140 \ifbxjs@papersize
1141   \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
1142     \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1143   \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode
1144     \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1145   \fi\fi
1146   \let\bxPapersizeSpecialDone=t
1147 \else
1148   \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
1149 \fi

```

ここで `geometry` を読み込む。

※ `geometry` の `begin-document` フックにおいて、`LuaTeX` の旧版互換を有効にする。

```

1150 \edef\bxjs@nxt{%
1151   \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}
1152 \AtBeginDocument{\bxjs@pre@geometry@hook}
1153 \AtBeginDocument{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
1154 \bxjs@nxt \bxjs@revert
1155 \AtBeginDocument{\RevokeOldLuaTeXBehavior}

```

`\bxjs@geometry@driver` `geometry` が用いるドライバの名前。

※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、`\bxjs@postproc@layout` において書き戻す処理を入れている。

```

1156 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver
1157 \bxjs@postproc@layout

```

`\bxjs@pre@geometry@hook` 1.2 版より、`geometry` の 4.x 版の使用は非推奨とする。

※将来サポートを廃止する予定。

```

1158 \@onlypreamble\bxjs@pre@geometry@hook
1159 \def\bxjs@pre@geometry@hook{%
1160   \@ifpackageloaded{geometry}{%
1161     \@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{%}{%else
1162       \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
1163       {The 'geometry' package installed\MessageBreak
1164        is too old (< v5.0)}}%
1165     \if x\jsEngine \ifnum\mag=\@m\else
1166       \def\bxjs@Gm@driver{pdftex}
1167       \ifx\pdfhorigin\@undefined \newdimen\pdfhorigin \fi
1168       \ifx\pdfvorigin\@undefined \newdimen\pdfvorigin \fi
1169     \fi\fi
1170   }%
1171   \ifjsWithpTeXng
1172     \ifx\Gm@driver\@empty
1173       \def\Gm@driver{pdftex}%
1174     \fi
1175   \fi
1176 }{}

```

`\setpagelayout` ページレイアウト設定のためのユーザ命令。

- `\setpagelayout{<text>}` : 現在の geometry の設定の一部を修正する。
- `\setpagelayout*{<text>}` : 用紙以外の設定をリセットして、改めて設定を行う。

どちらも設定の後で後処理 `\bxjs@postproc@layout` を実行する。

```

1177 \def\setpagelayout{\@ifstar
1178   {\bxjs@reset@layout}{\bxjs@modify@layout}}
1179 \def\bxjs@modify@layout#1{%
1180   \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{#1,truedimen}}%
1181   \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}
1182 \def\bxjs@reset@layout#1{%
1183   \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{reset,\bxjs@layout@paper,#1,truedimen}}%
1184   \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}

```

`geometry=class` の場合の処理はここで終わり。

次に、`geometry=user` の場合の処理。

```

1185 \else\ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@user

```

この場合はユーザが何らかの方法（例えば `geometry` を読み込む）でページレイアウトを設定する必要がある。もし、本体開始時に `\textwidth` がカーネル設定の値（`.5\maxdimen`）のままになっている場合はエラーを出す。

※`\jsUseMinimalPageLayout` は動作テスト用。

```

1186 \AtBeginDocument{\bxjs@check@page@layout}
1187 \onlypreamble\bxjs@check@page@layout
1188 \def\bxjs@check@page@layout{%
1189   \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
1190     \ClassError\bxjs@clsname
1191     {Page layout is not properly set}%
1192     {\@ehd}
1193   \fi}
1194 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
1195   \setlength{\textwidth}{6.5in}%
1196   \setlength{\textheight}{8in}}

```

`\setpagelayout` はとりあえず無効にしておく。

```

1197 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1198 \def\setpagelayout{\@ifstar
1199   {\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}
1200 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
1201   \ClassError\bxjs@clsname
1202   {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
1203     because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}

```

`geometry=user` の場合の処理はここで終わり。

```

1204 \fi\fi

```

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- `zw` の代わりに `\jsZw` を用いる。
- `article/report/book/slide` の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

<*jsclasses>

■縦方向のスペース

`\headheight` `\topskip` は本文領域上端と本文 1 行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値にすると、本文中に \int のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のページより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ (10pt) にします。

[2003-06-26] `\headheight` はヘッダの高さで、元は 12pt でしたが、新ドキュメントクラスでは `\topskip` と等しくしていました。ところが、`fancyhdr` パッケージで `\headheight` が小さいとおかしいことになるようですので、2 倍に増やしました。代わりに、版面の上下揃えの計算では `\headheight` ではなく `\topskip` を使うことにしました。

[2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、`\topskip` を 10pt から 1.38zw に増やしました。`\headheight` は従来と同じ 20pt のままとします。

```
1205 \setlength\topskip{1.38zw}%% from 10\jsc@empt (2016-08-17)
1206 \if@slide
1207   \setlength\headheight{0\jsc@empt}
1208 \else
1209   \setlength\headheight{20\jsc@empt}%% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-
1210   06-26)
1210 \fi
```

`\footskip` `\footskip` は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは、book で 0.35in (約 8.89mm)、book 以外で 30pt (約 10.54mm) となっていました。ここでは A4 判のときちょうど 1cm となるように、`\paperheight` の 0.03367 倍 (最小 `\baselineskip`) としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。

```
1211 %<*article|kiyou>
1212 \if@slide
1213   \setlength\footskip{0pt}
1214 \else
1215   \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1216   \ifdim\footskip<\baselineskip
1217     \setlength\footskip{\baselineskip}
1218   \fi
1219 \fi
1220 %</article|kiyou>
1221 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}
1222 %<*book>
1223 \if@report
1224   \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1225   \ifdim\footskip<\baselineskip
1226     \setlength\footskip{\baselineskip}
1227   \fi
```

```

1228 \else
1229   \setlength\footskip{0pt}
1230 \fi
1231 %</book>
1232 %<*report>
1233 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1234 \ifdim\footskip<\baselineskip
1235   \setlength\footskip{\baselineskip}
1236 \fi
1237 %</report>

```

`\headsep` `\headsep` はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), それ以外で 25pt (約 8.79mm) になっていました。ここでは article は `\footskip - \topskip` としました。

[2016-10-08] article の `slide` のとき, および book の非 `report` と `kiyou` のときに `\headsep` を減らしそこねていたのを修正しました (2016-08-17 での修正漏れ)。

```

1238 %<*article>
1239 \if@slide
1240   \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1241   \addtolength\headsep{-\topskip}%% added (2016-10-08)
1242   \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}%% added (2016-10-08)
1243 \else
1244   \setlength\headsep{\footskip}
1245   \addtolength\headsep{-\topskip}
1246 \fi
1247 %</article>
1248 %<*book>
1249 \if@report
1250   \setlength\headsep{\footskip}
1251   \addtolength\headsep{-\topskip}
1252 \else
1253   \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
1254   \addtolength\headsep{-\topskip}%% added (2016-10-08)
1255   \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}%% added (2016-10-08)
1256 \fi
1257 %</book>
1258 %<*report>
1259 \setlength\headsep{\footskip}
1260 \addtolength\headsep{-\topskip}
1261 %</report>
1262 %<*jspf>
1263 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
1264 \addtolength\headsep{-\topskip}
1265 %</jspf>
1266 %<*kiyou>
1267 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
1268 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1269 \addtolength\headsep{-\topskip}%% added (2016-10-08)

```

```
1270 \addtolength\headsep{10\jsc@mp}{%% added (2016-10-08)
1271 %</kiyou>
```

\maxdepth `\maxdepth` は本文最下行の最大の深さで、plain $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ や $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 2.09 では 4pt に固定でした。 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 2e では `\maxdepth + \topskip` を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、`\topskip` は本文フォントサイズ（ここでは 10pt）に等しいので、結局 `\maxdepth` は `\topskip` の半分の値（具体的には 5pt）にします。

```
1272 \setlength\maxdepth{.5\topskip}
```

■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す `\fullwidth` という長さを定義します。

```
1273 \newdimen\fullwidth
```

この `\fullwidth` は `article` では紙幅 `\paperwidth` の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍（二段組では全角幅の偶数倍）にします。0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から約 2 インチを引いた値になるように選びました。`book` では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 `\textwidth` は `\fullwidth` と等しくします。`article` では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw（25 文字 × 2 段）＋段間 8mm とします。

```
1274 %<*article>
1275 \if@slide
1276   \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}
1277 \else
1278   \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1279 \fi
1280 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1281 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1282 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1283 %</article>
1284 %<*book>
1285 \if@report
1286   \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1287 \else
1288   \setlength\fullwidth{\paperwidth}
1289   \addtolength\fullwidth{-36\jsc@mmm}
1290 \fi
1291 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1292 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1293 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1294 \if@report \else
1295   \if@twocolumn \else
```

```

1296 \ifdim \fullwidth>40zw
1297 \setlength\textwidth{40zw}
1298 \fi
1299 \fi
1300 \fi
1301 %</book>
1302 %<*report>
1303 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1304 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1305 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1306 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1307 %</report>
1308 %<*jspf>
1309 \setlength\fullwidth{50zw}
1310 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1311 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1312 %</jspf>
1313 %<*kiyou>
1314 \setlength\fullwidth{48zw}
1315 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
1316 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1317 %</kiyou>

```

`\textheight` 紙の高さ `\paperheight` は、1 インチと `\topmargin` と `\headheight` と `\headsep` と `\textheight` と `\footskip` とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ `\textheight` は、紙の高さ `\paperheight` の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、`\topskip` を引き、それを `\baselineskip` の倍数に切り捨て、最後に `\topskip` を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは 44 行にします。

[2003-06-26] `\headheight` を `\topskip` に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] `\topskip` を 10pt から 1.38zw に増やしましたので、その分 `\textheight` を増やします (2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] `article` の `slide` のときに `\headheight` はゼロなので、さらに修正しました (2016-08-17 での修正漏れ)。

```

1318 %<*article|book|report>
1319 \if@slide
1320 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
1321 \else
1322 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}
1323 \fi
1324 \addtolength{\textheight}{-10\jsc@mpt}%% from -\topskip (2016-10-08); from -
    \headheight (2003-06-26)
1325 \addtolength{\textheight}{-\headsep}

```

```

1326 \addtolength{\textheight}{-\footskip}
1327 \addtolength{\textheight}{-\topskip}
1328 \divide\textheight\baselineskip
1329 \multiply\textheight\baselineskip
1330 %</article|book|report>
1331 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
1332 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}
1333 \addtolength{\textheight}{\topskip}
1334 \addtolength{\textheight}{0.1\jsc@mpt}
1335 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}

```

`\flushbottom` [2016-07-18] `\textheight` に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に、`\flushbottom` にも余裕を持たせます。元の \LaTeX 2_ϵ での完全な `\flushbottom` の定義は

```

\def\flushbottom{%
  \let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}

```

ですが、次のようにします。

```

1336 \def\flushbottom{%
1337   \def\@textbottom{\vskip \z@ \@plus.1\jsc@mpt}%
1338   \let\@texttop\relax}

```

`\marginparsep` `\marginparsep` は欄外の書き込みと本文との間隔です。`\marginparpush` は欄外の書き込みどうしの最小の間隔です。

```

1339 \setlength\marginparsep{\columnsep}
1340 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

```

`\oddsidemargin` それぞれ奇数ページ、偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では `\evensidemargin` `\oddsidemargin` が使われます。 \TeX は上・左マージンに `1truein` を挿入しますが、トンボ関係のオプションが指定されると $\text{\pLaTeX 2}_\epsilon$ (`plcore.ltx`) はトンボの内側に `1in` のスペース (`1truein` ではなく) を挿入するので、場合分けしています。

```

1341 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
1342 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}
1343 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
1344 \iftombow
1345   \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
1346 \else
1347   \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}
1348 \fi
1349 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
1350 \if@mparswitch
1351   \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
1352   \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}
1353 \fi

```

`\marginparwidth` `\marginparwidth` は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅 (`\evensidemargin` + 1 インチ) から 1 センチを引き、さらに `\marginparsep` (欄外の書き込みと本文のアキ) を

引いた値にしました。最後に 1zw の整数倍に切り捨てます。

```
1354 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
1355 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
1356 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}
1357 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}
1358 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}
1359 \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}
1360 \@tempdima=1zw
1361 \divide\marginparwidth\@tempdima
1362 \multiply\marginparwidth\@tempdima
```

`\topmargin` 上マージン（紙の上端とヘッダ上端の距離）から 1 インチ引いた値です。

[2003-06-26] `\headheight` を `\topskip` に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-17] `\topskip` を 10pt から 1.38zw に直しましたが、`\topmargin` は従来の値から変わらないように調節しました。…のつもりでしたが、`\textheight` を増やし忘れていたので変わってしまっていました（2016-08-26 修正済み）。

```
1363 \setlength\topmargin{\paperheight}
1364 \addtolength\topmargin{-\textheight}
1365 \if@slide
1366   \addtolength\topmargin{-\headheight}
1367 \else
1368   \addtolength\topmargin{-10\jsc@empt}%% from -\topskip (2016-10-08); from -
    \headheight (2003-06-26)
1369 \fi
1370 \addtolength\topmargin{-\headsep}
1371 \addtolength\topmargin{-\footskip}
1372 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
1373 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
1374 \iftombow
1375   \addtolength\topmargin{-1in}
1376 \else
1377   \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}
1378 \fi
```

</jsclasses>

■脚注

`\footnotesep` 各脚注の頭に入る支柱 (strut) の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように、`\footnotesize` の支柱の高さ（行送りの 0.7 倍）に等しくします。

ここは元々は

```
{\footnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}
```

としていたが、そもそも `\global\setlength~` は calc 使用時には有意義な動作をしない。`\global\footnotesep` だと所望の値が得られるが、同時に `\footnotesize` のフォントを

固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

```
1379 \footnotesep=11\p@? \footnotesep=0.7\footnotesep
```

`\footins` `\skip\footins` は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラスでは 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

```
1380 \setlength{\skip\footins}{16\p@? \@plus 5\p@? \@minus 2\p@?}
```

■フロート関連 フロート（図、表）関連のパラメータは $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ 本体で定義されていますが、ここで設定変更します。本文ページ（本文とフロートが共存するページ）とフロートだけのページで設定が異なります。ちなみに、カウンタは内部では `\c@` を名前に冠したマクロになっています。

`\c@topnumber` `topnumber` カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

```
1381 \setcounter{topnumber}{9}
```

`\topfraction` 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

```
1382 \renewcommand{\topfraction}{.85}
```

`\c@bottomnumber` `bottomnumber` カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

```
1383 \setcounter{bottomnumber}{9}
```

`\bottomfraction` 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

```
1384 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}
```

`\c@totalnumber` `totalnumber` カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

```
1385 \setcounter{totalnumber}{20}
```

`\textfraction` 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

```
1386 \renewcommand{\textfraction}{.1}
```

`\floatpagefraction` フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。

```
1387 \renewcommand{\floatpagefraction}{.8}
```

`\c@dbltopnumber` 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

```
1388 \setcounter{dbltopnumber}{9}
```

`\dbltopfraction` 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

```
1389 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}
```

`\dblfloatpagefraction` 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8 に変えてあります。

```
1390 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}
```

`\floatsep` `\floatsep` はページ上部・下部のフロート間の距離です。`\textfloatsep` はページ上部・下部のフロートと本文との距離です。`\intextsep` は本文の途中に出力されるフロートと本文との距離です。

```
1391 \setlength\floatsep {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
```

```
1392 \setlength\textfloatsep{20\p@? \@plus 2\p@? \@minus 4\p@?}
```

```
1393 \setlength\intextsep {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
```

`\dblfloatsep` 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

```
\dbltextfloatsep 1394 \setlength\dblfloatsep {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
```

```
1395 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@? \@plus 2\p@? \@minus 4\p@?}
```

`\@fptop` フロートだけのページに入るグルーです。`\@fptop` はページ上部, `\@fpbot` はページ下部,

`\@fpsep` `\@fpsep` はフロート間に入ります。

```
\@fpbot 1396 \setlength\@fptop{0\p@? \@plus 1fil}
```

```
1397 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
```

```
1398 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

`\@dblfpptop` 段抜きフロートについての値です。

```
\@dblfpsep 1399 \setlength\@dblfpptop{0\p@? \@plus 1fil}
```

```
\@dblfpbot 1400 \setlength\@dblfpsep{8\p@? \@plus 2fil}
```

```
1401 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

6 改ページ（日本語 T_EX 開発コミュニティ版のみ）

`\pltx@cleartorightpage` [2017-02-24] コミュニティ版 p_LT_EX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて、同じ命令を追
`\pltx@cleartoleftpage` 加しました。

`\pltx@cleartooddpage` 1. `\pltx@cleartorightpage` : 右ページになるまでページを繰る命令
`\pltx@cleartoevenpage` 2. `\pltx@cleartoleftpage` : 左ページになるまでページを繰る命令
3. `\pltx@cleartooddpage` : 奇数ページになるまでページを繰る命令
4. `\pltx@cleartoevenpage` : 偶数ページになるまでページを繰る命令

となっています。

```
1402 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
```

```
1403 % \ifodd\c@page
```

```
1404 % \iftdir
```

```
1405 % \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
```

```
1406 % \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
```

```
1407 % \fi
```

```
1408 % \else
```

```
1409 % \ifydir
```

```
1410 % \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
```



```

1411 %      \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1412 %      \fi
1413 %    \fi\fi}
1414 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1415 %  \ifodd\c@page
1416 %    \ifydir
1417 %      \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1418 %      \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1419 %    \fi
1420 %  \else
1421 %    \iftdir
1422 %      \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1423 %      \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1424 %    \fi
1425 %  \fi\fi}
1426 %\def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
1427 %  \ifodd\c@page\else
1428 %    \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1429 %    \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1430 %  \fi\fi}
1431 %\def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
1432 %  \ifodd\c@page
1433 %    \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1434 %    \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1435 %  \fi\fi}

```

BXJS クラスでは `\iftdir` 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

```

1436 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage
1437 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage

```

`\cleardoublepage` [2017-02-24] コミュニティ版 p \LaTeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて、`report` と `book` クラスの場合に `\cleardoublepage` を再定義します。

```

1438 %<*book|report>
1439 \if@openleft
1440   \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
1441 \else\if@openright
1442   \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
1443 \fi\fi
1444 %</book|report>

```

7 ページスタイル

ページスタイルとして、 \LaTeX 2 ϵ (欧文版) の標準クラスでは `empty`, `plain`, `headings`, `myheadings` があります。このうち `empty`, `plain` スタイルは \LaTeX 2 ϵ 本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは `headnombre`, `footnombre`, `bothstyle`, `jpl@in` が追加されていますが、ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは `\ps@...` の形のマクロで定義されています。

`\@evenhead` `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` は偶数・奇数ページの柱（ヘッダ、フッタ）を出力する命令です。これらは `\fullwidth` 幅の `\hbox` の中で呼び出されます。
`\@evenfoot` `\ps@...` の中で定義しておきます。

`\@oddfoot` 柱の内容は、`\chapter` が呼び出す `\chaptermark{何々}`, `\section` が呼び出す `\sectionmark{何々}` で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。

`\markboth{左}{右}` 両方の柱を設定します。
`\markright{右}` 右の柱を設定します。
`\leftmark` 左の柱を出力します。
`\rightmark` 右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを `\chapter`, 右マークを `\section` で変更する場合はこれにあたります。しかし、同一ページに複数の `\markboth` があると、おかしい結果になることがあります。

`\tableofcontents` のような命令で使われる `\@mkboth` は、`\ps@...` コマンド中で `\markboth` か `\@gobbletwo`（何もしない）に `\let` されます。

`\ps@empty` `empty` ページスタイルの定義です。L^AT_EX 本体で定義されているものをコメントアウトした形で載せておきます。

```
1445 % \def\ps@empty{%
1446 %   \let\@mkboth\@gobbletwo
1447 %   \let\@oddhead\@empty
1448 %   \let\@oddfoot\@empty
1449 %   \let\@evenhead\@empty
1450 %   \let\@evenfoot\@empty}
```

`\ps@plainhead` `plainhead` はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

`\ps@plainfoot` `plainfoot` はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

`\ps@plain` `plain` は `book` では `plainhead`, それ以外では `plainfoot` になります。

```
1451 \def\ps@plainfoot{%
1452   \let\@mkboth\@gobbletwo
1453   \let\@oddhead\@empty
1454   \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%
1455   \let\@evenhead\@empty
1456   \let\@evenfoot\@oddfoot}
1457 \def\ps@plainhead{%
1458   \let\@mkboth\@gobbletwo
1459   \let\@oddfoot\@empty
1460   \let\@evenfoot\@empty
1461   \def\@evenhead{%
1462     \if@mparswitch \hss \fi
```

```

1463 \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
1464 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1465 \def\@oddhead{%
1466 \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
1467 %<book>\let\ps@plain\ps@plainhead
1468 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot

```

`\ps@headings` `headings` スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアンダーラインを引くようにしてみました。

まず `article` の場合です。

```

1469 %<*article|slide>
1470 \if@twoside
1471 \def\ps@headings{%
1472 \let\@oddfoot\@empty
1473 \let\@evenfoot\@empty
1474 \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
1475 \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}}%
1476 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1477 \def\@oddhead{%
1478 \underline{%
1479 \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1480 \let\@mkboth\markboth
1481 \def\sectionmark##1{\markboth{%
1482 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
1483 ##1}{}}%
1484 \def\subsectionmark##1{\markright{%
1485 \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection \hskip1\jsZw\fi
1486 ##1}}%
1487 }
1488 \else % if not twoside
1489 \def\ps@headings{%
1490 \let\@oddfoot\@empty
1491 \def\@oddhead{%
1492 \underline{%
1493 \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1494 \let\@mkboth\markboth
1495 \def\sectionmark##1{\markright{%
1496 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
1497 ##1}}%
1498 \fi
1499 %</article|slide>

```

次は `book` および `report` の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました（北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます）。

`\autoxspacing` は未定義の可能性があるので、「`\autoxspacing` が定義済なら実行する」マクロ `\bxjs@maybe@autoxspacing` を代わりに用いる。

```

1500 %<*book|report>
1501 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
1502   \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1503 \newif\if@omit@number
1504 \def\ps@headings{%
1505   \let\@oddfoot\@empty
1506   \let\@evenfoot\@empty
1507   \def\@evenhead{%
1508     \if@mparswitch \hss \fi
1509     \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1510       \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}}%
1511     \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1512   \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1513     {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1514   \let\@mkboth\markboth
1515   \def\chaptermark##1{\markboth{%
1516     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1517       \if@mainmatter
1518         \if@omit@number\else
1519           \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
1520         \fi
1521       \fi
1522     \fi
1523     ##1}\{}}%
1524   \def\sectionmark##1{\markright{%
1525     \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
1526     ##1}\{}}%
1527 %</book|report>

```

最後は学会誌の場合です。

```

1528 %<*jspf>
1529 \def\ps@headings{%
1530   \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
1531   \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
1532   \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
1533   \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}
1534 %</jspf>

```

`\ps@myheadings` `myheadings` ページスタイルではユーザが `\markboth` や `\markright` で柱を設定するため、ここでの定義は非常に簡単です。

[2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。

```

1535 \def\ps@myheadings{%
1536   \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
1537   \def\@evenhead{%
1538     \if@mparswitch \hss \fi%
1539     \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}}%
1540     \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1541   \def\@oddhead{%
1542     \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%

```

```

1543 \let\mkboth\@gobbletwo
1544 %<book|report> \let\chaptermark\@gobble
1545 \let\sectionmark\@gobble
1546 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
1547 }

```

8 文書のマークアップ

8.1 表題

`\title` これらは L^AT_EX 本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示します。

```

\date 1548 % \newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}
1549 % \newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}
1550 % \newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}
1551 % \date{\today}

```

`\subtitle` 副題を設定する。

`\jsSubtitle` ※プレアンプルにおいて `\newcommand*{\subtitle}{...}` が行われることへの対策として、`\subtitle` の定義を `\title` の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、`\jsSubtitle` 命令を直接用いればよい。

本体を `\jsSubtitle` として定義する。

```

1552 \newcommand*{\jsSubtitle}[1]{\gdef\bxjs@subtitle{#1}}
1553 %\let\bxjs@subtitle\@undefined

\title にフックを入れる。

1554 \renewcommand*{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
1555 \AtBeginDocument{\bxjs@decl@subtitle}
1556 \def\bxjs@decl@subtitle{%
1557   \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax
1558   \ifx\subtitle\@undefined
1559     \global\let\subtitle\jsSubtitle
1560   \fi}

```

`\bxjs@annihilate@subtitle` `\subtitle` 命令を無効化する。

※独自の `\subtitle` が使われている場合は無効化しない。

```

1561 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%
1562   \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi
1563   \global\let\jsSubtitle\relax}

```

`\etitle` 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル、英語の著者名、キーワード、メールアドレスです。

```

\author 1564 %<*jspf>
\keywords 1565 \newcommand*{\etitle}[1]{\gdef\@etitle{#1}}

```

```

1566 \newcommand*\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}}
1567 \newcommand*\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}}
1568 \newcommand*\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}
1569 \newcommand*\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}}
1570 %</jspf>

```

`\plainifnotempty` 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを `empty` にしても表題のあるページだけ `plain` になってしまうことがありました。これは `\maketitle` の定義中に `\thispagestyle{plain}` が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが `empty` でないならこのページのスタイルを `plain` にする」という次の命令を作ることになります。

```

1571 \def\plainifnotempty{%
1572   \ifx \@oddhead \@empty
1573     \ifx \@oddfoot \@empty
1574       \else
1575         \thispagestyle{plainfoot}%
1576       \fi
1577     \else
1578       \thispagestyle{plainhead}%
1579     \fi}

```

`\maketitle` 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは `\large`、和文のものでは `\Large` になっていましたが、ここでは `\large` にしました。

[2016-11-16] 新設された `nomag` および `nomag*` オプションの場合をデフォルト (`usemag` 相当) に合わせるため、`\smallskip` を `\jsc@smallskip` に置き換えました。`\smallskip` のままでは `nomag(*)` の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。

```

1580 %<*article|book|report|slide>
1581 \if@titlepage
1582   \newcommand{\maketitle}{%
1583     \begin{titlepage}%
1584       \let\footnotesize\small
1585       \let\footnoterule\relax
1586       \let\footnote\thanks
1587       \null\vfil
1588       \if@slide
1589         {\footnotesize \@date}%
1590       \begin{center}
1591         \mbox{} \[\[1\jsZw]
1592         \large
1593         {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
1594         \jsc@smallskip
1595         \@title
1596         \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1597           \par\vskip\z@
1598           {\small \bxjs@subtitle\par}
1599         \fi
1600         \jsc@smallskip

```

```

1601         {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
1602         \vfill
1603         {\small \@author}%
1604     \end{center}
1605 \else
1606 \vskip 60\p@?
1607 \begin{center}%
1608     {\LARGE \@title \par}%
1609     \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1610         \vskip5\p@?
1611         {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1612     \fi
1613     \vskip 3em%
1614     {\large
1615         \lineskip .75em
1616         \begin{tabular}[t]{c}%
1617             \@author
1618         \end{tabular}\par}%
1619     \vskip 1.5em
1620     {\large \@date \par}%
1621 \end{center}%
1622 \fi
1623 \par
1624 \@thanks\vfil\null
1625 \end{titlepage}%
1626 \setcounter{footnote}{0}%
1627 \global\let\thanks\relax
1628 \global\let\maketitle\relax
1629 \global\let\@thanks\@empty
1630 \global\let\@author\@empty
1631 \global\let\@date\@empty
1632 \global\let\@title\@empty
1633 \global\let\title\relax
1634 \global\let\author\relax
1635 \global\let\date\relax
1636 \global\let\and\relax
1637 \bxjs@annihilate@subtitle
1638 }%
1639 \else
1640 \newcommand{\maketitle}{\par
1641     \begingroup
1642     \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1643     \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
1644     \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1645         \parindent 1\jsZw\noindent
1646         \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
1647     \if@twocolumn
1648         \ifnum \col@number=\@ne
1649             \@maketitle

```

```

1650     \else
1651         \twocolumn[\@maketitle]%
1652     \fi
1653     \else
1654         \newpage
1655         \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
1656         \@maketitle
1657     \fi
1658     \plainifnotempty
1659     \@thanks
1660 \endgroup
1661 \setcounter{footnote}{0}%
1662 \global\let\thanks\relax
1663 \global\let\maketitle\relax
1664 \global\let\@thanks\@empty
1665 \global\let\@author\@empty
1666 \global\let\@date\@empty
1667 \global\let\@title\@empty
1668 \global\let\title\relax
1669 \global\let\author\relax
1670 \global\let\date\relax
1671 \global\let\and\relax
1672 \bxjs@annihilate@subtitle
1673 }

```

`\@maketitle` 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。

```

1674 \def\@maketitle{%
1675     \newpage\null
1676     \vskip 2em
1677     \begin{center}%
1678         \let\footnote\thanks
1679         {\LARGE \@title \par}%
1680         \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1681             \vskip3\p@?
1682             {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1683         \fi
1684         \vskip 1.5em
1685         {\large
1686             \lineskip .5em
1687             \begin{tabular}[t]{c}%
1688                 \@author
1689             \end{tabular}\par}%
1690         \vskip 1em
1691         {\large \@date}%
1692     \end{center}%
1693     \par\vskip 1.5em
1694 %<article|slide> \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
1695 }
1696 \fi

```



```

1697 %</article|book|report|slide>
1698 %<*jspf>
1699 \newcommand{\maketitle}{\par
1700   \begin{group}
1701     \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1702     \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
1703     \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1704       \parindent 1\jsZw\noindent
1705       \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hspace{0.3\jsZw}##1}%
1706       \twocolumn[\@maketitle]}%
1707     \plainifnotempty
1708     \@thanks
1709   \end{group}
1710   \setcounter{footnote}{0}%
1711   \global\let\thanks\relax
1712   \global\let\maketitle\relax
1713   \global\let\@thanks\@empty
1714   \global\let\@author\@empty
1715   \global\let\@date\@empty
1716 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
1717   \global\let\title\relax
1718   \global\let\author\relax
1719   \global\let\date\relax
1720   \global\let\and\relax
1721   \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
1722     \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}%
1723     \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
1724   }\fi
1725   \global\let\authors@mail\@undefined}
1726 \def\@maketitle{%
1727   \newpage\null
1728   \vskip 6em % used to be 2em
1729   \begin{center}
1730     \let\footnote\thanks
1731     \ifx\@title\@undefined\else{\LARGE\headfont\@title\par}\fi
1732     \lineskip .5em
1733     \ifx\@author\@undefined\else
1734       \vskip 1em
1735       \begin{tabular}[t]{c}%
1736         \@author
1737       \end{tabular}\par
1738     \fi
1739     \ifx\@etitle\@undefined\else
1740       \vskip 1em
1741       {\large \@etitle \par}%
1742     \fi
1743     \ifx\@eauthor\@undefined\else
1744       \vskip 1em
1745       \begin{tabular}[t]{c}%

```

```

1746      \@eauthor
1747      \end{tabular}\par
1748      \fi
1749      \vskip 1em
1750      \@date
1751      \end{center}
1752      \vskip 1.5em
1753      \centerline{\box\@abstractbox}
1754      \ifx\@keywords\@undefined\else
1755      \vskip 1.5em
1756      \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\textsf{Keywords:}}\ \small\@keywords}}
1757      \fi
1758      \vskip 1.5em}
1759 %</jspf>

```

8.2 章・節

■構成要素 \startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

```

\startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル}
*[別見出し]{見出し}

```

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です (例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下側の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この * 印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに 1 を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。

次は \startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```

1760 \def\startsection#1#2#3#4#5#6{%
1761   \if@noskipsec \leavevmode \fi
1762   \par

```

```

1763 % 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
1764 \@tempskipa #4\relax
1765 % \@afterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
1766 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1767 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
1768 \ifdim \@tempskipa <\z@
1769     \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
1770 \fi
1771 \if@nobreak
1772 %     \everypar{\everyparhook}% これは間違い
1773     \everypar{}%
1774 \else
1775     \addpenalty\@secpenalty
1776 % 次の行は削除
1777 %     \addvspace\@tempskipa
1778 % 次の \noindent まで追加
1779     \ifdim \@tempskipa >\z@
1780         \if@slide\else
1781             \null
1782             \vspace*{-\baselineskip}%
1783         \fi
1784         \vskip\@tempskipa
1785     \fi
1786 \fi
1787 \noindent
1788 % 追加終わり
1789 \@ifstar
1790     {\@ssect{#3}{#4}{#5}{#6}}%
1791     {\@dblarg{\@sect{#1}{#2}{#3}{#4}{#5}{#6}}}%

```

\@sect と \@xsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変えてあります。 \everyparhook も挿入しています。

\everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。

\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。

```

1792 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
1793     \let\bxjs@if@ceph\@firstofone
1794 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble
1795 \fi

```

```

1796 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
1797     \ifnum #2>\c@secnumdepth
1798         \let\@svsec\@empty
1799     \else
1800         \refstepcounter{#1}%
1801         \protected@edef\@svsec{\@secntformat{#1}\relax}%
1802     \fi

```

```

1803 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
1804 \@tempskipa #5\relax
1805 % 条件判断の順序を入れ替えました
1806 \ifdim \@tempskipa<\z@
1807   \def\@svsechd{%
1808     #6{\hskip #3\relax
1809       \@svsec #8}%
1810     \csname #1mark\endcsname{#7}%
1811     \addcontentsline{toc}{#1}{%
1812       \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1813         \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1814       \fi
1815       #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1816   \else
1817     \begingroup
1818     \interlinepenalty \@M % 下から移動
1819     #6{%
1820       \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1821     % \interlinepenalty \@M % 上に移動
1822     #8\@@par}%
1823   \endgroup
1824   \csname #1mark\endcsname{#7}%
1825   \addcontentsline{toc}{#1}{%
1826     \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1827       \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1828     \fi
1829     #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1830   \fi
1831   \@xsect{#5}}

```

二つ挿入した `\everyparhook` のうち後者が `\paragraph` 類の後で 2 回実行され、それ以降は前者が実行されます。

[2016-07-28] `slide` オプションと `twocolumn` オプションを同時に指定した場合の罫線的位置を微調整しました。

```

1832 \def\@xsect#1{%
1833 % 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
1834 \@tempskipa #1\relax
1835 % 条件判断の順序を変えました
1836 \ifdim \@tempskipa<\z@
1837   \@nbreakfalse
1838   \global\@noskipsecttrue
1839   \everypar{%
1840     \if@noskipsec
1841       \global\@noskipsecfalse
1842       {\setbox\z@\lastbox}%
1843       \clubpenalty\@M
1844       \begingroup \@svsechd \endgroup
1845       \unskip

```

```

1846      \@tempskipa #1\relax
1847      \hskip -\@tempskipa
1848      \else
1849        \clubpenalty \@clubpenalty
1850        \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1851        \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1852      \else
1853        \par \nobreak
1854        \vskip \@tempskipa
1855        \@afterheading
1856      \fi
1857      \if@slide
1858        {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@empt\else-6\jsc@empt\fi
1859         \maybeblue\hrule height0\jsc@empt depth1\jsc@empt
1860         \vskip\if@twocolumn 4\jsc@empt\else 7\jsc@empt\fi\relax}%
1861      \fi
1862      \par % 2000-12-18
1863      \ignorespaces}
1864 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
1865   \@tempskipa #3\relax
1866   \ifdim \@tempskipa<\z@
1867     \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
1868   \else
1869     \begingroup
1870       #4{%
1871         \@hangfrom{\hskip #1}%
1872         \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
1873     \endgroup
1874   \fi
1875   \@xsect{#3}}

```

■柱関係の命令

`\chaptermark` `\...mark` の形の命令を初期化します (第 7 節参照)。`\chaptermark` 以外は L^AT_EX 本体で定義済みです。

```

\subsectionmark 1876 \newcommand*\chaptermark[1]{}
\subsubsectionmark 1877 % \newcommand*\{sectionmark}[1]{}
1878 % \newcommand*\{subsectionmark}[1]{}
\paragraphmark 1879 % \newcommand*\{subsubsectionmark}[1]{}
\subparagraphmark 1880 % \newcommand*\{paragraphmark}[1]{}
1881 % \newcommand*\{subparagraphmark}[1]{}

```

■カウンタの定義

`\c@secnumdepth` `secnumdepth` は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを定めるカウンタです。

```

1882 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
1883 %<book|report>\setcounter{secnumdepth}{2}

```

`\c@chapter` 見出し番号のカウンタです。`\newcounter` の第 1 引数が新たに作るカウンタです。これは

`\c@section`

`\c@subsection`

`\c@subsubsection`

`\c@paragraph`

`\c@subparagraph`

第 2 引数が増加するたびに 0 に戻されます。第 2 引数は定義済みのカウンタです。

```
1884 \newcounter{part}
1885 %<book|report>\newcounter{chapter}
1886 %<book|report>\newcounter{section}[chapter]
1887 %<!book&!report>\newcounter{section}
1888 \newcounter{subsection}[section]
1889 \newcounter{subsubsection}[subsection]
1890 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
1891 \newcounter{subparagraph}[paragraph]
```

`\thepart` カウンタの値を出力する命令 `\the` 何々 を定義します。

`\thechapter` カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。

<code>\thesection</code>	<code>\arabic{COUNTER}</code>	1, 2, 3, ...
<code>\thesubsection</code>	<code>\roman{COUNTER}</code>	i, ii, iii, ...
<code>\thesubsubsection</code>	<code>\Roman{COUNTER}</code>	I, II, III, ...
<code>\theparagraph</code>	<code>\alph{COUNTER}</code>	a, b, c, ...
<code>\thesubparagraph</code>	<code>\Alph{COUNTER}</code>	A, B, C, ...
	<code>\kansuji{COUNTER}</code>	一, 二, 三, ...

以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。

```
1892 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
1893 %<!book&!report>% \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
1894 %<!book&!report>\renewcommand{\thesection}{\presectionname\@arabic\c@section\postsectionname}
1895 %<!book&!report>\renewcommand{\thesubsection}{\@arabic\c@section.\@arabic\c@subsection}
1896 %<*book|report>
1897 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
1898 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
1899 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\@arabic\c@subsection}
1900 %</book|report>
1901 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
1902   \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
1903 \renewcommand{\theparagraph}{%
1904   \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
1905 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
1906   \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
```

`\@chapapp` `\@chapapp` の初期値は `\prechaptername` (第) です。

`\@chappos` `\@chappos` の初期値は `\postchaptername` (章) です。

`\appendix` は `\@chapapp` を `\appendixname` に, `\@chappos` を空に再定義します。

[2003-03-02] `\@secapp` は外しました。

```
1907 %<book|report>\newcommand{\@chapapp}{\prechaptername}
1908 %<book|report>\newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
```

■前付, 本文, 後付 本のうち章番号があるのが「本文」, それ以外が「前付」「後付」です。

`\frontmatter` ページ番号をローマ数字にし, 章番号を付けないようにします。

[2017-03-05] `\frontmatter` と `\mainmatter` の 2 つの命令は、改丁または改ページした後で `\pagenumbering{...}` でノンブルを 1 にリセットします。長い間 `\frontmatter` は `openany` のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に偶奇逆転が起こる場合があります。 `openany` がどうかにかかわらず奇数ページまで繰るように修正することで、問題を解消しました。実は、 \LaTeX の標準クラスでは 1998 年に修正されていた問題です（コミュニティ版 \LaTeX の標準クラス 2017/03/05 も参照）。

```
1909 %<*book|report>
1910 \newcommand\frontmatter{%
1911   \pltx@cleartooddpage
1912   \@mainmatterfalse
1913   \pagenumbering{roman}}
```

`\mainmatter` ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。

```
1914 \newcommand\mainmatter{%
1915   \pltx@cleartooddpage
1916   \@mainmattertrue
1917   \pagenumbering{arabic}}
```

`\backmatter` 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。

```
1918 \newcommand\backmatter{%
1919   \if@openleft
1920     \cleardoublepage
1921   \else\if@openright
1922     \cleardoublepage
1923   \else
1924     \clearpage
1925   \fi\fi
1926   \@mainmatterfalse}
1927 %</book|report>
```

■部

`\part` 新しい部を始めます。

`\secdef` を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。

```
\secdef{星なし}{星あり}
```

星なし * のない形の定義です。

星あり * のある形の定義です。

`\secdef` は次のようにして使います。

```
\def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }
\def\CMDA      [#1]#2{...} % \chapter[...]{...} の定義
\def\CMDB      #1{...}    % \chapter*{...} の定義
```

まず `book` と `report` のクラス以外です。

```
1928 %<*&book&!report>
```

```

1929 \newcommand\part{%
1930   \if@noskipsec \leavevmode \fi
1931   \par
1932   \addvspace{4ex}%
1933   \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1934   \secdef\@part\@spart}
1935 %<*/!book&!report>

```

book および report クラスの場合は、少し複雑です。

```

1936 %<*book|report>
1937 \newcommand\part{%
1938   \if@openleft
1939     \cleardoublepage
1940   \else\if@openright
1941     \cleardoublepage
1942   \else
1943     \clearpage
1944   \fi\fi
1945   \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
1946   \if@twocolumn
1947     \onecolumn
1948     \@restonecoltrue
1949   \else
1950     \@restonecolfalse
1951   \fi
1952   \null\vfil
1953   \secdef\@part\@spart}
1954 %</book|report>

```

\@part 部の見出しを出力します。 \bfseries を \headfont に変えました。

book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付けます。

```

1955 %<*!book&!report>
1956 \def\@part[#1]#2{%
1957   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1958     \refstepcounter{part}%
1959     \addcontentsline{toc}{part}{%
1960       \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
1961   \else
1962     \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1963   \fi
1964   \markboth{}{}%
1965   {\parindent\z@
1966     \raggedright
1967     \interlinepenalty \@M
1968     \normalfont
1969     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1970       \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
1971       \par\nobreak

```



```

1972    \fi
1973    \huge \headfont #2%
1974    \markboth{}{}\par}%
1975    \nobreak
1976    \vskip 3ex
1977    \@afterheading}
1978 %</!book&!report>

```

book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。

```

1979 %<*book|report>
1980 \def\@part[#1]#2{%
1981   \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1982     \refstepcounter{part}%
1983     \addcontentsline{toc}{part}{%
1984       \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
1985   \else
1986     \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1987   \fi
1988   \markboth{}{}\%
1989   {\centering
1990     \interlinepenalty \@M
1991     \normalfont
1992     \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1993       \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
1994       \par\vskip20\p@?
1995     \fi
1996     \Huge \headfont #2\par}%
1997   \@endpart}
1998 %</book|report>

```

\@spart 番号を付けない部です。

```

1999 %<*!book&!report>
2000 \def\@spart#1{%
2001   \parindent \z@ \raggedright
2002   \interlinepenalty \@M
2003   \normalfont
2004   \huge \headfont #1\par}%
2005   \nobreak
2006   \vskip 3ex
2007   \@afterheading}
2008 %</!book&!report>
2009 %<*book|report>
2010 \def\@spart#1{%
2011   \centering
2012   \interlinepenalty \@M
2013   \normalfont
2014   \Huge \headfont #1\par}%
2015   \@endpart}
2016 %</book|report>

```

`\@endpart` `\@part` と `\@spart` の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] `openany` のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは L^AT_EX では `classes.dtx` v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
2017 %<*book|report>
2018 \def\@endpart{\vfil\newpage
2019   \if@twoside
2020     \if@openleft %% added (2017/02/24)
2021       \null\thispagestyle{empty}\newpage
2022     \else\if@openright %% added (2016/12/13)
2023       \null\thispagestyle{empty}\newpage
2024     \fi\fi %% added (2016/12/13, 2017/02/24)
2025   \fi
2026   \if@restonecol
2027     \twocolumn
2028   \fi}
2029 %</book|report>
```

■章

`\chapter` 章の最初のページスタイルは、全体が `empty` でなければ `plain` にします。また、`\@topnum` を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

```
2030 %<*book|report>
2031 \newcommand{\chapter}{%
2032   \if@openleft\cleardoublepage\else
2033   \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
2034   \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
2035   \global\@topnum\z@
2036   \if@english \afterindentfalse \else \afterindenttrue \fi
2037   \secdef
2038     {\@omit@numberfalse\@chapter}%
2039     {\@omit@numbertrue\@schapter}}
```

`\@chapter` 章見出しを出力します。`secnumdepth` が 0 以上かつ `\@mainmatter` が真のとき章番号を出力します。

```
2040 \def\@chapter[#1]#2{%
2041   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
2042     \if@mainmatter
2043       \refstepcounter{chapter}%
2044       \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
2045       \addcontentsline{toc}{chapter}%
2046         {\protect\numberline
2047 %       %{\if@english\thechapter\else\@chapapp\thechapter\@chappos\fi}%
2048         {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
2049         #1}%
2050     \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
```

```

2051 \else
2052   \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
2053 \fi
2054 \chaptermark{#1}%
2055 \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
2056 \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
2057 \if@twocolumn
2058   \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
2059 \else
2060   \@makechapterhead{#2}%
2061   \@afterheading
2062 \fi}

```

`\@makechapterhead` 実際に章見出しを組み立てます。`\bfseries` を `\headfont` に変えました。

```

2063 \def\@makechapterhead#1{%
2064   \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
2065   {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
2066     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
2067       \if@mainmatter
2068         \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
2069         \par\nobreak
2070         \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
2071       \fi
2072     \fi
2073     \interlinepenalty\@M
2074     \Huge \headfont #1\par\nobreak
2075     \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt

```

`\@schapter` `\chapter*{...}` コマンドの本体です。`\chaptermark` を補いました。

```

2076 \def\@schapter#1{%
2077   \chaptermark{#1}%
2078   \if@twocolumn
2079     \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
2080   \else
2081     \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
2082   \fi}

```

`\@makeschapterhead` 番号なしの章見出しです。

```

2083 \def\@makeschapterhead#1{%
2084   \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
2085   {\parindent \z@ \raggedright
2086     \normalfont
2087     \interlinepenalty\@M
2088     \Huge \headfont #1\par\nobreak
2089     \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
2090 %</book|report>

```

■下位レベルの見出し

`\section` 欧文版では `\@startsection` の第 4 引数を負にして最初の段落の字下げを禁止していますが、和文版では正にして字下げするようにしています。

段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。

```
2091 \if@twocolumn
2092   \newcommand{\section}{%
2093     %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
2094     \@startsection{section}{1}{\z@}%
2095     %<kiyou>    {0.6\Cvs}{0.4\Cvs}%
2096     %<kiyou>    {\Cvs}{0.5\Cvs}%
2097     %    {\normalfont\large\headfont\@secapp}%
2098     {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
2099 \else
2100   \newcommand{\section}{%
2101     \if@slide\clearpage\fi
2102     \@startsection{section}{1}{\z@}%
2103     {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
2104     {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
2105     %    {\normalfont\Large\headfont\@secapp}%
2106     {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
2107 \fi
```

`\subsection` 同上です。

```
2108 \if@twocolumn
2109   \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
2110     {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else \z@ \fi}%
2111     {\normalfont\normalsize\headfont}}
2112 \else
2113   \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
2114     {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
2115     {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
2116     {\normalfont\large\headfont}}
2117 \fi
```

`\subsubsection` [2016-07-22] `slide` オプション指定時に `\subsubsection` の文字列と罫線が重なる問題に対処しました (forum:1982)。

```
2118 \if@twocolumn
2119   \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
2120     {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else \z@ \fi}%
2121     {\normalfont\normalsize\headfont}}
2122 \else
2123   \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
2124     {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
2125     {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else \z@ \fi}%
2126     {\normalfont\normalsize\headfont}}
2127 \fi
```

`\paragraph` 見出しの後ろで改行されません。

[2016-11-16] 従来は `\paragraph` の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、こ

のマークを変更可能にするため `\jsParagraphMark` というマクロに切り出しました。これで、たとえば

```
\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}
```

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から `\jsParagraphMark` をサポートしている。段落のマーク (■) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

`\jsJaChar` は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は `\jachar` と同義になるが、それ以外は何もしない。

```
2128 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
2129 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
2130 \ifx\bxjs@paragraph@mark@empty
2131   \let\jsParagraphMark@empty
2132 \else\ifx\bxjs@paragraph@mark@undefined\else
2133   \long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
2134 \fi\fi
2135 \let\jsJaChar@empty
2136 \if@twocolumn
2137   \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
2138     {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
2139     <jspf> {\normalfont\normalsize\headfont}}
2140     <!jspf> {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
2141 \else
2142   \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
2143     {0.5\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
2144     {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
2145     <jspf> {\normalfont\normalsize\headfont}}
2146     <!jspf> {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
2147 \fi
```

`\subparagraph` 見出しの後ろで改行されません。

```
2148 \if@twocolumn
2149   \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
2150     {\z@}{\if@slide .4\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}%
2151     {\normalfont\normalsize\headfont}}
2152 \else
2153   \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
2154     {\z@}{\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}%
2155     {\normalfont\normalsize\headfont}}
2156 \fi
```

8.3 リスト環境

第 k レベルのリストの初期化をするのが `\@listk` です ($k = i, ii, iii, iv$)。 `\@listk` は `\leftmargin` を `\leftmargin k` に設定します。

`\leftmargini` 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが、ここでは全角幅の 2 倍にしました。

[2002-05-11] 3zw に変更しました。

[2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。

```
2157 \if@slide
2158   \setlength\leftmargini{1\jsZw}
2159 \else
2160   \if@twocolumn
2161     \setlength\leftmargini{2\jsZw}
2162   \else
2163     \setlength\leftmargini{3\jsZw}
2164   \fi
2165 \fi
```

`\leftmarginii` `ii`, `iii`, `iv` は `\labelsep` とそれぞれ ‘(m)’, ‘vii.’, ‘M.’ の幅との和より大きくすること
`\leftmarginiii` になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

```
\leftmarginiv 2166 \if@slide
\leftmarginv 2167   \setlength\leftmarginii {1\jsZw}
2168   \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}
\leftmarginvi 2169   \setlength\leftmarginiv {1\jsZw}
2170   \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
2171   \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
2172 \else
2173   \setlength\leftmarginii {2\jsZw}
2174   \setlength\leftmarginiii{2\jsZw}
2175   \setlength\leftmarginiv {2\jsZw}
2176   \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
2177   \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
2178 \fi
```

`\labelsep` `\labelsep` はラベルと本文の間の距離です。`\labelwidth` はラベルの幅です。これは二分
`\labelwidth` に変えました。

```
2179 \setlength \labelsep {0.5\jsZw} % .5em
2180 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
2181 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
```

`\partopsep` リスト環境の前に空行がある場合、`\parskip` と `\topsep` に `\partopsep` を加えた値だけ
縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

```
2182 \setlength\partopsep{z@} % {2\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
```

`\@beginparpenalty` リストや段落環境の前後、リスト項目間に挿入されるペナルティです。

`\@endparpenalty`

`\@itempenalty`

```

2183 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
2184 \@endparpenalty -\@lowpenalty
2185 \@itempenalty -\@lowpenalty

```

`\@listi` `\@listi` は `\leftmargin`, `\parsep`, `\topsep`, `\itemsep` などのトップレベルの定義をします。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます（たとえば `\small` の中では小さい値に設定されます）。このため、`\normalsize` がすべてのパラメータを戻せるように、`\@listI` で `\@listi` のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここでは簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてあります。アスキーの標準スタイルではトップレベルの `itemize`, `enumerate` 環境でだけ最初と最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

[2004-09-27] `\topsep` のグルー $_{-0.1}^{+0.2}$ `\baselineskip` を思い切って外しました。

```

2186 \def\@listi{\leftmargin\leftmarginI
2187   \parsep \z@
2188   \topsep 0.5\baselineskip
2189   \itemsep \z@ \relax}
2190 \let\@listI\@listi

```

念のためパラメータを初期化します（実際には不要のようです）。

```

2191 \@listi

```

`\@listii` 第 2～6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。

```

\@listiii 2192 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
\@listiv 2193   \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
2194   \topsep \z@
\@listv 2195   \parsep \z@
\@listvi 2196   \itemsep\parsep}
2197 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
2198   \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
2199   \topsep \z@
2200   \parsep \z@
2201   \itemsep\parsep}
2202 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
2203   \labelwidth\leftmarginiv
2204   \advance\labelwidth-\labelsep}
2205 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
2206   \labelwidth\leftmarginv
2207   \advance\labelwidth-\labelsep}
2208 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
2209   \labelwidth\leftmarginvi
2210   \advance\labelwidth-\labelsep}

```

■**enumerate 環境** `enumerate` 環境はカウンタ `enumi`, `enumii`, `enumiii`, `enumiv` を使います。`enumn` は第 n レベルの番号です。

`\theenumi` 出力する番号の書式を設定します。これらは L^AT_EX 本体 (`ltlists.dtx` 参照) で定義済みですが、ここでは表し方を変えています。`\@arabic`, `\@alph`, `\@roman`, `\@Alph` はそれぞれ

`\theenumiii`

`\theenumiv`

れ算用数字，小文字アルファベット，小文字ローマ数字，大文字アルファベットで番号を出力する命令です。

```
2211 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
2212 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
2213 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
2214 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
```

`\labelenumi` `enumerate` 環境の番号を出力する命令です。第 2 レベル以外は最後に欧文のピリオドが付きますが，これは好みに応じて取り払ってください。第 2 レベルの番号のかっこは和文用に
`\labelenumii` 換え，その両側に入る余分なグルーを `\inhibitglue` で取り除いています。

`\labelenumiv`

和文の括弧で囲むための補助命令 `\jsInJaParen` を定義して `\labelenumii` でそれを用いている。

※現状の `zxjatype` の `\inhibitglue` の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため `enumii` の出力が異常になるという不具合があった。`zxjatype` を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫 (`\bxjs@dust`) でガードしておく。

```
2215 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}
2216 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%
2217   \bxjs@dust\jsInhibitGlue (\theenumii) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
2218 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
2219 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen{ (\theenumii) }}
2220 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
2221 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
```

`\p@enumii` `\p@enumn` は `\ref` コマンドで `enumerate` 環境の第 n レベルの項目が参照されるとき
`\p@enumiii` の書式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。

```
\p@enumiv 2222 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
2223 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii) }
2224 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

■itemize 環境

`\labelitemi` `itemize` 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

```
\labelitemii 2225 \newcommand\labelitemi{\textbullet}
\labelitemiii 2226 \newcommand\labelitemii{\normalfont\bfseries \textendash}
2227 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}
\labelitemiv 2228 \newcommand\labelitemiv{\textperiodcentered}
```

■description 環境

`description` 本来の `description` 環境では，項目名が短いと，説明部分の頭がそれに引きずられて左に出てしまいます。これを解決した新しい `description` の実装です。

```
2229 \newenvironment{description}{%
2230   \list{}{%
```



```

2231 \labelwidth=\leftmargin
2232 \labelsep=1\jsZw
2233 \advance \labelwidth by -\labelsep
2234 \let \makelabel=\descriptionlabel}}{\endlist}

```

`\descriptionlabel` `description` 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き（たとえば `\hspace{1\jsZw}`）を入れるのもいいと思います。

```

2235 \newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont #1\hfil}

```

■概要

`abstract` 概要（要旨、梗概）を出力する環境です。`book` クラスでは各章の初めにちょっとしたことを書くのに使います。`titlepage` オプション付きの `article` クラスでは、独立したページに出力されます。`abstract` 環境は元は `quotation` 環境で作られていましたが、`quotation` 環境の右マージンをゼロにしたので、`list` 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は `\maketitle` で行われます。

`bxjsreport` クラスの `abstract` 環境は：

- `layout=v1` の場合は `jsbook+report` の動作を継承する。つまり `jsbook` と同じになる。
- `layout=v2` の場合は新設の `jsreport` の動作を継承する。つまり `jsarticle (+titlepage)` と同じになる。

`chapterabstract` `jsbook` の `abstract` 環境（「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの）を `chapterabstract` と呼ぶことにする。

```

2236 %<*book|report>
2237 \newenvironment{chapterabstract}{%
2238 \begin{list}{-}{%
2239 \listparindent=1\jsZw
2240 \itemindent=\listparindent
2241 \rightmargin=\z@
2242 \leftmargin=5\jsZw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
2243 %</book|report>

```

“普通の” `abstract` 環境の定義。

```

2244 %<*article|report|slide>
2245 \newbox\@abstractbox
2246 \if@titlepage
2247 \newenvironment{abstract}{%
2248 \titlepage
2249 \null\vfil
2250 \@beginparpenalty\@lowpenalty
2251 \begin{center}%
2252 \headfont \abstractname
2253 \endparpenalty\@M
2254 \end{center}%

```

BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。

```

2255 \par}%
2256 {\par\vfil\null\endtitlepage}
2257 \else
2258 \newenvironment{abstract}{%
2259 \if@twocolumn
2260 \ifx\maketitle\relax
2261 \section*{\abstractname}%
2262 \else
2263 \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2264 \begin{minipage}[b]{\textwidth}
2265 \small\parindent1\jsZw
2266 \begin{center}%
2267 {\headfont \abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z@}}%
2268 \end{center}%
2269 \list{}{%
2270 \listparindent\parindent
2271 \itemindent \listparindent
2272 \rightmargin \leftmargin}%
2273 \item\relax
2274 \fi
2275 \else
2276 \small
2277 \begin{center}%
2278 {\headfont \abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z@}}%
2279 \end{center}%
2280 \list{}{%
2281 \listparindent\parindent
2282 \itemindent \listparindent
2283 \rightmargin \leftmargin}%
2284 \item\relax
2285 \fi}{\if@twocolumn
2286 \ifx\maketitle\relax
2287 \else
2288 \endlist\end{minipage}\egroup
2289 \fi
2290 \else
2291 \endlist
2292 \fi}
2293 \fi
2294 %</article|report|slide>
2295 %<*jspf>
2296 \newbox\@abstractbox
2297 \newenvironment{abstract}{%
2298 \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2299 \begin{minipage}[b]{157\jsc@mmm}{\sffamily Abstract}\par
2300 \small
2301 \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%

```

```

2302 {\end{minipage}\egroup}
2303 %</jspf>

```

`bxjs@force@chapterabstract` が真の場合は、`abstract` 環境を `chapterabstract` 環境と等価にする。

```

2304 %<*book|report>
2305 \ifbxjs@force@chapterabstract
2306 \let\abstract\chapterabstract
2307 \let\endabstract\endchapterabstract
2308 \fi
2309 %</book|report>

```

■キーワード

`keywords` キーワードを準備する環境です。実際の出力は `\maketitle` で行われます。

```

2310 %<*jspf>
2311 %\newbox\@keywordsbox
2312 %\newenvironment{keywords}{%
2313 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
2314 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
2315 % \small\parindent0\jsZw}%
2316 % {\end{minipage}\egroup}
2317 %</jspf>

```

■verse 環境

`verse` 詩のための `verse` 環境です。

```

2318 \newenvironment{verse}{%
2319 \let \=\@centercr
2320 \list{}{%
2321 \itemsep \z@
2322 \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
2323 \listparindent\itemindent
2324 \rightmargin \z@
2325 \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em
2326 \item\relax}{\endlist}

```

■quotation 環境

`quotation` 段落の頭の字下げ量を 1.5em から `\parindent` に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

```

2327 \newenvironment{quotation}{%
2328 \list{}{%
2329 \listparindent\parindent
2330 \itemindent\listparindent
2331 \rightmargin \z@}%
2332 \item\relax}{\endlist}

```

■quote 環境

`quote` `quote` 環境は、段落がインデントされないことを除き、`quotation` 環境と同じです。

```
2333 \newenvironment{quote}%  
2334 {\list{}{\rightmargin\z0}\item\relax}{\endlist}
```

■定理など `ltthm.dtx` 参照。たとえば次のように定義します。

```
\newtheorem{definition}{定義}  
\newtheorem{axiom}{公理}  
\newtheorem{theorem}{定理}
```

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、`\itshape` を削除しました。

[2009-08-23] `\bfseries` を `\headfont` に直し、`\labelsep` を `1zw` にし、括弧を全角にしました。

```
2335 \def\@begintheorem#1#2{\trivlist\labelsep=1\jsZw  
2336 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2}]}  
2337 \def\@opargbegintheorem#1#2#3{\trivlist\labelsep=1\jsZw  
2338 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3)}]}
```

`titlepage` タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 p_{La}T_EX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて、book クラスでタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても、横組クラスしかありませんでしたので、従来の挙動は何も変わっていません。また、book 以外の場合のページ番号のリセットもコミュニティ版 p_{La}T_EX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが、こちらも片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので、従来の挙動は何も変わらずに済みました。

```
2339 \newenvironment{titlepage}{%  
2340 %<book> \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24  
2341 \if@twocolumn  
2342 \@restonecoltrue\onecolumn  
2343 \else  
2344 \@restonecolfalse\newpage  
2345 \fi  
2346 \thispagestyle{empty}%  
2347 \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-  
24  
2348 }%  
2349 {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi  
2350 \if@twoside\else  
2351 \setcounter{page}\@ne  
2352 \fi}
```

■付録

`\appendix` 本文と付録を分離するコマンドです。

```
2353 %<*!book&!report>
2354 \newcommand{\appendix}{\par
2355   \setcounter{section}{0}%
2356   \setcounter{subsection}{0}%
2357   \gdef\presectionname{\appendixname}%
2358   \gdef\postsectionname{}}%
2359 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
2360 \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%
2361 \gdef\thesubsection{\@Alph\c@section.\@arabic\c@subsection}}
2362 %</!book&!report>
2363 %<*book|report>
2364 \newcommand{\appendix}{\par
2365   \setcounter{chapter}{0}%
2366   \setcounter{section}{0}%
2367   \gdef\@chapapp{\appendixname}%
2368   \gdef\@chappos{}}%
2369 \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}
2370 %</book|report>
```

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

`\arraycolsep` array 環境の列間には `\arraycolsep` の 2 倍の幅の空きが入ります。

```
2371 \setlength\arraycolsep{5\p@?}
```

`\tabcolsep` tabular 環境の列間には `\tabcolsep` の 2 倍の幅の空きが入ります。

```
2372 \setlength\tabcolsep{6\p@?}
```

`\arrayrulewidth` array, tabular 環境内の罫線の幅です。

```
2373 \setlength\arrayrulewidth{.4\p@}
```

`\doublerulesep` array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。

```
2374 \setlength\doublerulesep{2\p@}
```

■tabbing 環境

`\tabbingsep` \' コマンドで入るアキです。

```
2375 \setlength\tabbingsep{\labelsep}
```

■minipage 環境

`\@mpfootins` minipage 環境の脚注の `\skip\@mpfootins` は通常のページの `\skip\footins` と同じ働きをします。

```
2376 \skip\@mpfootins = \skip\footins
```

■framebox 環境

`\fboxsep` `\fbox`, `\framebox` で内側のテキストと枠との間の空きです。

`\fboxrule` `\fbox`, `\framebox` の罫線の幅です。

```
2377 \setlength\fboxsep{3\p@?}
2378 \setlength\fboxrule{.4\p@}
```

■equation と eqnarray 環境

`\theequation` 数式番号を出力するコマンドです。

```
2379 %<!book&!report>\renewcommand \theequation {\@arabic\c@equation}
2380 %<*book|report>
2381 \@addtoreset{equation}{chapter}
2382 \renewcommand\theequation
2383 {\ifnum \c@chapter>z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}
2384 %</book|report>
```

`\jot` `eqnarray` の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

```
2385 % \setlength\jot{3pt}
```

`\@eqnnum` 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

`\jsInhibitGlue` (`\theequation`) `\jsInhibitGlue` のように和文かっこを使うことも可能です。

```
2386 % \def\@eqnnum{(\theequation)}
```

`amsmath` パッケージを使う場合は `\tagform@` を次のように修正します。

```
2387 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{(\ignorespaces#1\unskip\@italiccorr)}}
```

8.5 フロート

タイプ `TYPE` のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

`\fps@TYPE` フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

`\ftype@TYPE` フロートの番号です。2 の累乗 (1, 2, 4, ...) でなければなりません。

`\ext@TYPE` フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

`\fnum@TYPE` キャプション用の番号を生成するマクロです。

`\@makecaption`(*num*)(*text*) キャプションを出力するマクロです。*num* は `\fnum@...` の生成する番号、*text* はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の `\parbox` に入ります。

■figure 環境

`\c@figure` 図番号のカウンタです。

`\thefigure` 図番号を出力するコマンドです。

```
2388 %<!*book&!report>
2389 \newcounter{figure}
2390 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}
2391 %</!*book&!report>
2392 %<*book|report>
2393 \newcounter{figure}[chapter]
2394 \renewcommand \thefigure
2395     {\ifnum \c@chapter>z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}
2396 %</book|report>
```

`\fps@figure` `figure` のパラメータです。`\figurename` の直後に `~` が入っていましたが、ここでは外し
`\ftype@figure` ました。

```
\ext@figure 2397 \def\fps@figure{tbp}
2398 \def\ftype@figure{1}
\fnun@figure 2399 \def\ext@figure{lof}
2400 \def\fnun@figure{\figurename\nobreak\thefigure}
```

`figure` * 形式は段抜きのフロートです。

```
figure* 2401 \newenvironment{figure}%
2402         {\@float{figure}}%
2403         {\end@float}
2404 \newenvironment{figure*}%
2405         {\@dblfloat{figure}}%
2406         {\end@dblfloat}
```

■table 環境

`\c@table` 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では `\thechapter.` が
`\thetable` `\thechapter{}`・になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。

```
2407 %<!*book&!report>
2408 \newcounter{table}
2409 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
2410 %</!*book&!report>
2411 %<*book|report>
2412 \newcounter{table}[chapter]
2413 \renewcommand \thetable
2414     {\ifnum \c@chapter>z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
2415 %</book|report>
```

`\fps@table` `table` のパラメータです。`\tablename` の直後に `~` が入っていましたが、ここでは外しま
`\ftype@table` した。

```
\ext@table 2416 \def\fps@table{tbp}
2417 \def\ftype@table{2}
\fnun@table 2418 \def\ext@table{lot}
2419 \def\fnun@table{\tablename\nobreak\thetable}
```

`table` * は段抜きのフロートです。

`table*`

```

2420 \newenvironment{table}%
2421         {\@float{table}}%
2422         {\end@float}
2423 \newenvironment{table*}%
2424         {\@dblfloat{table}}%
2425         {\end@dblfloat}

```

8.6 キャプション

`\@makecaption` `\caption` コマンドにより呼び出され、実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号、第 2 引数はテキストです。

`\abovecaptionskip` それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。`\belowcaptionskip` が 0 になっていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしまうのを直しました。

```

2426 \newlength\abovecaptionskip
2427 \newlength\belowcaptionskip
2428 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@
2429 \setlength\belowcaptionskip{5\p@?} % 元: 0\p@

```

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを `\small` にし、キャプションの幅を 2cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

```

2430 %<!*jspf>
2431 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small
2432 %   \advance\leftskip 10\jsc@mmm
2433 %   \advance\rightskip 10\jsc@mmm
2434 %   \vskip\abovecaptionskip
2435 %   \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%
2436 %   \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2437 %     #1\hskip1\jsZw\relax #2\par
2438 %   \else
2439 %     \global \minipagefalse
2440 %     \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2441 %   \fi
2442 %   \vskip\belowcaptionskip}}
2443 \long\def\@makecaption#1#2{{\small
2444   \advance\leftskip .0628\linewidth
2445   \advance\rightskip .0628\linewidth
2446   \vskip\abovecaptionskip
2447   \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%
2448   \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
2449   #1\zwspace#2\par
2450   \vskip\belowcaptionskip}}
2451 %</!*jspf>
2452 %<!*jspf>
2453 \long\def\@makecaption#1#2{%

```



```

2454 \vskip\abovecaptionskip
2455 \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
2456 \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2457   {\small\sffamily
2458     \list{#1}{%
2459       \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2460       \itemsep \z@
2461       \itemindent \z@
2462       \labelsep \z@
2463       \labelwidth 11\jsc@mmm
2464       \listparindent\z@
2465       \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
2466 \else
2467   \global \@minipagefalse
2468   \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2469 \fi
2470 \vskip\belowcaptionskip}
2471 %</jspf>

```

9 フォントコマンド

ここでは L^AT_EX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ `\text...` と `\math...` を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の `\scr@DeclareOldFontCommand` に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

```

\if@jsc@warnoldfontcmd


---


\if@jsc@warnoldfontcmdexception \if@jsc@warnoldfontcmd は BXJS クラスでは不使用。
\if@jsc@warnoldfontcmdexception \if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態
を表す。


---


2472 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd
2473 \@jsc@warnoldfontcmdtrue
2474 \newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception
2475 \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse

\jsc@DeclareOldFontCommand
2476 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
2477   \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
2478   \DeclareOldFontCommand{#1}{%
2479     \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
2480   }{%

```

```

2481     \bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
2482 }%
2483 }
2484 \DeclareRobustCommand*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{%
2485   \ClassInfo\bxjs@clsname
2486   {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
2487     The first occurrence is}%
2488 }

```

`\allowoldfontcommands` “二文字フォント命令”の使用を許可する（警告しない）。

`\disallowoldfontcommands` “二文字フォント命令”の使用に対して警告を出す。

```

2489 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{%
2490   \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
2491 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
2492   \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}

```

※ 1.x 版では Warning ではなく Info に留めておく。

```

2493 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty
2494 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
2495   \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
2496 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%
2497   \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
2498     \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
2499     \ifx#1\relax
2500       \global\let#1=t%
2501       \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
2502     \fi
2503   \fi}
2504 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
2505 % \par
2506   \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
2507   \let\@tempa\@empty
2508   \def\do##1{%
2509     \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
2510       \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
2511   \bxjs@oldfontcmd@list
2512   \ifx\@tempa\@empty\else
2513     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
2514       {Some old font commands were used in text\MessageBreak
2515         (see the log file for detail)}%
2516     \ClassInfo\bxjs@clsname
2517       {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
2518         \space\@tempa\MessageBreak
2519         You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
2520         new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
2521         new, combinable font commands. The

```

```

2522     class provides\MessageBreak
2523     the old font commands
2524     only for compatibility%
2525     \@gobble}%
2526 \fi}

```

単純に `\AtEndDocument` のフックの中で `\bxjs@warnoldfontcmd@final` を実行した場合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行されるため捕捉できない。これに対処するため、`\end{document}` 中に実行される `\clearpage` の処理の直後に `\bxjs...final` が呼ばれるようにする。

```

2527 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
2528   \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
2529 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}

```

`\mc` フォントファミリーを変更します。

```

\gt 2530 \jsc@DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
\rm 2531 \jsc@DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathgt}
2532 \jsc@DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
\sfb 2533 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sf}{\normalfont\sffamily}{\mathsf}
\tt 2534 \jsc@DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}

```

`\bf` ボールドシリーズにします。通常のミディアムシリーズに戻すコマンドは `\mdseries` です。

```

2535 \jsc@DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mathbf}

```

`\it` フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま
`\sl` せん（警告メッセージを出力します）。通常のアップライト体に戻すコマンドは `\upshape`
`\sc` です。

```

2536 \jsc@DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit}
2537 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\@nomath\sl}
2538 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}

```

`\cal` 数式モード以外では何もしません（警告を出します）。

```

\mit 2539 \DeclareRobustCommand*\cal{\@fontswitch\relax\mathcal}
2540 \DeclareRobustCommand*\mit{\@fontswitch\relax\mathnormal}

```

10 相互参照

10.1 目次の類

`\section` コマンドは `.toc` ファイルに次のような行を出力します。

```

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

```

たとえば `\section` に見出し番号が付く場合、上の「タイトル」は

`\numberline{番号}{見出し}`

となります。この「番号」は `\thesection` コマンドで生成された見出し番号です。

`figure` 環境の `\caption` コマンドは `.lof` ファイルに次のような行を出力します。

`\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}`

この「番号」は `\thefigure` コマンドで生成された図番号です。

`table` 環境も同様です。

`\contentsline{...}` は `\l@...` というコマンドを実行するので、あらかじめ `\l@chapter`, `\l@section`, `\l@figure` などを定義しておかなければなりません。これらの多くは `\@dottedtocline` コマンドを使って定義します。これは

`\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}`

という書式です。

レベル この値が `tocdepth` 以下のときだけ出力されます。`\chapter` はレベル 0, `\section` はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に `\numberline` コマンドが含まれる場合、節番号が入る箱の幅です。

`\@pnumwidth` ページ番号の入る箱の幅です。

`\@tocrmarg` 右マージンです。`\@tocrmarg ≥ \@pnumwidth` とします。

`\@dotsep` 点の間隔です (単位 mu)。

`\c@tocdepth` 目次ページに出力する見出しレベルです。元は `article` で 3, その他で 2 でしたが、ここでは一つずつ減らしています。

```
2541 \newcommand\@pnumwidth{1.55em}
2542 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}
2543 \newcommand\@dotsep{4.5}
2544 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}
2545 %<book|report>\setcounter{tocdepth}{1}
```

■目次

`\tableofcontents` 目次を生成します。

`\jsc@tocl@width` [2013-12-30] `\prechaptername` などから見積もった目次のラベルの長さです。 (by ts)

```
2546 \newdimen\jsc@tocl@width
2547 \newcommand{\tableofcontents}{%
2548 %<*book|report>
2549 \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}%
2550 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
2551 \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima \setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
2552 \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
```

```

2553 \if@twocolumn
2554 \@restonecoltrue\onecolumn
2555 \else
2556 \@restonecolfalse
2557 \fi
2558 \chapter*{\contentsname}%
2559 \mkboth{\contentsname}{}%
2560 %</book|report>
2561 %<*&book&!report>
2562 \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
2563 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
2564 \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
2565 \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
2566 \section*{\contentsname}%
2567 \mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
2568 %</!book&!report>
2569 \@starttoc{toc}%
2570 %<book|report> \if@restonecol\twocolumn\fi
2571 }

```

\l@part 部の目次です。

```

2572 \newcommand*{\l@part}[2]{%
2573 \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
2574 %<!book&!report> \addpenalty\@secpenalty
2575 %<book|report> \addpenalty{-\@highpenalty}%
2576 \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
2577 \begingroup
2578 \parindent \z@
2579 % \@pnumwidth should be \@tocrmarg
2580 % \rightskip \@pnumwidth
2581 \rightskip \@tocrmarg
2582 \parfillskip -\rightskip
2583 {\leavevmode
2584 \large \headfont
2585 \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
2586 #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
2587 \nobreak
2588 %<book|report> \global\@nobreaktrue
2589 %<book|report> \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
2590 \endgroup
2591 \fi}

```

\l@chapter 章の目次です。 \@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。

[2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)

```

2592 %<*&book|report>
2593 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
2594 \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
2595 \addpenalty{-\@highpenalty}%

```

```

2596 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
2597 % \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
2598 \begingroup
2599 \parindent\z@
2600 % \rightskip\@pnumwidth
2601 \rightskip\@tocrmarg
2602 \parfillskip-\rightskip
2603 \leavevmode\headfont
2604 % % \if@english\setlength\@lnumwidth{5.5em}\else\setlength\@lnumwidth{4.683\jsZw}\fi
2605 \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\jsZw
2606 \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
2607 #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
2608 \penalty\@highpenalty
2609 \endgroup
2610 \fi}
2611 %</book|report>

```

\l@section 節の目次です。

```

2612 %<*!book&!report>
2613 \newcommand*{\l@section}[2]{%
2614 \ifnum \c@tocdepth >\z@
2615 \addpenalty{\@secpenalty}%
2616 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
2617 \begingroup
2618 \parindent\z@
2619 % \rightskip\@pnumwidth
2620 \rightskip\@tocrmarg
2621 \parfillskip-\rightskip
2622 \leavevmode\headfont
2623 % % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
2624 \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\jsZw
2625 \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
2626 #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
2627 \endgroup
2628 \fi}
2629 %</!book&!report>

```

インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが, 1zw, 3.683zw に変えました。

```

2630 %<book|report> % \newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1\jsZw}{3.683\jsZw}}
[2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)

```

\l@subsection さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので, 要修正かも

\l@subsubsection しれません。

\l@paragraph [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)

```

\l@subparagraph 2631 %<*!book&!report>
2632 % \newcommand*{\l@subsection}{\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
2633 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
2634 % \newcommand*{\l@paragraph}{\@dottedtocline{4}{7.0em}{4.1em}}

```

```

2635 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
2636 %
2637 % \newcommand*{\l@section} {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
2638 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
2639 % \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
2640 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
2641 %
2642 \newcommand*{\l@subsection}{%
2643     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
2644     \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\jsZw}}
2645 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
2646     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
2647     \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
2648 \newcommand*{\l@paragraph}{%
2649     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
2650     \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\jsZw}}
2651 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
2652     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
2653     \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
2654 %<!/book&!report>
2655 %<*book|report>
2656 % \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{3.8em}{3.2em}}
2657 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
2658 % \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
2659 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
2660 \newcommand*{\l@section}{%
2661     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
2662     \@dottedtocline{1}{\@tempdima}{3.683\jsZw}}
2663 \newcommand*{\l@subsection}{%
2664     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
2665     \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3.5\jsZw}}
2666 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
2667     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
2668     \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4.5\jsZw}}
2669 \newcommand*{\l@paragraph}{%
2670     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
2671     \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5.5\jsZw}}
2672 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
2673     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
2674     \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6.5\jsZw}}
2675 %</book|report>

```

\numberline 欧文版 L^AT_EX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
 \@lnumwidth ですが、アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
 に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
 入れておきました。

```

2676 \newdimen\@lnumwidth
2677 \def\numberline#1{\hb@xt@\@lnumwidth{#1\hfil}\hspace{0pt}}

```

`\@dottedtocline` L^AT_EX 本体 (ltsect.dtx 参照) での定義と同じですが, `\@tempdima` を `\@lnumwidth` に変えています。

```

2678 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
2679   \vskip \z@ \@plus.2\p@?
2680   {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
2681     \parindent #2\relax\@afterindenttrue
2682     \interlinepenalty\@M
2683     \leavevmode
2684     \@lnumwidth #3\relax
2685     \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
2686     {#4}\nobreak
2687     \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep
2688       mu$}\hfill \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
2689       \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}

```

■ 図目次と表目次

`\listoffigures` 図目次を出力します。

```

2690 \newcommand{\listoffigures}{%
2691   %<*book|report>
2692   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
2693   \else\@restonecolfalse\fi
2694   \chapter*{\listfigurename}%
2695   \@mkboth{\listfigurename}{}%
2696   %</book|report>
2697   %<*&!book&!report>
2698   \section*{\listfigurename}%
2699   \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
2700   %</!book&!report>
2701   \@starttoc{lof}%
2702   %<book|report> \if@restonecol\twocolumn\fi
2703 }

```

`\l@figure` 図目次の項目を出力します。

```

2704 \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1\jsZw}{3.683\jsZw}}

```

`\listoftables` 表目次を出力します。

```

2705 \newcommand{\listoftables}{%
2706   %<*book|report>
2707   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
2708   \else\@restonecolfalse\fi
2709   \chapter*{\listtablename}%
2710   \@mkboth{\listtablename}{}%
2711   %</book|report>
2712   %<*&!book&!report>
2713   \section*{\listtablename}%
2714   \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
2715   %</!book&!report>

```



```

2716 \starttoc{lot}%
2717 %<book|report> \if@restonecol\twocolumn\fi
2718 }

```

`\l@table` 表目次は図目次と同じです。

```

2719 \let\l@table\l@figure

```

10.2 参考文献

`\bibindent` オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

```

2720 \newdimen\bibindent
2721 \setlength\bibindent{2\jsZw}

```

`thebibliography` 参考文献リストを出力します。

[2016-07-16] L^AT_EX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を、文献スタイル (.bst) ではよく `\bf` がいまだに用いられることが多いため、`thebibliography` 環境内では例外的に出さないようにしました。

```

2722 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
2723   \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
2724   \global\let\presectionname\relax
2725   \global\let\postsectionname\relax
2726   %<article|slide> \section*{\refname}\mkboth{\refname}{\refname}%
2727   %<*kiyou>
2728   \vspace{1.5\baselineskip}
2729   \subsubsection*{\refname}\mkboth{\refname}{\refname}%
2730   \vspace{0.5\baselineskip}
2731   %</kiyou>
2732   %<book|report> \chapter*{\bibname}\mkboth{\bibname}{}%
2733   %<book|report> \addcontentsline{toc}{chapter}{\bibname}%
2734   \list{\@biblabel{\@arabic{c@enumiv}}}%
2735     {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
2736      \leftmargin\labelwidth
2737      \advance\leftmargin\labelsep
2738      \@openbib@code
2739      \usecounter{enumiv}%
2740      \let\p@enumiv\empty
2741      \renewcommand\theenumiv{\@arabic{c@enumiv}}}%
2742   %<kiyou> \small
2743   \sloppy
2744   \clubpenalty4000
2745   \@clubpenalty\clubpenalty
2746   \widowpenalty4000%
2747   \sfcode`\.\@m}
2748   {\def\@noitemerr
2749     {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}}%
2750   \endlist}

```

`\newblock` `\newblock` はデフォルトでは小さなスペースを生成します。

```
2751 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
```

`\@openbib@code` `\@openbib@code` はデフォルトでは何もしません。この定義は `openbib` オプションによって変更されます。

```
2752 \let\@openbib@code\@empty
```

`\@biblabel` `\bibitem[...]` のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 `[]` を全角 `[]` に変え、余分なスペースが入らないように `\jsInhibitGlue` ではさみました。とりあえずコメントアウトしておきますので、必要に応じて生かしてください。

```
2753 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}
```

`\cite` 文献の番号を出力する部分は ltbib1.dtx で定義されていますが、コンマとカッコを和文
`\@cite` フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので、必要
`\@citex` に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを `\jsInhibitGlue` で取っていますので、オリジナル同様、Knuth-`\cite{knu}` のように半角空白で囲んでください。

```
2754 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
2755 %   \let\@citea\@empty
2756 %   \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
2757 %     {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
2758 %     \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
2759 %     \if@filesw\immediate\write\@auxout{\string\citation{\@citeb}}\fi
2760 %     \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
2761 %       \G@refundefinedtrue
2762 %       \@latex@warning
2763 %         {Citation `'\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
2764 %       {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}{#1}}
2765 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1}\if@tempswa , #2\fi]} \jsInhibitGlue
```

引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。`\cite` の先頭に
`\unskip` を付けて先行のスペース (~ も) を帳消しにしています。

```
2766 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
2767 %   \@ifnextchar [{\@tempwattrue\@citex}{\@tempwafalse\@citex[]}]
2768 % \def\@cite#1#2{${\hbox{\scriptsize{#1}\if@tempswa
2769 %   , \jsInhibitGlue\ #2\fi}}}$}
```

10.3 索引

`theindex` 2~3 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのとときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
2770 \newenvironment{theindex}{% 索引を 3 段組で出力する環境
2771   \if@twocolumn
2772     \onecolumn\@restonecolfalse
2773   \else
2774     \clearpage\@restonecoltrue
2775   \fi
```

```

2776 \columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw
2777 \ifx\multicols\@undefined
2778 %<book|report> \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
2779 %<book|report> \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]]%
2780 %<!book&!report> \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2781 %<!book&!report> \twocolumn[\section*{\indexname}]]%
2782 \else
2783 \ifdim\textwidth<\fullwidth
2784 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
2785 \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
2786 \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
2787 %<book|report> \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
2788 %<book|report> \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]]%
2789 %<!book&!report> \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2790 %<!book&!report> \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]]%
2791 \else
2792 %<book|report> \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
2793 %<book|report> \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]]%
2794 %<!book&!report> \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2795 %<!book&!report> \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]]%
2796 \fi
2797 \fi
2798 %<book|report> \mkboth{\indexname}{}%
2799 %<!book&!report> \mkboth{\indexname}{\indexname}%
2800 \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
2801 \parindent\z@
2802 \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
2803 \let\item\@idxitem
2804 \raggedright
2805 \footnotesize\narrowbaselines
2806 }{
2807 \ifx\multicols\@undefined
2808 \if@restonecol\onecolumn\fi
2809 \else
2810 \end{multicols}
2811 \fi
2812 \clearpage
2813 }

```

`\@idxitem` 索引項目の字下げ幅です。`\@idxitem` は `\item` の項目の字下げ幅です。

```

\subitem 2814 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt
\subsubitem 2815 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\jsZw}} % 元 20pt
2816 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % 元 30pt

```

`\indexspace` 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。

```

2817 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@? \@plus5\p@? \@minus3\p@?\relax}

```

`\seename` 索引の `\see`, `\seealso` コマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ *see*, *see also*

`\alsoname` という英語ですが, ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒ (\rightarrow)

などでもいいでしょう。

```
2818 \newcommand\seename{\if@english see\else →\fi}  
2819 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else →\fi}
```

10.4 脚注

`\footnote` 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため、`\inhibitglue` を入れることにします。p_{La}T_EX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

パッチの必要性は「`\pltx@foot@penalty` が未定義か」で行う。`\inhibitglue` の代わりに `\jsInhibitGlue` を使う。

```
2820 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined  
2821   \let\footnotes@ve=\footnote  
2822   \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}  
2823   \let\footnotemarks@ve=\footnotemark  
2824   \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}  
2825 \fi
```

`\@makefnmark` 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 * を付けています。「注 1」の形式にするには `\textasteriskcentered` を `注\kern0.1em` にしてください。`\@xfootnotenext` と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい p_TE_X では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] `plcore.ltx` に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 p_{La}T_EX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。p_{La}T_EX の日付が 2016/04/17 より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

p_TE_X 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

`\thefootnote` 脚注番号に * 印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは * 印も脚注番号も付きません。

[2003-08-15] `\textasteriskcentered` ではフォントによって下がりすぎるので変更しました。

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が `newtxtext` や `newpxtext` の使用時におかしくなっています。これらのパッケージは内部で `\thefootnote` を再定義していますので、気になる場合はパッケージを読み込むときに `defaultsups` オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287)。

```
2826 \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@\leavevmode\lower.5ex\hbox{*}\@arabic\c@footnote\fi}
```

「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

```
2827 % \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}
```

`\footnoterule` 本文と脚注の間の罫線です。

```
2828 \renewcommand{\footnoterule}{%
2829   \kern-2.6\p@? \kern-.4\p@
2830   \hrule width .4\columnwidth
2831   \kern 2.6\p@?}
```

`\c@footnote` 脚注番号は章ごとにリセットされます。

```
2832 %<book|report>\@addtoreset{footnote}{chapter}
```

`\@footnotetext` 脚注で `\verb` が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, *T_EX and TUG NEWS*, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

[2016-08-25] コミュニティ版 p_IA_TE_X の「閉じ括弧類の直後に `\footnotetext` が続く場合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 p_IA_TE_X のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い p_IA_TE_X で使用された場合を考慮してコードを改良。

```
2833 \long\def\@footnotetext{%
2834   \insert\footins\bgroup
2835   \normalfont\footnotesize
2836   \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
2837   \splittopskip\footnotesep
2838   \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
2839   \hsize\columnwidth \@parboxrestore
2840   \protected@edef\@currentlabel{%
2841     \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
2842   }%
2843   \color@begingroup
2844     \@makefnmark{%
2845       \rule{\z@\footnotesep}{\ignorespaces}%
2846       \futurelet\next\fo@t}
2847 \def\fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\next \let\next\fo@@
2848                                     \else \let\next\fo@t\fi \next}
2849 \def\fo@@{\bgroup\aftergroup\@foot\let\next}
2850 \def\fo@t#1{#1\@foot}
2851 \def\@foot{\@finalstrut\strutbox\color@endgroup\egroup
2852   \ifx\pltx@foot@penalty\undefined\else
2853     \ifhmode\null\fi
2854     \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
2855       \penalty\pltx@foot@penalty
2856       \pltx@foot@penalty\z@
2857     \fi
2858   \fi}
```

`\@makefnmark` 実際に脚注を出力する命令です。`\@makefnmark` は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```

2859 \newcommand\@makefntext[1]{%
2860   \advance\leftskip 3\jsZw
2861   \parindent 1\jsZw
2862   \noindent
2863   \llap{\@makefnmark\hskip0.3\jsZw}#1}

```

`\@xfootnotenext` 最初の `\footnotetext{...}` は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くときに便利です。

すでに `\footnote` を使った後なら `\footnotetext[0]{...}` とすれば番号を付けない脚注になります。ただし、この場合は脚注番号がリセットされてしまうので、工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```

2864 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
2865 %   \begingroup
2866 %     \ifnum#1>\z@
2867 %       \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
2868 %       \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
2869 %     \else
2870 %       \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
2871 %     \fi
2872 %   \endgroup
2873 %   \@footnotetext}

```

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎっこなどを見かけ 1 字半下げから全角 1 字下げに直します。

`\jsInhibitGlueAtParTop` 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を `\jsInhibitGlueAtParTop` という命令にして、これを再定義可能にした。

```

2874 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

```

`\everyparhook` 全ての段落の冒頭で実行されるフック。この初期値を先述の `\jsInhibitGlueAtParTop` とする。

```

2875 \def\everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}
2876 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
2877 \AtBeginDocument{\everypar{\everyparhook}}
2878 \fi

```

[2016-07-18] `\inhibitglue` の発行対象を `\inhibitxspcode` が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で `\@tempa` を使っていたのがよくなかったので、プレフィックスを付けて `\jsc@tempa` にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] `\jsc@tempa` は実はテンポラリーではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 `\jsc@ig@temp` に置き換えました (Issue #54)。

次の `\@inhibitglue` は JS クラスでの `\jsInhibitGlueAtParTop` の実装である。エンジンが (u)pllatex の場合はこれを採用する。

```
2879 \ifx j\jsEngine
2880 \def\@inhibitglue{%
2881   \futurelet\@let@token\@inhibitglue}
2882 \begingroup
2883 \let\GDEF=\gdef
2884 \let\CATCODE=\catcode
2885 \let\ENDGROUP=\endgroup
2886 \CATCODE`k=12
2887 \CATCODE`a=12
2888 \CATCODE`n=12
2889 \CATCODE`j=12
2890 \CATCODE`i=12
2891 \CATCODE`c=12
2892 \CATCODE`h=12
2893 \CATCODE`r=12
2894 \CATCODE`t=12
2895 \CATCODE`e=12
2896 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
2897 \ENDGROUP
2898 \def\@inhibitglue{%
2899   \expandafter\expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@token
2900   \expandafter\def\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter#\expandafter1\KANJI@CHARACTER#2#3\jsc@
2901   \def\jsc@ig@temp{#1}%
2902   \ifx\jsc@ig@temp\empty
2903     \ifnum\the\inhibitxspcode`#2=2\relax
2904       \inhibitglue
2905     \fi
2906   \fi}
2907 \fi
```

ここからしばらく「(本物の) `\everypar` に追加した `\everyparhook` を保持する」ためのパッチ処理が続く。これは、`everyparhook=compat` の場合にのみ実行する。

```
2908 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
```

これだけではいけないようです。あちこちに `\everypar` を初期化するコマンドが隠されていました。

まず、環境の直後の段落です。

[2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に従って `\clubpenalty` のリセットを追加しました。

```
2909 \def\@doendpe{%
2910   \@endpetrue
2911   \def\par{%
2912     \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar{\everyparhook}\par\@endpefalse}%
2913   \everypar{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\@endpefalse\everyparhook}}
```

[2017-08-31] minipage 環境にも対策します。

```
2914 \def\@setminipage{%
2915   \@minipagetrue
2916   \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
2917 }
```

`\item` 命令の直後です。

```
2918 \def\@item[#1]{%
2919   \if@noperitem
2920     \@donoperitem
2921   \else
2922     \if@inlabel
2923       \indent \par
2924     \fi
2925     \ifhmode
2926       \unskip\unskip \par
2927     \fi
2928     \if@newlist
2929       \if@nobreak
2930         \@nbitem
2931       \else
2932         \addpenalty\@beginparpenalty
2933         \addvspace\@topsep
2934         \addvspace{-\parskip}%
2935       \fi
2936     \else
2937       \addpenalty\@itempenalty
2938       \addvspace\itemsep
2939     \fi
2940     \global\@inlabeltrue
2941   \fi
2942   \everypar{%
2943     \@minipagefalse
2944     \global\@newlistfalse
2945     \if@inlabel
2946       \global\@inlabelfalse
2947     {\setbox\z@\lastbox
2948     \ifvoid\z@
2949       \kern-\itemindent
2950     \fi}%
```



```

2951     \box\@labels
2952     \penalty\z@
2953     \fi
2954     \if@nobreak
2955         \@nobreakfalse
2956         \clubpenalty \@M
2957     \else
2958         \clubpenalty \@clubpenalty
2959         \everypar{\everyparhook}%
2960     \fi
2961     \everyparhook}%
2962 \if@noitemarg
2963     \@noitemargfalse
2964     \if@nmbrlist
2965         \refstepcounter\@listctr
2966     \fi
2967 \fi
2968 \sbox\@tempboxa{\makelabel{#1}}%
2969 \global\setbox\@labels\hbox{%
2970     \unhbox\@labels
2971     \hskip \itemindent
2972     \hskip -\labelwidth
2973     \hskip -\labelsep
2974     \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
2975         \box\@tempboxa
2976     \else
2977         \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
2978     \fi
2979     \hskip \labelsep}%
2980 \ignorespaces}

```

二つ挿入した `\everyparhook` のうち後者が `\section` 類の直後に 2 回、前者が 3 回目以降に実行されます。

```

2981 \def\@afterheading{%
2982     \@nobreaktrue
2983     \everypar{%
2984         \if@nobreak
2985             \@nobreakfalse
2986             \clubpenalty \@M
2987         \if@afterindent \else
2988             {\setbox\z@\lastbox}%
2989         \fi
2990     \else
2991         \clubpenalty \@clubpenalty
2992         \everypar{\everyparhook}%
2993     \fi\everyparhook}}

```

「`\everyparhook` 用のパッチ処理」はここまで。

2994 \fi

`\@gnewline` についてはちょっと複雑な心境です。もともとの p \LaTeX 2_ε は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし `\` の直後にはグルーが入らず、不統一でした。そこで `\` の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし、ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので、また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※ `luatexja` を読みこんだ場合に `lltjcore.sty` によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
2995 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none\else
2996 \AtEndOfPackage{%
2997 \def\@gnewline #1{%
2998   \ifvmode
2999     \@nolnerr
3000   \else
3001     \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3002     \jsInhibitGlue \ignorespaces
3003   \fi}
3004 }
3005 \fi
```

12 いろいろなロゴ

\LaTeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は `jslogo` パッケージに移転しました。後方互換のため、`jsclasses` ではデフォルトでこれを読み込みます。`nojslogo` オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも `jslogo` オプション指定の場合に `jslogo` パッケージを読み込むようにした。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※`\小`、`\上小` の制御綴は定義しない。

```
3006 \if@jslogo
3007   \IfFileExists{jslogo.sty}{%
3008     \RequirePackage{jslogo}%
3009   }{%
3010     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3011       {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
3012        It is included in the recent release of\MessageBreak
3013        the 'jsclasses' bundle}
3014   }
```

13 amsmath との衝突の回避

\ltx@ifnextchar amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが、これが L^AT_EX の \ProvidesFile で悪さをする例が F_TE_X で報告されています。これを避けるための tDB さんのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

この現象については私の TeX 掲示板 4273～, 16058～ で議論がありました。なお, AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぱ愛好家さん)。

[2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウトしました。

```

3016 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3017 %\def\ProvidesFile#1{%
3018 %  \begingroup
3019 %    \catcode\ 10 %
3020 %    \ifnum \endlinechar<256 %
3021 %        \ifnum \endlinechar>\m@ne
3022 %            \catcode\endlinechar 10 %
3023 %        \fi
3024 %    \fi
3025 %    \@makeother\/%
3026 %    \@makeother\&%
3027 %    \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}]

```

14 初期設定

■いろいろな語

```

\prepartname
\postpartname 3028 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername 3029 \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
3030 %<book|report>\newcommand{\prechaptername}{\if@english Chapter~\else 第\fi}
\postchaptername 3031 %<book|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
\presectionname 3032 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname 3033 \newcommand{\postsectionname}{}% 節

\contentsname

\listfigurename 3034 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
\listtablename 3035 \newcommand{\listfigurename}{\if@english List of Figures\else 図目次\fi}
3036 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}

\refname
\bibname 3037 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
\indexname 3038 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}

```

```

3039 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}

\figurename
\tablename 3040 %<!jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi}
3041 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~}
3042 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
3043 %<jspf>\newcommand{\tablename}{Table~}

\appendixname
\abstractname 3044 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
3045 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
3046 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}

```

■今日の日付 \LaTeX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには `\和暦` と書いてください。

環境変数 `SOURCE_DATE_EPOCH` / `FORCE_SOURCE_DATE` が設定されている場合は“今日”が過去・未来の日付になる可能性がある。その場合、和暦表記は 1970 年から平成の終わりまでの期間でのみサポートする。
 ※新元号が公表されたら対応する。

```

3047 \@tempwafalse
3048 \if p\jsEngine \@tempwattrue \fi
3049 \if n\jsEngine \@tempwattrue \fi
3050 \if@tempswa \expandafter\@firstoftwo
3051 \else \expandafter\@secondoftwo
3052 \fi
3053 {%
3054 % 欧文 8bitTeX の場合
3055 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
3056 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
3057   \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
3058   \def\和暦{\jsSeirekifalse}}
3059 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
3060 \def\Wareki{\jsSeirekifalse}
3061 \def\bxjs@if@use@seireki{%
3062   \ifjsSeireki \expandafter\@firstoftwo
3063   \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
3064 }{%
3065 \newif\if 西暦 \西暦 true
3066 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
3067   \def\西暦{\西暦 true}%
3068   \def\和暦{\西暦 false}}
3069 \def\Seireki{\西暦 true}
3070 \def\Wareki{\西暦 false}
3071 \def\bxjs@if@use@seireki{%
3072   \if 西暦 \expandafter\@firstoftwo

```

```

3073 \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
3074 }
3075 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3076 \let\bxjs@unxp\@firstofone \let\bxjs@onxp\@firstofone
3077 \bxjs@test@engine\unexpanded{\let\bxjs@unxp\unexpanded
3078 \def\bxjs@onxp{\unexpanded\expandafter}}
3079 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
3080 \def\bxjs@iai{\noexpand~}
3081 \else \def\bxjs@iai{}
3082 \fi

```

\jyear 和暦における年の表記（元号 + 年数）。

\heisei 年数を表す整数レジスタで、元号が「平成」である場合にのみ定義される。

※一般の年数の整数レジスタは \bxjs@jyear で、\heisei はこれの別名になる。

```

3083 \newcount\bxjs@jyear
3084 \let\bxjs@gengo\@empty \bxjs@jyear\year
3085 \@tempcnta=\the\year\two@digits\month\two@digits\day\relax
3086 \ifnum\@tempcnta<19700101
3087 \else\ifnum\@tempcnta<19890108
3088 \def\bxjs@gengo{昭和}\advance\bxjs@jyear-1925\relax
3089 \let\heisei\bxjs@jyear
3090 \else\ifnum\@tempcnta<20190501
3091 \def\bxjs@gengo{平成}\advance\bxjs@jyear-1988\relax
3092 \let\heisei\bxjs@jyear
3093 \else
3094 % 新元号対応
3095 % \def\bxjs@gengo{新元号}\advance\bxjs@jyear-2018\relax
3096 \fi\fi\fi
3097 \edef\jyear{%
3098 \ifx\bxjs@gengo\@empty \the\bxjs@jyear\bxjs@iai
3099 \else \bxjs@onxp{\bxjs@gengo}%
3100 \ifnum\bxjs@jyear=\@ne \bxjs@unxp{元}%
3101 \else \bxjs@iai\the\bxjs@jyear\bxjs@iai
3102 \fi
3103 \fi}

```

\today 英語、西暦、和暦で場合分けをする。

```

3104 \edef\bxjs@today{%
3105 \if@english
3106 \ifcase\month\or
3107 January\or February\or March\or April\or May\or June\or
3108 July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
3109 \space\number\day, \number\year
3110 \else
3111 \noexpand\bxjs@if@use@seireki{%
3112 \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
3113 \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
3114 \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{日}%

```

```

3115 }{%
3116 \bxjs@onxp{\jayear}\bxjs@unxp{年}%
3117 \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
3118 \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{日}%
3119 }%
3120 \fi}
3121 \let\today\bxjs@today

```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル (japanese.ldf) が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```

3122 \AtBeginDocument{%
3123 \ifx\bbj@jpn@Seirekitrue\@undefined\else
3124 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3125 \g@addto@macro\datejapanese{%
3126 \let\today\bxjs@today}%
3127 \fi}

```

■ハイフネーション例外 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のハイフネーションルールの補足です (ペンディング: eng-lish)

```

3128 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-
script}

```

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```

3129 %<slide>\pagestyle{empty}%
3130 %<article|report>\pagestyle{plain}%
3131 %<book>\pagestyle{headings}%
3132 \pagenumbering{arabic}
3133 \if@twocolumn
3134 \twocolumn
3135 \sloppy
3136 \flushbottom
3137 \else
3138 \onecolumn
3139 \raggedbottom
3140 \fi
3141 %<slide>
3142 \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
3143 \raggedright
3144 %</slide>

```

■BXJS 独自の追加処理 

和文ドライバのファイルを読み込む。

```

3145 \catcode`\?=12
3146 \ifx\bxjs@jadriver\relax\else

```

```
3147 \input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}
```

```
3148 \fi
```

最後に日本語文字のカテゴリコードを元に戻す。

```
3149 \bxjs@restore@jltrcc
```

```
3150 %</cls>
```

以上です。

付録 A 和文ドライバの仕様

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、★印を付けたものは“書込”が許されるものである。

- `\jsDocClass` [文字トークンの `let`] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致する (`\if` で判定可能)。
 - `\jsArticle` `bxjsarticle` クラス
 - `\jsBook` `bxjsbook` クラス
 - `\jsReport` `bxjsreport` クラス
 - `\jsSlide` `bxjsslide` クラス
- `\jsEngine` [文字トークンの `let`] 使用されているエンジンの種別。 (`\if` で判定可能)。
 - `p` `pdfTeX` (DVI モードも含む)
 - `l` `LuaTeX` (＃)
 - `x` `XYTeX`
 - `j` `pTeX` または `upTeX`
 - `n` 以上の何れでもない
- `\ifjsWithupTeX` [スイッチ] 使用されているエンジンが `upTeX` であるか。
- `\ifjsWitheTeX` [スイッチ] 使用されているエンジンが ϵ -`TeX` 拡張であるか。
- `\ifjsInPdfMode` [スイッチ] 使用されているエンジンが (`pdfTeX`・`LuaTeX` の) PDF モードであるか。
- `\jsUnusualPtSize` [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、11pt、12pt のいずれでもない場合の `\@ptsize` の値。 (`\@ptsize` 自体があまり有用でないと思われる。)
- `\jsScale` [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対するスケール。クラスオプション `scale` で指定される。(既定値は 0.924715。)
- `\jsJaFont` [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション `jafont` で指定された値。
- `\jsJaParam` [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まっておらず、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション `japaram` で指定された値。
- `\jsInhibitGlue` [マクロ] `\inhibitglue` という命令が定義されていればそれを実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで `\inhibitglue` を用いている箇所は全て `\jsInhibitGlue` に置き換えられている。従って、`\inhibitglue` は未定義でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- `\jsInhibitGlueAtParTop` [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- `\jsZw` [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで `zw` 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に `\jsScale` × (フォントサイズ) であると定められている (フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に `\jsScale` の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- `\jsFontSizeChanged` [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- `\jsResetDimen` [マクロ] ★ 上記 `\jsFontSizeChanged` の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

```
3151 %<*drv>
```

付録 B 和文ドライバ : minimal

`jadriver` の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、`standard` ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ (xeCJK や Lua_T_EX-ja 等) を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、(u)p_T_EX エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

B.1 補助マクロ

```
3152 %<*minimal>
```

```
3153 %% このファイルは日本語文字を含みます
```

```
\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand.
```

```
3154 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%
```

```
3155   \DeclareRobustCommand#1[1]{%
```

```
3156     \relax
```

```
3157     \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi
```

```
3158     {#2##1}}%
```

```
3159 }
```

```
\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。
```

```
3160 \def\DeclareJaMathFontCommand#1#2{%
```

```
3161   \DeclareRobustCommand#1[1]{%
```

```
3162     \relax
```

```
3163     \ifmmode\else \non@alpherr{#1\space}\fi
```

```
3164     \nfss@text{\fontfamily\familydefault
```

```
3165         \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax
```

```
3166         #2##1}}%
```

```

3167 }%
3168 }

```

`\bxjs@if@sf@default` `\familydefault` の定義が “`\sfdefault`” である場合に引数のコードを実行する。

```

3169 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
3170 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
3171 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
3172   \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
3173   \AtBeginDocument{%
3174     \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
3175 }

```

`\jsInverseScale` `\jsScale` の逆数。

※`\CS=\jsInverseScale\CS` は `\bxjs@invscale\CS\jsScale` よりも精度が劣るが処理が軽い。

```

3176 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
3177 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}

```

`\jsLetHeadChar` `\jsLetHeadChar\CS{〈トークン列〉}` : トークン列の先頭の文字を抽出し、`\CS` をその文字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。

※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は `\CS` は `\relax` に等置される。

※文字トークンは “`\the-文字列`” のカテゴリコードをもつ。

※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位バイトの場合は 1 文字分のバイト列 (のトークン列) を抽出する。この場合は元のカテゴリコードが保持される。

```

3178 \def\jsLetHeadChar#1#2{%
3179   \begingroup
3180     \escapechar=`\ %
3181     \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
3182       \bxjs@let@hchar@exp#2}%
3183   \endgroup
3184   \let#1\bxjs@g@tmpa}
3185 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
3186   \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
3187 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
3188   \bxjs@cond@ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi% 波括弧
3189   \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3190   }{\bxjs@cond@ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi% 空白
3191   \bxjs@let@hchar@out\let\space%
3192   }{\bxjs@cond@if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi% バックスラッシュ
3193   \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
3194   }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}%
3195 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
3196   \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
3197 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
3198   %\message{<#1#2>}%
3199   \bxjs@cond@if#1\@backslashchar\fi% 制御綴

```

```

3200 \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3201 \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3202 }{%else
3203 \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3204 }%
3205 }{%else
3206 \bxjs@let@hchar@chr#1%
3207 }}
3208 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
3209 \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
3210 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
3211 \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
3212 \toks@\bgroup}% skip to right brace

```

UTF-8 のバイト列を扱うコード。

```

3213 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3214 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3215 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3216 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3217 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3218 \let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr
3219 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
3220 \@tempcnta=`#1\relax
3221 %\message{\the\@tempcnta}%
3222 \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
3223 \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3224 }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3225 \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3226 }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3227 \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
3228 }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3229 \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3230 }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
3231 \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3232 }{%else
3233 \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3234 }}}}
3235 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
3236 \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
3237 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
3238 \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}}
3239 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%
3240 \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}}
3241 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%
3242 \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3#4}}}}

```

B.2 (u)pTeX 用の設定

```
3243 \ifx j\jsEngine
```

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラスで除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ `\jsLetHeadChar` を和文文字トークンに対応させる。

```
3244 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1{%
3245   \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#1\relax#1}
3246 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3{%
3247   \message{(#1)}%
3248   \bxjs@cond\if#1t\fi{%
3249     \bxjs@let@hchar@chr@ue#3%
3250   }{%else
3251     \bxjs@let@hchar@out\def{#3}}%
3252   }}
3253 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン (pTeX か upTeX か) に依存する定義を行う。`\ifjsWithupTeX` は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upTeX であるかを表す。

`\jsc@JYn` および `\jsc@JTn` は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3254 \edef\jsc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi}
3255 \edef\jsc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi}
3256 \edef\jsc@pfx{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

`\bxjs@declarefontshape` は標準の和文フォント宣言である。後で `\bxjs@scale` を求めるため一旦マクロにしておく。`\bxjs@sizereference` は全角幅を測定する時に参照するフォント。

まず upTeX の場合の定義を示す。JS クラスの `uplatex` オプション指定時の定義と同じである。

```
3257 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3258 \ifjsWithupTeX
3259 \def\bxjs@declarefontshape{%
3260   \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3261   \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3262   \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3263   \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-v}{}%
3264 }
3265 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

pTeX の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。

```
3266 \else
3267 \def\bxjs@declarefontshape{%
3268   \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%
3269   \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jisg}{}%
3270   \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tmin10}{}%

```

```

3271 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tgoth10}{}%
3272 }
3273 \def\bxjs@sizereference{jis}
3274 \fi

```

既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。

```

3275 \def\bxjs@tmpa#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3276   \def\bxjs@y{#5}}
3277 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@y{10}%
3278 \else
3279 \expandafter\expandafter\expandafter\bxjs@tmpa
3280 \expandafter\string\the\jfont\relax
3281 \fi
3282 \@for\bxjs@x:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
3283               \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
3284   {\expandafter\let\csname\bxjs@x/10\endcsname=\@undefined
3285    \expandafter\let\csname\bxjs@x/\bxjs@y\endcsname=\@undefined}

```

■和文フォントスケールの補正 実は、pTeX の標準的な和文フォント（JFM のこと、例えば jis）では、指定された `\jsScale`（この値を s とする）をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール（この値を f とする；jis では 0.962216 倍）が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ `\bxjs@scale` に保存する。

```

3286 \begingroup
3287 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
3288 \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
3289 \setbox\z@\hbox{\bxjs@tmpa\char\jis"2121\relax}
3290 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3291 \ifdim\wd\z@=10pt
3292   \global\let\bxjs@scale\jsScale
3293 \else
3294 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
3295   \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3296   \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
3297   \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3298   \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3299 \fi
3300 \endgroup
3301 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}

```

■和文フォント関連定義 `\bxjs@scale` が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```

3302 \bxjs@declarefontshape

```

フォント代替の明示的定義。

```

3303 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{%
3304 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{%
3305 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{%

```

```

3306 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3307 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3308 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3309 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3310 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{f}
3311 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{f}
3312 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{f}
3313 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3314 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3315 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{f}
3316 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{f}

```

欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント関係の定義を行う。

```

3317 \DeclareRobustCommand\rmfamily
3318 {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3319 \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3320 \DeclareRobustCommand\sffamily
3321 {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3322 \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3323 \DeclareRobustCommand\ttfamily
3324 {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3325 \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3326 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
3327 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3328 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3329 \fi
3330 \bxjs@if@sf@default{%
3331 \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}

```

念のため。

```

3332 \selectfont

```

■パラメタの設定

```

3333 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3334 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3335 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3336 \inhibitxspcode`!=1
3337 \inhibitxspcode`〒=2
3338 \xspcode`+=3
3339 \xspcode`%=3

```

"80～"FF の範囲の \xspcode を 3 に変更。

```

3340 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{%
3341 \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}

```

\jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。

```

3342 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue

```

\jsResetDimen は空のままでよい。

■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン (`\if?dir`) は pTeX 以外では未定義であるため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に `!` をエスケープ文字に使う。

```
3343 \begingroup
3344 \catcode`\!=0
```

`\bxjs@ptex@dir` 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。

```
3345 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
3346   !iftdir t%
3347   !else!ifydir y%
3348   !else ?%
3349   !fi!fi}
```

新版の pTeX で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。

※現在の pLaTeX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、`\@makefnmark` の定義が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。

```
3350 % 古い \@makefnmark の定義
3351 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%
3352   !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
3353   !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
3354 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa
3355 \long\gdef\@makefnmark{%
3356   !ifydir \hbox{}\hbox{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\hbox{}%
3357   !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
3358 \fi
3359 \endgroup
```

B.3 pdfTeX 用の処理

```
3360 \else\ifx p\jsEngine
3361 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3362 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
3363 \def\bxjs@cjk@loaded{%
3364   \def\@footnotemark{%
3365     \leavevmode
3366     \ifhmode
3367       \edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
3368       \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
3369         \unkern\unkern
3370         \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
3371       \fi\fi
3372       \nobreak
3373     \fi
3374     \@makefnmark
3375     \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
3376     \relax}%
```

```

3377 \let\bxjs@CJK@loaded\relax
3378 }
3379 \AtBeginDocument{%
3380 \ifpackageloaded{CJK}{%
3381 \bxjs@CJK@loaded
3382 }{}%
3383 }

```

B.4 Xe_{La}TeX 用の処理

```

3384 \else\ifx x\jsEngine

```

\bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。

```

3385 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
3386 \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
3387 \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
3388 \bxjs@let@hchar@chr@xe
3389 }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
3390 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
3391 \lccode`0=`#1\relax
3392 \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}

```

\bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。

```

3393 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\@undefined\else
3394 \def\bxjs@do@precisetext{%
3395 \XeTeXgenerateactualtext=\@one}
3396 \fi

```

\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。

```

3397 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
3398 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
3399 \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
3400 \else\ifnum\strcmp{\the\XeTeXlinebreakskip}{\the\z@}=\z@
3401 \jsSimpleJaSetup
3402 \ClassInfo\bxjs@clsname
3403 {\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
3404 \fi\fi}

```

\jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。

```

3405 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
3406 \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
3407 \XeTeXlinebreakskip=0pt plus 1pt minus 0.1pt\relax
3408 \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}

```

B.5 後処理（エンジン共通）

```

3409 \fi\fi\fi

```

simplejasetup オプションの処理。


```

3410 \ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else
3411   \AtBeginDocument{%
3412     \ifbxjs@simplejasetup
3413       \bxjs@do@simplejasetup
3414     \fi}
3415 \fi

precisetext オプションの処理。
3416 \ifbxjs@precisetext
3417   \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
3418     \ClassWarning\bxjs@clsname
3419       {The current engine does not support the\MessageBreak
3420         'precisetext' option\@gobble}
3421   \else
3422     \bxjs@do@precisetext
3423   \fi
3424 \fi

```

■段落頭でのグルー挿入禁止

`\bxjs@check@everyparhook` 本体開始時において `\everyparhook` を検査して、“結局何もしない” ことになっている場合は、副作用を完全に無くするために `\everyparhook` を空にする。

```

3425 \@onlypreamble\bxjs@check@everyparhook
3426 \def\bxjs@check@everyparhook{%
3427   \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
3428     \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
3429     \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
3430       \let\everyparhook\@empty
3431     \fi
3432   \fi}
3433 \AtBeginDocument{\bxjs@check@everyparhook}

```

`everyparhook=modern` の場合の、`\everyparhook` の有効化の実装。

※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。

```

3434 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@modern

```

まず `\everypar` を“乗っ取る” 処理を行う。

```

3435 \let\bxjs@everypar\everypar
3436 \newtoks\everypar
3437 \everypar\bxjs@everypar

```

そして本物の `\everypar` では、最後で常に `\everyparhook` が実行されるようにする。

```

3438 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}%
3439 \fi

```

■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が `true` であり、かつ `fancyhdr` が使用された場合に以下の対策を行う。

- デフォルトの書式設定に含まれる“二文字フォント命令”を除去する。
- `bxjsbook` において、ヘッダ・フッタの横幅を `\fullwidth` に変える。

3440 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3441 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3442 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、“二文字フォント命令”を除去したものに置き換える。

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

3443 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}%

3444 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%

3445 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi

3446 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi

3447 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi

3448 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi

3449 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}%

3450 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}%

3451 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi

3452 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi

3453 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi

3454 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi

3455 \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%

3456 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%

3457 \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi

3458 \ifx\f@ncyocf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyocf\bxjs@tmpb \fi

\fullwidth が（定義済で）\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。

3459 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth

3460 \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}%

3461 \edef\bxjs@tmpa{\noexpand\fancyhfoffset[EL,OR]{\the\@tempdima}%

3462 }\bxjs@tmpa

3463 \fi\fi

3464 \PackageInfo\bxjs@clsname

3465 {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}

\bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。

3466 \def\bxjs@pagestyle@hook{%

3467 \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%

3468 \bxjs@adjust@fancyhdr

3469 \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax

3470 }{}}

\pagestyle にフックを入れ込む。

3471 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle

3472 \def\pagestyle{%

3473 \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}

begin-document フック。

※これ以降に `fancyhdr` が読み込まれることはあり得ない。

```
3474 \AtBeginDocument{%  
3475   \bxjs@pagestyle@hook  
3476   \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
```

■和文空白命令

```
3477 \ifbxjs@jaspace@cmd
```

`\jaenspace` 半角幅の水平空き。

```
3478   \def\jaenspace{\hskip.5\jsZw\relax}
```

`\jathinspace` 和欧文間空白を入れるユーザ命令。

※ `minimal` ではダミー定義。

```
3479   \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
```

`_` 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。 `\zwspace` と等価になる。

```
3480   \def\_ {\zwspace}
```

`\jaspace` `jlreq` クラスと互換の命令。

```
3481   \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%  
3482     \expandafter\ifx\csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax  
3483     \ClassError\bxjs@clsname  
3484     {Unknown jaspacespace: #1}{\@eha}%  
3485     \else  
3486     \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname  
3487     \fi}  
3488   \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}  
3489   \def\bxjs@jaspace@@nibu{\hskip .5\jsZw\relax}  
3490   \def\bxjs@jaspace@@shibu{\hskip .25\jsZw\relax}  
  
3491 \fi
```

終わり。

```
3492 \fi
```

以上で終わり。

```
3493 %</minimal>
```

付録 C 和文ドライバ : standard

標準のドライバ。

- `\rmfamily/\sffamily/\ttfamily` での和文ファミリ連動
- `\mcfamily/\gtfamily`
- `\textmc/\textgt`
- `\zw`

- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- \autoxspacing/\noautoxspacing

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの“プリセット”の指定として用いる。プリセットの値は、T_EX Live の kanji-config-updmap コマンドで使う“ファミリ”と同じにすることを想定する。特別な値として、auto は kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

C.1 共通処理 (1)

まず minimal ドライバを読み込む。

```
3494 %<*standard>
3495 %% このファイルは日本語文字を含みます
3496 \input{bxjsja-minimal.def}
```

simplejasetup は standard では無効になる。

```
3497 \bxjs@simplejasetupfalse
```

■japaram オプションの処理 japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\ifbxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

```
3498 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv
```

jis2004 オプションの処理。

```
3499 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue
3500 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse
3501 \define@key{bxjsStd}{jis2004}[true]{%
3502   \bxjs@set@keyval{jis2004}{#1}{}}
```

\ifbxjs@jp@units 和文用単位 (zw、zh、(true)Q、(true)H) を使えるようにするか。

```
3503 \newif\ifbxjs@jp@units
```

units オプションの処理。

```
3504 \let\bxjs@kv@units@true\bxjs@jp@unitstrue
3505 \let\bxjs@kv@units@false\bxjs@jp@unitsfalse
3506 \define@key{bxjsStd}{units}[true]{%
3507   \bxjs@set@keyval{units}{#1}{}}
```

\bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。

```
3508 \let\bxjs@jp@font\@empty
```

font オプションの処理。

```
3509 \define@key{bxjsStd}{font}{%
3510   \edef\bxjs@jp@font{#1}}
```

実際の japaram の値を適用する。

```
3511 \def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{#1}}
3512 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}
```

■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004 を追加する。

※ otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。

```
3513 \ifbxjs@jp@jismmiv
3514   \g@addto@macro\@classoptionslist{,jis2004}
3515 % \@ifpackagewith 判定への対策
3516   \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}
3517 \fi
```

■和文用単位のサポート units パラメタが有効の場合は、bxcalc パッケージを読みこんで、\usepTeXunits 命令を実行する。

```
3518 \ifbxjs@jp@units\if j\jsEngine\else
3519   \IfFileExists{bxcalc.sty}{%
3520     \RequirePackage{bxcalc}[2018/01/28]%v1.0a
3521     \ifx\usepTeXunits\@undefined
3522       \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
3523         {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
3524           the package 'bxcalc' is too old}%
3525     \else \usepTeXunits
3526     \fi
3527   }{%else
3528     \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
3529       {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
3530         the package 'bxcalc' is unavailable}%
3531   }
3532 \fi\fi
```

■共通命令の実装 \jQ 等の「単位」系の共通命令を実装する。まず ϵ -TeX 拡張が使えるか検査する。

```
3533 \ifjsWitheTeX
```

使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式（これは内部値なので単位として使える）で各命令定義する。

\jQ \jQ と \jH はともに 0.25 mm に等しい。

```
\jH 3534 \@tempdima=0.25mm
3535 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
3536 \let\jH\jQ
```

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

\trueH

```

3537 \ifjsc@mag
3538 \tempdimb=\jsBaseFontSize\relax
3539 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\tempdimb}%
3540 \tempdima=2.5mm
3541 \bxjs@invscale\tempdima\bxjs@tmpa
3542 \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\tempdima\relax}
3543 \tempdima=10pt
3544 \bxjs@invscale\tempdima\bxjs@tmpa
3545 \protected\edef\bxjs@truept{\dimexpr\the\tempdima\relax}
3546 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\pQ
3547 \fi
3548 \let\trueH\trueQ

```

\ascQ \ascQ は \trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH}
\ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

```

3549 \tempdima\trueQ \bxjs@invscale\tempdima\jsScale
3550 \protected\edef\ascQ{\dimexpr\the\tempdima\relax}
3551 \tempdima\bxjs@truept \bxjs@invscale\tempdima\jsScale
3552 \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\tempdima\relax}
3553 \fi

```

\jsSetQHLlength \jsSetQHLlength\CS{⟨長さ式⟩} : \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わり
に、⟨実数⟩Q・⟨実数⟩H・⟨実数⟩trueQ・⟨実数⟩trueH が記述できる。

```

3554 \def\jsSetQHLlength#1#2{%
3555 \begingroup
3556 \bxjs@parse@qh{#2}%
3557 \ifx\bxjs@tmpb\relax \setlength\tempdima{#2}%
3558 \else \tempdima\bxjs@tmpb\relax
3559 \fi
3560 \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\tempdima}%
3561 \endgroup
3562 #1=\bxjs@g@tmpa\relax}

```

\bxjs@parse@qh \jsSetQHLlength の下請け。#1 が Q/H/trueQ/trueH で終わる場合、\bxjs@tmpb にそれに
等しい寸法の表現を返す。それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。

```

3563 \if j\jsEngine

```

(u)pL^AT_EX ではこの処理は不要なので無効化する。

```

3564 \def\bxjs@parse@qh#1{%
3565 \let\bxjs@tmpb\relax}
3566 \else\ifbxjs@jp@units
3567 \def\bxjs@parse@qh#1{%
3568 \let\bxjs@tmpb\relax}
3569 \else
3570 \def\bxjs@parse@qh#1{%
3571 \def\bxjs@tmpa{#1}\let\bxjs@tmpb\relax
3572 \bxjs@parse@qh@a{trueQ}\trueQ

```

```

3573 \bxjs@parse@qh@a{trueH}\trueH
3574 \bxjs@parse@qh@a{Q}\jQ
3575 \bxjs@parse@qh@a{H}\jH}
3576 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2{%
3577 \ifx\bxjs@tmpb\relax
3578 \def\bxjs@next##1#1\@nil##2\@nnil{\bxjs@parse@qh@b{##1}{##2}}%
3579 \expandafter\bxjs@next\bxjs@tmpa\@nil#1\@nil\@nnil{#2}%
3580 \fi}
3581 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
3582 \ifx\@nnil#2\@nnil\else \def\bxjs@tmpb{#1#3}\fi}
3583 \fi\fi

```

`\jafontsize` `\jafontsize{〈フォントサイズ〉}{〈行送り〉}` : 和文フォント標準で、すなわち、1zw が〈フォントサイズ〉に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、Q/H の単位が使用できる。

```

3584 \def\jafontsize#1#2{%
3585 \begingroup
3586 \bxjs@jafontsize@a{#1}%
3587 \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima
3588 \bxjs@jafontsize@a{#2}%
3589 \xdef\bxjs@g@tmpa{%
3590 \noexpand\fontsize{\the\@tempdimb}{\the\@tempdima}}%
3591 \endgroup\bxjs@g@tmpa}
3592 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
3593 \bxjs@parse@qh{#1}%
3594 \ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi
3595 \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}

```

続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)

`\bxjs@kanjiskip` 和文間空白の量を表すテキスト。

```

3596 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}

```

`\setkanjiskip` 和文間空白の量を設定する。

```

3597 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
3598 \edef\bxjs@kanjiskip{#1}%
3599 \bxjs@reset@kanjiskip}

```

`\getkanjiskip` 和文間空白の量を表すテキストに展開する。

```

3600 \newcommand*\getkanjiskip{%
3601 \bxjs@kanjiskip}

```

`\ifbxjs@kanjiskip@enabled` 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTeX では自身の `\(no)autospacing` での制御を用いるのでこの変数は常に真とする。

```

3602 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue

```

`\bxjs@enable@kanjiskip` 和文間空白の挿入を有効／無効にする。(pTeX 以外)

```

\bxjs@disable@kanjiskip 3603 \bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip{%
3604 \bxjs@kanjiskip@enabledtrue

```

```

3605 \bxjs@reset@kanjiskip}
3606 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
3607 \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
3608 \bxjs@reset@kanjiskip}

```

\bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。

```

3609 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
3610 \ifbxjs@kanjiskip@enabled
3611 \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
3612 \else \@tempskipa\z@
3613 \fi
3614 \bxjs@apply@kanjiskip}

```

\bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。

```

\setxkanjiskip 3615 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
\getxkanjiskip 3616 \newcommand*\setxkanjiskip[1]{%
\ifbxjs@xkanjiskip@enabled 3617 \edef\bxjs@xkanjiskip{#1}%
3618 \bxjs@reset@xkanjiskip}
\bxjs@enable@xkanjiskip 3619 \newcommand*\getxkanjiskip{%
\bxjs@xkanjiskip 3620 \bxjs@xkanjiskip}
\bxjs@disable@xkanjiskip 3621 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
\bxjs@reset@xkanjiskip 3622 \bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{%
3623 \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
3624 \bxjs@reset@xkanjiskip}
3625 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
3626 \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
3627 \bxjs@reset@xkanjiskip}
3628 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
3629 \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
3630 \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@xkanjiskip}%
3631 \else \@tempskipa\z@
3632 \fi
3633 \bxjs@apply@xkanjiskip}

```

\jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追従するようにする。

```

3634 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
3635 \bxjs@reset@kanjiskip
3636 \bxjs@reset@xkanjiskip}
3637 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
3638 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax

```

■和文フォント指定の扱い

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を“調整”して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は“非埋込 (noEmbed)”の設定が禁止される。この禁止の場合も含め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```

3639 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont

```



```

3640 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
3641   \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
3642     \bxjs@get@kanjiEmbed
3643     \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
3644       \let\bxjs@tmpa\@empty
3645     \else
3646       \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
3647     \fi
3648   \else
3649     \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3650   \fi
3651   \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3652     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3653     {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
3654     not available on the current situation}%
3655     \let\bxjs@tmpa\@empty
3656   \fi\fi
3657 }
3658 \def\bxjs@@auto{auto}
3659 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}

```

\bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。 \bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定値が取得されてここに設定される。

```

3660 \let\bxjs@kanjiEmbed\relax

```

\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。

```

3661 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
3662 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
3663   \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
3664     \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
3665     \endlinechar\m@ne
3666     \let\do\@makeother\dospecials
3667     \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
3668     \let\bxjs@tmpa\@empty
3669     \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
3670     \ifeof\@inputcheck\else
3671       \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
3672     \closein\@inputcheck
3673   \fi
3674   \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
3675     \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
3676     \@tempwattrue
3677     \loop\if@tempwa
3678       \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
3679       \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
3680     \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
3681       \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
3682     \@tempwafalse
3683   \fi

```

```

3684 \expandafter\bxjs@get@ke@b\bxjs@tmpa\@nil jaEmbed \@nil\@nnil
3685 \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
3686 \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
3687 \@tempswafalse
3688 \fi
3689 \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
3690 \repeat
3691 \fi
3692 }\endgroup
3693 \let\bxjs@kanjiEmbed\bxjs@g@tmpa
3694 }
3695 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@a
3696 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
3697 \ifx$#1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
3698 \else \let\bxjs@tmpb\relax
3699 \fi}
3700 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@b
3701 \def\bxjs@get@ke@b#1jaEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
3702 \ifx$#1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
3703 \else \let\bxjs@tmpb\relax
3704 \fi}

```

\jachar \jachar{< 文字 >} : 和文文字として出力する。

```

3705 \newcommand*\jachar[1]{%
3706 \begingroup
    \jsLetHeadChar で先頭の “文字” を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
3707 \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
3708 \ifx\bxjs@tmpa\relax
3709 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3710 {Illegal argument given to \string\jachar}%
3711 \else
3712 \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
3713 \fi
3714 \endgroup}

```

\jsJaChar を \jachar と等価にする。

```
3715 \let\jsJaChar\jachar
```

下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。

```
3716 \let\bxjs@jachar\@firstofone
```

■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、hyperref 側の処理は無効にしておく。

```
3717 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}
```

\bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。

```

3718 \@onlypreamble\bxjs@fix@hyperref@unicode
3719 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%

```

```

3720 \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
3721 \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
3722   \KV@Hyp@unicode{##1}%
3723   \def\KV@Hyp@unicode####1{%
3724     \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
3725       \csname if####1\endcsname\else
3726       \ClassWarningNoLine{bxjs@clsname
3727         {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}}%
3728     \fi
3729   }%
3730 }%
3731 }

```

\jsCheckHyperrefUnicode 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。

```

3732 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
3733 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
3734 \AtBeginDocument{\jsCheckHyperrefUnicode}

```

\bxjs@check@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を本体開始時に検証する。

```

3735 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
3736 \def\bxjs@check@hyperref@unicode#1{%
3737   \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
3738     \@tempwafalse
3739     \begingroup
3740       \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
3741       \aftergroup\@tempwattrue \fi
3742       \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
3743         \csname if#1\endcsname
3744       \aftergroup\@tempwattrue \fi
3745     \endgroup
3746     \if@tempwa\else
3747       \ClassError{bxjs@clsname
3748         {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
3749         for the present engine (must be #1)}}%
3750       {\@ehc}%
3751     \fi}}

```

\bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。

```

3752 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
3753 \def\bxjs@urgent@special#1{%
3754   \AtBeginDvi{\special{#1}}%
3755   \AtBeginDocument{%
3756     \ifpackageloaded{atbegshi}{%
3757       \begingroup
3758         \toks\z@{\special{#1}}%
3759         \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
3760         \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
3761       \endgroup
3762     }-}%

```

```

3763 }%
3764 }

```

`\bxjs@resolve@jafont@paren` jafont パラメタ値内の () を解決する。

```

3765 \def\bxjs@resolve@jafont@paren#1{%
3766   \def\bxjs@tmpb{\let#1}%
3767   \expandafter\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1\@nil()\@nil\relax}
3768 \def\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1(#2)#3\@nil#4\relax{%
3769   \ifx\relax#4\relax \bxjs@tmpb\jsJaFont
3770   \else
3771     \edef\bxjs@tmpa{#1\bxjs@jafont@paren{#2}#3}%
3772     \bxjs@tmpb\bxjs@tmpa
3773   \fi}

```

C.2 pTeX 用設定

```

3774 \if j\jsEngine

```

■ 共通命令の実装

```

3775 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
3776   \kanjiskip\@tempskipa}
3777 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
3778   \xkanjiskip\@tempskipa}

```

`\jaJaChar` のサブマクロ。

```

3779 \def\bxjs@jachar#1{%
3780   \bxjs@jachar@a#1...\@nil}
3781 \def\bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5\@nil{%

```

引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしそれをそのまま出力する。

```

3782   \ifx.#2#1%

```

引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であるに見なし、そのスカラー値を `\@tempcnta` に代入する。

```

3783   \else\ifx.#3%
3784     \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3785     \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
3786     \bxjs@jachar@b
3787   \else\ifx.#4%
3788     \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3789     \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3790     \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
3791     \bxjs@jachar@b
3792   \else
3793     \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3794     \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3795     \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
3796     \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3797     \bxjs@jachar@b
3798   \fi\fi\fi}

```

符号値が `\@tempcnta` の和文文字を出力する処理。

```
3799 \ifjsWithupTeX
3800   \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
3801 \else
3802   \def\bxjs@jachar@b{%
3803     \ifx\bxUInt\@undefined\else
3804       \bxUInt{\@tempcnta}%
3805     \fi}
3806 \fi
```

和欧文間空白の命令 `\jathinspace` の実装。

```
3807 \ifbxjs@jaspace@cmd
3808   \def\jathinspace{\hskip\xkanjiskip}
3809 \fi
```

■jis2004 パラメタ `pxchfon` と `pxbabel` では 2004JIS を指定するオプションの名が `prefer2004jis` である。

```
3810 \ifbxjs@jp@jismmiv
3811   \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
3812   \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
3813 \fi
```

■和文フォント指定の扱い `pTeX` は既定で `kanji-config-updmap` の設定に従うため、`\jsJaFont` が `auto` の場合は何もする必要がない。無指定でも `auto` でもない場合は、`\jsJaFont` をオプションにして `pxchfon` パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパラメタ `font` が指定されている場合は、その値を `pxchfon` のオプションに追加する。

```
3814 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
3815 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3816 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
3817   \let\bxjs@tmpa\@empty
3818 \else\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3819   \def\bxjs@tmpa{noembed}
3820 \fi\fi
3821 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
3822 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3823 \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
3824   \edef\bxjs@next{%
3825     \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
3826   }\bxjs@next
3827 \fi
```

■otf パッケージ対策 インストールされている `otf` パッケージが `scale` オプションに対応している場合は `scale=(\jsScale の値)` を事前に `otf` に渡す。

※ `otf.sty` の中に「`\RequirePackage{keyval}`」の行が存在するかにより判定している。
(もっといい方法はないのか……。)

```
3828 \begingroup
```

```

3829 \global\let\@gtempa\relax
3830 \catcode`\|=0 \catcode`\|=12
3831 |def|bxjs@check#1|@nil{%
3832   |bxjs@check@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
3833 |def|bxjs@check@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
3834   |ifx$#1$|bxjs@check@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
3835 |catcode`\|=0 \catcode`\|=12
3836 \def\bxjs@check@b#1keyval#2\@nnil{%
3837   \ifx$#2$\else
3838     \xdef\@gtempa{%
3839       \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
3840     \fi}
3841 \@firstofone{%
3842   \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
3843   \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
3844   \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
3845   \@tempswatrue
3846   \loop\if@tempswa
3847     \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
3848     \if@tempswa
3849       \read\@inputcheck to\bxjs@line
3850       \expandafter\bxjs@check\bxjs@line\@nil
3851     \fi
3852   \repeat
3853   \closein\@inputcheck
3854 \endgroup}
3855 \@gtempa

```

■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。

```

3856 \ifbxjs@hyperref@enc
3857   \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
3858 \fi

```

tounicode special 命令を出力する。

```

3859 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
3860   \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
3861   \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
3862     \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
3863   \else\ifnum\jis"2121="8140 %sjis
3864     \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
3865   \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
3866     \ifbxjs@bigcode
3867       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
3868       \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
3869     \else
3870       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
3871     \fi
3872   \fi\fi\fi
3873   \let\bxToUnicodeSpecialDone=t

```

3874 \fi

■和文数式ファミリー 和文数式ファミリーは既定で有効とする。すなわち `enablejfam=false` 以外の場合は `@enablejfam` を真にする。

3875 \ifx f\bxjs@enablejfam\else

3876 \@enablejfamtrue

3877 \fi

実際に和文用の数式ファミリーの設定を行う。

3878 \if@enablejfam

3879 \DeclareSymbolFont{mincho}{\jsc@JYn}{mc}{m}{n}

3880 \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}

3881 \SetSymbolFont{mincho}{bold}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}

3882 \jfam\symmincho

3883 \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}

3884 \AtBeginDocument{%

3885 \ifx\reDeclareMathAlphabet\undefined\else

3886 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathmc}%

3887 \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathgt}%

3888 \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathgt}%

3889 \fi}

3890 \fi

C.3 pdfTeX 用設定 : CJK + bxcjkatype

3891 \else\if p\jsEngine

■bxcjkatype パッケージの読み込 `\jsJaFont` が指定されている場合は、その値を `bxcjkatype` のオプション（プリセット指定）に渡す。（auto ならば `\bxjs@get@kanjiEmbed` を実行する。）スケール値（`\jsScale`）の反映は `bxcjkatype` の側で行われる。

※Pandoc モードでは `autotilde` を指定しない。

3892 \bxjs@adjust@jafont{f}

3893 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone

3894 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa

3895 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}

3896 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{whole}}

3897 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else

3898 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}

3899 \fi

3900 \edef\bxjs@next{%

3901 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkatype}[2013/10/15]% v0.2c

3902 }\bxjs@next

3903 \bxjs@cjk@loaded

■hyperref 対策 bxcjkatype 使用時は unicode にするべき。

※取りあえず固定はしない。

```

3904 \ifbxjs@hyperref@enc
3905   \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
3906 \fi

```

\hypersetup 命令で（CJK* 環境に入れなくても）日本語文字を含む文書情報を設定できるようにするための細工。

※ bxcjkatype を whole 付きで使っていることが前提。

※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがその場で展開されてしまう」ため困難である。

```

3907 \ifx\bxckatypeHyperrefPatchDone\@undefined
3908 \begingroup
3909   \CJK@input{UTF8.bdg}
3910 \endgroup
3911 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%
3912   \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
3913 }
3914 \fi

```

～ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。

```

3915 \ifx\bxckatypeHyperrefPatchDone\@undefined
3916 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%
3917   \ifx~\bxjs@@CJKtilde
3918     \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
3919     \let\HyPsd@LetUnexpandableSpace\bxjs@LetUnexpandableSpace
3920     \let~\@empty
3921   \fi
3922 }
3923 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
3924 \def\bxjs@@tildecmd{~}
3925 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
3926   \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
3927     \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
3928   \fi}
3929 \fi

```

■ 共通命令の実装

```

3930 \newskip\jsKanjiSkip
3931 \newskip\jsXKanjiSkip
3932 \ifx\CJKecglue\@undefined
3933   \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3934 \fi
3935 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3936 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
3937 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
3938 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
3939   \jsKanjiSkip\@tempskipa
3940   \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
3941 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip

```



```

3942 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
3943 \protected\def\bxjs@CJKe glue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3944 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
3945   \jsXKanjiSkip\@tempskipa
3946   \let\CJKe glue\bxjs@CJKe glue}

```

\jachar のサブマクロの実装。

```

3947 \def\bxjs@jachar#1{%
3948   \CJKforced{#1}}

```

和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。

```

3949 \ifbxjs@jaspace@cmd
3950   \protected\def\jathinspace{\CJKe glue}
3951 \fi

```

■和文数式ファミリ CJK パッケージは（恐らく）数式文字として CJK 文字をサポートしていない。従って @enablejfam は常に偽になる。

```

3952 \ifx t\bxjs@enablejfam
3953   \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3954     {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
3955     CJK package does not support Japanese math}
3956 \fi

```

C.4 Xe_{La}TeX 用設定：xeCJK + zxjatype

```

3957 \else\if x\jsEngine

```

■zxjatype パッケージの読み込 スケール値 (\jsScale) の反映は zxjatype の側で行われる。

```

3958 \RequirePackage{zxjatype}
3959 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
3960 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
3961 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
3962 \ifx\zxJaFamilyName\@undefined
3963   \ClassError\bxjs@clsname
3964     {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
3965 \fi

```

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は IPAex フォントを使用する。

```

3966 \bxjs@adjust@jafont{f}
3967 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
3968 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
3969 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3970 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
3971   \setCJKmainfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexMincho}
3972   \setCJKsansfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexGothic}
3973 \else
3974   \edef\bxjs@next{%

```

```

3975 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
3976 }\bxjs@next
3977 \fi

```

■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

X_ƎTeX の場合は、xdvipdfmx が UTF-8 → UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、hyperref での方針としては、X_ƎTeX の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、unicode を無効にしていると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去 (r35125 まで) の xdvipdfmx では、文字列を UTF-16 に変換した状態で与えるのは不正と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「X_ƎTeX のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

```

3978 \ifnum\strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992}>\m@ne
3979 \ifbxjs@hyperref@enc
3980 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
3981 \fi
3982 \fi

```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも（少なくとも現状の）xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。

強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。

```

3983 \AtEndOfPackage{%
3984 \def\@gnewline #1{%
3985 \ifvmode \@nolnerr
3986 \else
3987 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3988 \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
3989 \ignorespaces
3990 \fi}
3991 }

```

■共通命令の実装

```

3992 \newskip\jsKanjiSkip
3993 \newskip\jsXKanjiSkip
3994 \ifx\CJKecglue\@undefined
3995 \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3996 \fi
3997 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3998 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
3999 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}

```

```

4000 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
4001   \jsKanjisSkip\@tempskipa
4002   \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
4003 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4004 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4005 \protected\def\bxjs@CJKeckglue{\hskip\jsXKanjisSkip}
4006 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
4007   \jsXKanjisSkip\@tempskipa
4008   \xeCJKsetup{CJKeckglue={\bxjs@CJKeckglue}}}

```

`\mcfamily`、`\gtfamily` は本来は `zxjatype` の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的にここで定義する。

```

4009 \ifx\mcfamily\@undefined
4010   \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
4011   \protected\def\gtfamily{\CJKfamily{\CJKsfdefault}}
4012 \fi

```

`\jachar` のサブマクロの実装。

```

4013 \def\bxjs@jachar#1{%
4014   \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
4015   #1}

```

`\jathinspace` の実装。

```

4016 \ifbxjs@jaspace@cmd
4017   \protected\def\jathinspace{\CJKeckglue}
4018 \fi

```

■和文数式ファミリー 和文数式ファミリーは既定で無効とする。すなわち `enablejfam=true` の場合にのみ `@enablejfam` を真にする。

```

4019 \ifx t\bxjs@enablejfam
4020   \@enablejfamtrue
4021 \fi

```

実際に和文用の数式ファミリーの設定を行う。

※ FIXME: 要検討。

```

4022 \if@enablejfam
4023   \xeCJKsetup{CJKmath=true}
4024 \fi

```

C.5 Lua_TE_X 用設定 : Lua_TE_X-ja

```

4025 \else\if l\jsEngine

```

■Lua_TE_X-ja パッケージの読込 `luatexja` とともに `luatexja-fontspec` パッケージを読み込む。

`luatexja` は自前の `\zw` (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す) を定義するので、`\zw` の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく `\jsZw` であることに注意が必要。

※ 1.0b 版から「graphics パッケージに pdfTeX オプションを渡す」処理を行っていたが、1.4 版で廃止された。

```
4026 \let\zw\@undefined
4027 \RequirePackage{luatexja}
4028 \edef\bxjs@next{%
4029   \noexpand\RequirePackage[scale=\jsScale]{luatexja-fontspec}[2015/08/26]%
4030 }\bxjs@next
```

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は、luatexja-preset パッケージの ipaex オプション（IPAex フォント使用）と等価な設定を用いる（luatexja-preset は読み込まない）。

```
4031 \bxjs@adjust@jafont{t}
4032 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
4033   \def\bxjs@tmpa{noembed}
4034 \fi
4035 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
4036 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4037 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4038 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
4039   \defaultfontfeatures{ Kerning=Off }
4040   \setmainfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexMincho}
4041   \setsansfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexGothic}
4042 \else
4043   \edef\bxjs@next{%
4044     \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
4045   }\bxjs@next
4046 \fi
```

欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント関係の定義を行う。

```
4047 \DeclareRobustCommand\rmfamily
4048   {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
4049    \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
4050 \DeclareRobustCommand\sffamily
4051   {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
4052    \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4053 \DeclareRobustCommand\ttfamily
4054   {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
4055    \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4056 \AtBeginDocument{%
4057   \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}
4058   \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathgt}%
4059   \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}{\mathgt}}%
4060 \bxjs@if@sf@default{%
4061   \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
```

■和文パラメタの設定

```
4062 % 次の3つは既定値の通り
4063 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
4064 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={`",10000}}
4065 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`",10000}}
4066 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!',1}}
4067 \ltjsetparameter{jaxspmode={`〒,2}}
4068 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
4069 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs* クラスの処理に合わせる。

※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。

`\ltjfakeparbegin` 現在の LuaTeX-jā で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未定義である場合に備えて同等のものを用意する。

```
4070 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
4071   \protected\def\ltjfakeparbegin{%
4072     \ifhmode
4073       \relax\directlua{%
4074         luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
4075   \fi}
4076 \fi
```

ltjs* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。

```
4077 \unless\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none
4078 \begingroup
4079   \let\% \@percentchar \def\@#1[[[\detokenize{#1}]]]
4080   \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{}}\fi}}
4081   \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
4082     \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{\everyparhook}}\fi}}\fi
4083   \directlua{
4084     local function patchcmd(cs, code, from, to)
4085       tex.sprint(code:gsub(from:gsub("%W", "%\\%\\%0"), "%0"..to)
4086         :gsub("macro:", "\@gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."")
4087     end
4088     patchcmd(\@xsect, [[\meaning\xsect]],
4089       \@{\hskip-\@tempskipa}, \@{\ltjfakeparbegin})
4090     patchcmd(\@item, [[\meaning\@item]],
4091       \bxjs@tmpa, \@{\ltjfakeparbegin})}
4092 \endgroup
4093 \fi
```

■hyperref 対策 unicode にするべき。

※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。

```
4094 \ifbxjs@hyperref@enc
4095   \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
4096   \bxjs@check@hyperref@unicode{true}
```

4097 \fi

■ 共通命令の実装

```
4098 \protected\def\autospacing{%
4099   \ltjsetparameter{autospacing=true}}
4100 \protected\def\noautospacing{%
4101   \ltjsetparameter{autospacing=false}}
4102 \protected\def\autoxspacing{%
4103   \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
4104 \protected\def\noautoxspacing{%
4105   \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
4106 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
4107   \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
4108 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
4109   \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
```

\jachar のサブマクロの実装。

```
4110 \def\bxjs@jachar#1{%
4111   \ltjjachar`#1\relax}
```

\jathinspace の実装。

```
4112 \ifbxjs@jaspace@cmd
4113   \protected\def\jathinspace{%
4114     \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}
4115 \fi
```

■ 和文数式ファミリ Lua_T_EX-j_a では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要な設定は済んでいる。従って @enablej_fam は常に真になる。

```
4116 \ifx f\bxjs@enablejfam
4117   \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
4118     {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak
4119     LuaTEX-ja always provides Japanese math families}
4120 \fi
```

C.6 共通処理 (2)

4121 \fi\fi\fi\fi

■ 共通命令の実装

\textmc minimal ドライバ実装中で定義した \DeclareJaTextFontCommand を利用する。

```
\textgt 4122 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
4123   \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
4124   \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
4125 \fi
```

\mathmc この時点で未定義である場合に限り、\DeclareJaMathFontCommand を利用したフォール

\mathgt バックの定義を行う。

```
4126 \ifx\mathmc\@undefined
```

```

4127 \DeclareJaMathFontCommand{\mathmc}{\mcfamily}
4128 \DeclareJaMathFontCommand{\mathgt}{\gtfamily}
4129 \fi

```

■和文空白命令

\> 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。
 ※数式中では従来通り (\: と等価)。

```

4130 \ifbxjs@jaspace@cmd
4131 \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%
4132 \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
4133 \else \jathinspace\ignorespaces
4134 \fi}
4135 \jsAtEndOfClass{%
4136 \ifjsWithTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace
4137 \else \def\>{\protect\bxjs@choice@jathinspace}%
4138 \fi}
4139 \fi

```

■和文・和欧文間空白の初期値

```

4140 \setkanjiskip{0pt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
4141 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
4142 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
4143 \fi

```

以上で終わり。

```

4144 %</standard>

```

付録 D 和文ドライバ : modern

モダンな設定。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

```

4145 %<*modern>
4146 \input{bxjsja-standard.def}

```

D.1 フォント設定

T1 エンコーディングに変更する。

※以下のコードは \usepackage[T1]{fontenc} と同等。

```

4147 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z@
4148 \def\encodingdefault{T1}%
4149 \input{t1enc.def}%
4150 \fontencoding\encodingdefault\selectfont
4151 \fi

```

基本フォントを Latin Modern フォントファミリーに変更する。

※以下は `\usepackage[noamth]{lmodern}` と同じ。ユーザは後で `lmodern` を好きなオプションを付けて読み込むことができる。

```
4152 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if l\jsEngine1\fi=\z@
4153 \renewcommand{\rmdefault}{lmr}
4154 \renewcommand{\sfdefault}{lms}
4155 \renewcommand{\ttdefault}{lmtt}
4156 \fi
```

大型演算子用の数式フォントの設定。

※ `amsmath` パッケージと同等にする。

```
4157 \DeclareFontShape{OMX}{cmex}{m}{n}{%
4158   <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%
4159   <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%
4160 \expandafter\let\csname OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax
4161 \def\cmex@opt{10}
```

`amsmath` 読込時に上書きされるのを防ぐ。

D.2 fixltx2e 読込

※ `fixltx2e` 廃止前の \LaTeX カーネルの場合。

```
4162 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined
4163 \RequirePackage{fixltx2e}
4164 \fi
```

D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。

```
4165 \RequirePackage{bxjcsjkat}
```

D.4 完了

おしまい。

```
4166 %</modern>
```

付録 E 和文ドライバ : pandoc

Pandoc 用の何か。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

```
4167 %<*pandoc>
4168 \input{bxjsja-standard.def}
4169 \RequirePackage{bxjspandoc}
```


E.1 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに“option clash”の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

`\bxjs@set@dupload@proc` `\bxjs@set@dupload@proc{〈ファイル名〉}{〈定義本体〉}` 特定のファイルの読込が `\@filewithoptions` で指示されて、しかもそのファイルが読込済である場合に、オプション重複検査をスキップして、代わりに〈定義本体〉のコードを実行する。このコード中で #1 は渡されたオプション列のテキストに置換される。

```
4170 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc
4171 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%
4172   \expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}
4173 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a
4174 \def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%
4175   \@onlypreamble#1\def#1##1}
```

`\@if@options` `\@if@options` の再定義。

```
4176 \@onlypreamble\bxjs@org@if@options
4177 \let\bxjs@org@if@options\@if@options
4178 \newif\ifbxjs@dlp
4179 \def\@if@options#1#2#3{%
4180   \bxjs@dlpfalse
4181   \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currentx}%
4182   \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
4183     \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
4184     \bxjs@dlptrue \fi
4185   \fi
4186   \ifbxjs@dlp \expandafter\bxjs@do@dupload@proc
4187   \else \expandafter\bxjs@org@if@options
4188   \fi {#1}{#2}{#3}}
4189 \AtBeginDocument{%
4190   \let\@if@options\bxjs@org@if@options}
4191 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
4192 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%
4193   \csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname{#3}%
4194   \@firstoftwo}
```

E.2 lang 変数

`lang=ja` という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐため、とりあえず両パッケージを無効化しておく。

```
4195 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if l\jsEngine1\fi>0
```

Polyglossia について。

```
4196 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}
```

```

4197 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
4198   \ClassWarning\bxjs@clsname
4199   {Loading of polyglossia is blocked}}
4200 \ifx\setmainlanguage\@undefined
4201 \newcommand*\setmainlanguage[2] [] {}
4202 \newcommand*\setotherlanguage[2] [] {%
4203   \ifcat_#2_\else
4204     \expandafter\let\csname #2\endcsname\@empty
4205     \expandafter\let\csname end#2\endcsname\@empty
4206     \expandafter\let\csname text#2\endcsname\@firstofone
4207   \fi}
4208 \newcommand*\setotherlanguages[2] [] {%
4209   \@for\bxjs@tmpa:={#2}\do{%
4210     \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}
4211 \fi
4212 \else

```

Babel について。

```

4213 \pandocSkipLoadPackage{babel}
4214 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%
4215   \ClassWarning\bxjs@clsname
4216   {Loading of babel is blocked}}
4217 \let\foreignlanguage\@secondoftwo
4218 \let\otherlanguage\@gobble
4219 \let\endotherlanguage\@empty
4220 \fi

```

E.3 geometry 変数

geometry を “再度読み込んだ” 場合に、そのパラメタで \setpagelayout* が呼ばれるようにする。

```

4221 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{%
4222   \setpagelayout*{#1}}

```

E.4 CJKmainfont 変数

LuaTeX (+ LuaTeX-jan) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```

4223 \if 1\jsEngine
4224   \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4225   \providecommand*\setCJKmainfont{\setmainjfont}
4226 \fi

```

E.5 paragraph のマーク

BXJS クラスでは `\paragraph` の見出しの前に `\jsParagraphMark` で指定したマークが付加され、既定ではこれは“■”である。しかし、この規定は `\paragraph` が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある（特に既定で `\paragraph` を別行見出しに再定義する）ため、変更された場合は `\jsParagraphMark` の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンプルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

```
4227 \AtBeginDocument{%
4228   \@tempswafalse
```

まず、マーク変更が必要かを調べる。`\oldparagraph` という制御綴が定義済の場合、Pandoc が `\paragraph` の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

```
4229   \ifx\oldparagraph\@undefined\else
4230     \@tempswatruetrue
4231   \fi
```

`\paragraph` が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。

```
4232   \ifnum\c@secnumdepth>3
4233     \@tempswatruetrue
4234   \fi
```

「マーク変更が必要」である場合、`\jsParagraphMark` が既定値のままであれば空に変更する。

```
4235   \if@tempswa\ifx\jsParagraphMark\bxjs@org@paragraph@mark
4236     \let\jsParagraphMark\@empty
4237   \fi\fi}
```

E.6 全角空白文字

```
4238 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z@
4239   \catcode"3000=\active
4240   \begingroup \catcode`\!=7
4241   \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
4242   \endgroup
4243 \else\ifx\DeclareUnicodeCharacter\@undefined\else
4244   \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
4245   \bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}
4246 \fi\fi
```

■hyperref 対策 hyperref の unicode オプションの固定を行う。

```
4247 \if j\jsEngine
4248   \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
4249 \else
```

```
4250 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
4251 \fi
```

E.7 完了

おしまい。

```
4252 %</pandoc>
```

和文ドライバ実装はここまで。

```
4253 %</drv>
```

付録 F 補助パッケージ一覧

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

- bxjscompat : ムニャムニャムニャ。
- bxjscjkat : modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。
- bxjspandoc : Pandoc 用のナニカ。

```
4254 %<*anc>
```

付録 G 補助パッケージ : bxjscompat

ムニャムニャムニャ……。

G.1 準備

```
4255 %<*compat>
```

```
4256 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}
```

\bxjx@engine エンジンの種別。

```
4257 \let\bxac@engine=n
```

```
4258 \def\bxac@do#1#2{%
```

```
4259 \edef\bxac@tmpa{\string#1}%
```

```
4260 \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%
```

```
4261 \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}
```

```
4262 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}
```

```
4263 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=l}
```

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの終わりまで実行を遅延する。

```
4264 \ifx\jsAtEndOfClass\undefined
```

```
4265 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone
```

```
4266 \else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass
```

```
4267 \fi
```

`\ImposeOldLuaTeXBehavior` ムニャムニャ。

```
\RevokeOldLuaTeXBehavior 4268 \newif\ifbxac@in@old@behavior
4269 \let\ImposeOldLuaTeXBehavior\relax
4270 \let\RevokeOldLuaTeXBehavior\relax
```

G.2 XeTeX 部分

```
4271 \ifx x\bxac@engine

XeTeX 文字クラスのムニャムニャ。
4272 \@onlypreamble\bxac@adjust@charclass
4273 \bxac@delayed@if@bxjs{%
4274   \@ifpackageloaded{xCJK}{}{%else
4275     \ifx\XeTeX@alloc@intercharclass\undefined\else
4276       \ifnum\XeTeX@alloc@intercharclass=\z@
4277         \PackageInfo\bxac@pkgname
4278           {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
4279         \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
4280           \XeTeX@alloc@intercharclass=3
4281         }{%else
4282           \PackageWarning\bxac@pkgname
4283             {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
4284             \@gobble}%
4285         }%
4286       \fi\fi
4287     \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
4288       \PackageInfo\bxac@pkgname
4289         {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
4290       \@for\bxac@x:={%
4291         3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
4292         3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
4293         30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
4294         31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
4295         31FF%
4296       }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
4297     \fi
4298   }%
4299 }
```

以上。

```
4300 \fi
```

G.3 LuaTeX 部分

```
4301 \ifx l\bxac@engine

ムニャムニャ。
4302 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
4303   \chardef\pdfTeXversion=200
4304   \def\pdfTeXrevision{0}
```

```

4305 \let\pdfptxheader\luatexheader
4306 \fi\fi

\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニヤムニヤ。

\RevokeOldLuaTeXBehavior 4307 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
4308 \expandafter\ifx\csname outputmode\endcsname\relax\else
4309 \def\bxac@ob@list{%
4310 \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
4311 \do{\let}\pdfpagewidth{\pagewidth}%
4312 \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
4313 \do{\protected\edef}\pdfhorigin{\pdfvariable horigin}}%
4314 \do{\protected\edef}\pdfvorigin{\pdfvariable vorigin}}
4315 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup
4316 \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
4317 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup
4318 \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
4319 \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
4320 \fi}
4321 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
4322 \unless\ifbxac@in@old@behavior
4323 \bxac@in@old@behaviortrue
4324 \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
4325 \fi}
4326 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
4327 \ifbxac@in@old@behavior
4328 \bxac@in@old@behaviorfalse
4329 \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
4330 \fi}
4331 \fi

```

漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニヤムニヤ。

```

4332 \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
4333 local function range(cs, ce, cc, ff)
4334 if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
4335 local setcc = tex.setcatcode
4336 for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
4337 end
4338 end
4339 range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
4340 range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
4341 range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
4342 range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
4343 range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
4344 range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
4345 range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4346 range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4347 range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
4348 range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
4349 range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)

```

```

4350     range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4351     range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4352 } \fi

```

以上。

```

4353 \fi

```

G.4 完了

おしまい。

```

4354 %</compat>

```

付録 H 補助パッケージ : bxjscjkat

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

H.1 準備

```

4355 %<*cjkcat>
4356 \def\bxjx@pkgnam{bxjscjkat}
4357 \newcount\bxjx@cna

\bxjx@engine エンジンの種別。

4358 \let\bxjx@engine=n
4359 \def\bxjx@do#1#2{%
4360   \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
4361   \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
4362   \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
4363 \bxjx@do\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
4364 \bxjx@do\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
4365 \bxjx@do\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
4366 \bxjx@do\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
4367 \bxjx@do\luatexversion{\let\bxjx@engine=l}

```

それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを
 検査する。

```

4368 \def\bxjx@do#1#2{%
4369   \if#1\bxjx@engine
4370     \@ifpackageloaded{#2}{\}%else
4371     \PackageError\bxjx@pkgnam
4372       {Package '#2' must be loaded}%
4373       {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
4374     \endinput}
4375 \fi}
4376 \bxjx@do{p}{\bxjcjkatype}
4377 \bxjx@do{x}{\xeCJK}
4378 \bxjx@do{l}{\luatexja}

```

古い L^AT_EX の場合、`\TextOrMath` は `fixltx2e` パッケージで提供される。

```
4379 \ifx\TextOrMath\@undefined
4380   \RequirePackage{fixltx2e}
4381 \fi
```

H.2 和文カテゴリコードの設定

upL^AT_EX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaT_EX-j_a と（ほぼ）等価なものに変更する。

※ LuaT_EX-j_a との相違点：A830、A960、1B000。

```
4382 \if u\bxjx@engine
4383 \@for\bxjx@x:={%
4384 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4385 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,08A0,0900,0980,0A00,%
4386 0A80,0B00,0B80,0C00,0C80,0D00,0D80,0E00,0E80,0F00,%
4387 1000,10A0,1200,1380,13A0,1400,1680,16A0,1700,1720,%
4388 1740,1760,1780,1800,18B0,1900,1950,1980,19E0,1A00,%
4389 1A20,1AB0,1B00,1B80,1BC0,1C00,1C50,1CC0,1CD0,1D00,%
4390 1D80,1DC0,1E00,2440,27C0,27F0,2800,2A00,2C00,2C60,%
4391 2C80,2D00,2D30,2D80,2DE0,2E00,4DC0,A4D0,A500,A640,%
4392 A6A0,A700,A720,A800,A830,A840,A880,A8E0,A900,A930,%
4393 A980,A9E0,AA00,AA60,AA80,AAE0,AB00,AB30,AB70,ABC0,%
4394 D800,DB80,DC00,E000,FB00,FB50,FE00,FE70,%
4395 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
4396 102E0,10300,10330,10350,10380,103A0,10400,10450,%
4397 10480,10500,10530,10600,10800,10840,10860,10880,%
4398 108E0,10900,10920,10980,109A0,10A00,10A60,10A80,%
4399 10AC0,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,10E60,%
4400 11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,11200,%
4401 11280,112B0,11300,11480,11580,11600,11680,11700,%
4402 118A0,11AC0,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4403 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4404 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E800,1EE00,1F000,%
4405 1F030,1F0A0,1F100,1F200,1F300,1F600,1F650,1F680,%
4406 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,F0000,100000%
4407 }\do{\kcatcode"\bxjx@x=15 }
4408 \fi
```

H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

※ここで「ギリシャ・キリル文字」は Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるもののみを指すことにする。

`\bxjx@grkcyr@list` 対象のギリシャ・キリル文字に関するデータ。

```
4409 \def\bxjx@grkcyr@list{%
4410 \do{0391}{LGR}{\textAlpha}{A}%           % GR. C. L. ALPHA
4411 \do{0392}{LGR}{\textBeta}{B}%           % GR. C. L. BETA
```


4412	$\backslash\mathrm{do}\{0393\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textGamma}\}\{\backslash\mathrm{Gamma}\}\%$	% GR. C. L. GAMMA
4413	$\backslash\mathrm{do}\{0394\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textDelta}\}\{\backslash\mathrm{Delta}\}\%$	% GR. C. L. DELTA
4414	$\backslash\mathrm{do}\{0395\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textEpsilon}\}\{\mathrm{E}\}\%$	% GR. C. L. EPSILON
4415	$\backslash\mathrm{do}\{0396\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textZeta}\}\{\mathrm{Z}\}\%$	% GR. C. L. ZETA
4416	$\backslash\mathrm{do}\{0397\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textEta}\}\{\mathrm{H}\}\%$	% GR. C. L. ETA
4417	$\backslash\mathrm{do}\{0398\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textTheta}\}\{\backslash\mathrm{Theta}\}\%$	% GR. C. L. THETA
4418	$\backslash\mathrm{do}\{0399\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textIota}\}\{\mathrm{I}\}\%$	% GR. C. L. IOTA
4419	$\backslash\mathrm{do}\{039\mathrm{A}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textKappa}\}\{\mathrm{K}\}\%$	% GR. C. L. KAPPA
4420	$\backslash\mathrm{do}\{039\mathrm{B}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textLambda}\}\{\backslash\mathrm{Lambda}\}\%$	% GR. C. L. LAMDA
4421	$\backslash\mathrm{do}\{039\mathrm{C}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textMu}\}\{\mathrm{M}\}\%$	% GR. C. L. MU
4422	$\backslash\mathrm{do}\{039\mathrm{D}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textNu}\}\{\mathrm{N}\}\%$	% GR. C. L. NU
4423	$\backslash\mathrm{do}\{039\mathrm{E}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textXi}\}\{\backslash\mathrm{Xi}\}\%$	% GR. C. L. XI
4424	$\backslash\mathrm{do}\{039\mathrm{F}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textOmicron}\}\{\mathrm{O}\}\%$	% GR. C. L. OMICRON
4425	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}0\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textPi}\}\{\backslash\mathrm{Pi}\}\%$	% GR. C. L. PI
4426	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}1\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textRho}\}\{\mathrm{P}\}\%$	% GR. C. L. RHO
4427	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}3\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textSigma}\}\{\backslash\mathrm{Sigma}\}\%$	% GR. C. L. SIGMA
4428	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}4\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textTau}\}\{\mathrm{T}\}\%$	% GR. C. L. TAU
4429	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}5\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textUpsilon}\}\{\backslash\mathrm{Upsilon}\}\%$	% GR. C. L. UPSILON
4430	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}6\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textPhi}\}\{\backslash\mathrm{Phi}\}\%$	% GR. C. L. PHI
4431	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}7\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textChi}\}\{\backslash\mathrm{X}\}\%$	% GR. C. L. CHI
4432	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}8\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textPsi}\}\{\backslash\mathrm{Psi}\}\%$	% GR. C. L. PSI
4433	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{A}9\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textOmega}\}\{\backslash\mathrm{Omega}\}\%$	% GR. C. L. OMEGA
4434	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}1\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textalpha}\}\{\backslash\mathrm{alpha}\}\%$	% GR. S. L. ALPHA
4435	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}2\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textbeta}\}\{\backslash\mathrm{beta}\}\%$	% GR. S. L. BETA
4436	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}3\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textgamma}\}\{\backslash\mathrm{gamma}\}\%$	% GR. S. L. GAMMA
4437	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}4\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textdelta}\}\{\backslash\mathrm{delta}\}\%$	% GR. S. L. DELTA
4438	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}5\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textepsilon}\}\{\backslash\mathrm{epsilon}\}\%$	% GR. S. L. EPSILON
4439	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}6\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textzeta}\}\{\backslash\mathrm{zeta}\}\%$	% GR. S. L. ZETA
4440	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}7\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{texteta}\}\{\backslash\mathrm{eta}\}\%$	% GR. S. L. ETA
4441	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}8\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{texttheta}\}\{\backslash\mathrm{theta}\}\%$	% GR. S. L. THETA
4442	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}9\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textiota}\}\{\backslash\mathrm{iota}\}\%$	% GR. S. L. IOTA
4443	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}\mathrm{A}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textkappa}\}\{\backslash\mathrm{kappa}\}\%$	% GR. S. L. KAPPA
4444	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}\mathrm{B}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textlambda}\}\{\backslash\mathrm{lambda}\}\%$	% GR. S. L. LAMDA
4445	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}\mathrm{C}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textmu}\}\{\backslash\mathrm{mu}\}\%$	% GR. S. L. MU
4446	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}\mathrm{D}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textnu}\}\{\backslash\mathrm{nu}\}\%$	% GR. S. L. NU
4447	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}\mathrm{E}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textxi}\}\{\backslash\mathrm{xi}\}\%$	% GR. S. L. XI
4448	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{B}\mathrm{F}\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textomicron}\}\{\mathrm{o}\}\%$	% GR. S. L. OMICRON
4449	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}0\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textpi}\}\{\backslash\mathrm{pi}\}\%$	% GR. S. L. PI
4450	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}1\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textrho}\}\{\backslash\mathrm{rho}\}\%$	% GR. S. L. RHO
4451	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}2\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textvarsigma}\}\{\backslash\mathrm{varsigma}\}\%$	% GR. S. L. FINAL SIGMA
4452	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}3\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textsigma}\}\{\backslash\mathrm{sigma}\}\%$	% GR. S. L. SIGMA
4453	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}4\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{texttau}\}\{\backslash\mathrm{tau}\}\%$	% GR. S. L. TAU
4454	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}5\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textupsilon}\}\{\backslash\mathrm{upsilon}\}\%$	% GR. S. L. UPSILON
4455	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}6\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textphi}\}\{\backslash\mathrm{phi}\}\%$	% GR. S. L. PHI
4456	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}7\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textchi}\}\{\backslash\mathrm{chi}\}\%$	% GR. S. L. CHI
4457	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}8\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textpsi}\}\{\backslash\mathrm{psi}\}\%$	% GR. S. L. PSI
4458	$\backslash\mathrm{do}\{03\mathrm{C}9\}\{\mathrm{LGR}\}\{\backslash\mathrm{textomega}\}\{\backslash\mathrm{omega}\}\%$	% GR. S. L. OMEGA
4459	$\backslash\mathrm{do}\{0401\}\{\mathrm{T}2\mathrm{A}\}\{\backslash\mathrm{CYR}0\}\{\}\%$	% CY. C. L. IO
4460	$\backslash\mathrm{do}\{0410\}\{\mathrm{T}2\mathrm{A}\}\{\backslash\mathrm{CYR}1\}\{\}\%$	% CY. C. L. A

4461 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%	% CY. C. L. BE
4462 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%	% CY. C. L. VE
4463 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%	% CY. C. L. GHE
4464 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%	% CY. C. L. DE
4465 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%	% CY. C. L. IE
4466 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%	% CY. C. L. ZHE
4467 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%	% CY. C. L. ZE
4468 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%	% CY. C. L. I
4469 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%	% CY. C. L. SHORT I
4470 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%	% CY. C. L. KA
4471 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%	% CY. C. L. EL
4472 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%	% CY. C. L. EM
4473 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%	% CY. C. L. EN
4474 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%	% CY. C. L. O
4475 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%	% CY. C. L. PE
4476 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%	% CY. C. L. ER
4477 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%	% CY. C. L. ES
4478 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%	% CY. C. L. TE
4479 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%	% CY. C. L. U
4480 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%	% CY. C. L. EF
4481 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%	% CY. C. L. HA
4482 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%	% CY. C. L. TSE
4483 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%	% CY. C. L. CHE
4484 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%	% CY. C. L. SHA
4485 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%	% CY. C. L. SHCHA
4486 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%	% CY. C. L. HARD SIGN
4487 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%	% CY. C. L. YERU
4488 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%	% CY. C. L. SOFT SIGN
4489 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%	% CY. C. L. E
4490 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%	% CY. C. L. YU
4491 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%	% CY. C. L. YA
4492 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%	% CY. S. L. A
4493 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%	% CY. S. L. BE
4494 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%	% CY. S. L. VE
4495 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%	% CY. S. L. GHE
4496 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%	% CY. S. L. DE
4497 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%	% CY. S. L. IE
4498 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%	% CY. S. L. ZHE
4499 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%	% CY. S. L. ZE
4500 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%	% CY. S. L. I
4501 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%	% CY. S. L. SHORT I
4502 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%	% CY. S. L. KA
4503 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%	% CY. S. L. EL
4504 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%	% CY. S. L. EM
4505 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%	% CY. S. L. EN
4506 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%	% CY. S. L. O
4507 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%	% CY. S. L. PE
4508 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%	% CY. S. L. ER
4509 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%	% CY. S. L. ES

```

4510 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%           % CY. S. L. TE
4511 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%           % CY. S. L. U
4512 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%           % CY. S. L. EF
4513 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%           % CY. S. L. HA
4514 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%           % CY. S. L. TSE
4515 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%           % CY. S. L. CHE
4516 \do{0448}{T2A}{\cyrrh}{}%           % CY. S. L. SHA
4517 \do{0449}{T2A}{\cyrrhch}{}%         % CY. S. L. SHCHA
4518 \do{044A}{T2A}{\cyrrhrdsn}{}%       % CY. S. L. HARD SIGN
4519 \do{044B}{T2A}{\cyrrery}{}%         % CY. S. L. YERU
4520 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%        % CY. S. L. SOFT SIGN
4521 \do{044D}{T2A}{\cyrrerev}{}%        % CY. S. L. E
4522 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%           % CY. S. L. YU
4523 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%           % CY. S. L. YA
4524 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%           % CY. S. L. IO
4525 \do{00A7}{TS1}{\textsection}{\mathsection}% SECTION SYMBOL
4526 \do{00A8}{TS1}{\textasciidieresis}{}% % DIAERESIS
4527 \do{00B0}{TS1}{\textdegree}{\mathdegree}% % DEGREE SIGN
4528 \do{00B1}{TS1}{\textpm}{\pm}%       % PLUS-MINUS SIGN
4529 \do{00B4}{TS1}{\textasciicute}{}%   % ACUTE ACCENT
4530 \do{00B6}{TS1}{\textparagraph}{\mathparagraph}% PILCROW SIGN
4531 \do{00D7}{TS1}{\texttimes}{\times}% % MULTIPLICATION SIGN
4532 \do{00F7}{TS1}{\textdiv}{\div}%     % DIVISION SIGN
4533 }

4534 \providecommand*{\mathdegree}{\circ}

```

`\ifbxjx@gcc@cjk` [スイッチ] ギリシャ・キリル文字を和文扱いにするか。

```
4535 \newif\ifbxjx@gcc@cjk
```

`\greekasCJK` ギリシャ・キリル文字を和文扱いにする。

`\nogreekasCJK` ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。

```

4536 \newcommand*\greekasCJK{%
4537   \bxjx@gcc@cjktrue}
4538 \newcommand*\nogreekasCJK{%
4539   \bxjx@gcc@cjkfalse}

```

`\bx@fake@grk` `\bx@fake@grk{<出力文字>}{<基準文字>}` :

```

4540 \def\bxjx@do#1\relax{%
4541   \def\bxjx@fake@grk##1##2{%
4542     \expandafter\bxjx@fake@grk@a\meaning##2#1\@nil{##1}{##2}}%
4543   \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%
4544     \ifx\##1\%
4545       \bxjx@canta##4\divide\bxjx@canta\@cclvi
4546       \multiply\bxjx@canta\@cclvi \advance\bxjx@canta`##3\relax
4547       \mathchar\bxjx@canta
4548     \else ##3\fi}
4549 } \expandafter\bxjx@do\string\mathchar\relax

```

■pdfLaTeX・upLaTeX の場合

```
4550 \ifnum0\if p\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0
```

まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。

```
4551 \@ifpackageloaded{inputenc}{\fi}{%else
4552   \RequirePackage[utf8]{inputenc}}
4553 \def\bxjx@tmpa{utf8}
4554 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
4555   \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
4556     {Input encoding changed to utf8}%
4557   \inputencoding{utf8}%
4558 \fi
```

upLaTeX の場合は当該の文字を含むブロックをの和文カテゴリコードを変更する。

```
4559 \if u\bxjx@engine
4560 \kcatcode"0370=15
4561 \kcatcode"0400=15
4562 \kcatcode"0500=15
4563 \fi
```

各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。

```
4564 \def\do#1{%
4565   \@tempcnta="#1\relax
4566   \@tempcntb=\@tempcnta \divide\@tempcntb256
4567   \expandafter\let\csname bxjx@KCR/\the\@tempcntb\endcsname=t%
4568   \expandafter\bxjx@do@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
4569 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%
4570   \ifx\#5\%
4571     \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
4572     \else\ifcat A\noexpand#5%
4573       \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4574         {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
4575     \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4576   \fi\fi
4577   \def\bxjx@tmpb{\bxjx@do@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
4578   \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
4579 \if u\bxjx@engine
4580 % {\bxjx@KC/NN}{XXXX}{ENC}{\textCS}{\mathCS}
4581 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%
4582   \kchardef#1=\@tempcnta
4583   \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{#1}{#3}{#4}}%
4584   \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}%
4585 \else\if p\bxjx@engine
4586 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%
4587   \mathchardef#1=\@tempcnta
4588   \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{\UTF{#2}}{#3}{#4}}%
4589   \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}%
4590 \fi\fi
4591 \bxjx@grkcyr@list
```

```

4592 \let\bxjx@do@a\undefined
4593 \let\bxjx@do@b\undefined

```

`\bxjx@DeclareUnicodeCharacter` `\bxjx@DeclareUnicodeCharacter` を改変して、ギリシャ・キリル文字の場合に再定義を抑制したもの。

```

4594 \@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter
4595 \let\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter\DeclareUnicodeCharacter
4596 \@onlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
4597 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
4598   \count@="#1\relax \bxjx@cnta\count@ \divide\bxjx@cnta256
4599   \expandafter\ifx\csname bxjx@KCR/\the\bxjx@cnta\endcsname\relax
4600     \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
4601   \else\expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax
4602     \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
4603   \else
4604     \wlog{ \space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
4605   \fi\fi}

```

`\bxjx@ja@or@not` `\bxjx@ja@or@not`

```

4606 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%
  \greekasCJK の場合は、無条件に和文用コードを実行する。

```

```

4607 \ifbxjx@gcc@CJK #1%

```

`\nogreekasCJK` の場合は、エンコーディングを固定して欧文用のコードを実行するが、そのエンコーディングが未定義の場合は（フォールバックとして）和文用コードを使う。

```

4608 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
4609 \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
4610 \fi\fi}

```

`\DeclareFontEncoding@` `\DeclareFontEncoding@` にパッチを当てて、`\DeclareFontEncoding` の実行中だけ改変後の `\DeclareUnicodeCharacter` が使われるようにする。

```

4611 \begingroup
4612 \toks@{\expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}}
4613 \xdef\next{\def\noexpand\DeclareFontEncoding@##1##2##3{%
4614   \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
4615   \the\toks@
4616   \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}
4617 \endgroup\next
4618 \def\bxjx@swap@DUC@cmd{%
4619   \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
4620   \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
4621   \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa}

```

以上。

■ Xe_{La}TeX・Lua_{La}TeX の場合

```

4622 \else\ifnum0\if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0

```

各文字について、math active を設定する。

```

4623 \def\do#1{%
4624   \bxjx@cmta="#1\relax
4625   \begingroup
4626     \lccode`~=\bxjx@cmta
4627   \lowercase{\endgroup
4628     \bxjx@do@a{~}}{#1}}
4629 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%
4630   \ifx\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
4631   \else\ifcat A\noexpand#5%
4632     \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4633       {\ifnum\uccode`#5=#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
4634   \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4635   \fi\fi
4636   \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
4637     \mathcode\bxjx@cmta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
4638   \fi}

```

「Unicode な数式」の設定が行われているかを（簡易的に）検査して、そうでない場合にのみ、こちらの設定を有効にする。

```

4639 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
4640 \ifx\bxjx@tmpa\pi \bxjx@grkcyr@list \fi
4641 \let\bxjx@do@a\undefined

```

Lua_T_EX における \(\no)greekasCJK の定義。jacharrange の設定を変更する。

```

4642 \if l\bxjx@engine
4643   \protected\def\greekasCJK{%
4644     \bxjx@gcc@cjctrue
4645     \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}
4646   \protected\def\nogreekasCJK{%
4647     \bxjx@gcc@cjkfalse
4648     \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}
4649 \fi

```

X_YTeX における \(\no)greekasCJK の定義。

```

4650 \if x\bxjx@engine
4651   \protected\def\greekasCJK{%
4652     \bxjx@gcc@cjctrue
4653     \def\do##1##2##3##4{\XeTeXcharclass"##1\@ne}%
4654     \bxjx@grkcyr@list}
4655   \protected\def\nogreekasCJK{%
4656     \bxjx@gcc@cjkfalse
4657     \def\do##1##2##3##4{\XeTeXcharclass"##1\z@}%
4658     \bxjx@grkcyr@list}
4659 \fi

```

以上。

```

4660 \fi\fi

```

H.4 初期設定

ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。

```
4661 \nogreekasCJK
```

H.5 完了

おしまい。

```
4662 %</cjkat>
```

付録 I 補助パッケージ : bxjspandoc

Pandoc の L^AT_EX 用標準テンプレートをより幸せに使うための設定。BXJS クラスの pandoc ドライバのコードの中の、“汎用的”に使える部分を切り出したもの。つまり現在の pandoc ドライバはこのパッケージを読みこむ。

※テンプレートの T_EX コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

I.1 準備

```
4663 %<*ancpandoc>
```

```
4664 %% このファイルは日本語文字を含みます.
```

```
4665 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkat}
```

\bxjsp@engine エンジンの種別。

```
4666 \let\bxjsp@engine=n
```

```
4667 \@onlypreamble\bxjsp@do
```

```
4668 \def\bxjsp@do#1#2{%
```

```
4669   \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%
```

```
4670   \edef\bxjsp@tmpb{\meaning#1}%
```

```
4671   \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}
```

```
4672 \bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}
```

```
4673 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=x}
```

```
4674 \bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}
```

```
4675 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=l}
```

I.2 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{〈ファイル名〉} : 特定のファイルを (\@filewithoptions の処理に関して) 読込済であるとマークする。

```
4676 \newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%
```

```
4677   \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}
```

```
4678 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%
```

```
4679   \ifx#1\relax
```

```

4680 \def#1{2001/01/01}%
4681 \PackageInfo{bxjisp}{pkgnam
4682 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%
4683 \fi}

```

`\pandocSkipLoadPackage` `\pandocSkipLoadPackage{<パッケージ名>}` : `\pandocSkipLoadFile` の機能を用いてパッケージの読込を阻止する。

```

4684 \newcommand*\pandocSkipLoadPackage[1]{%
4685 \pandocSkipLoadFile{#1.sty}}

```

1.3 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは `fixltx2e` パッケージを読み込むが、最近（2015 年版以降）の `LATEX` ではこれで警告が出る。これを抑止する。

`LATEX` カーネルが新しい場合は `fixltx2e` を読込済にする。

```

4686 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined\else
4687 \pandocSkipLoadPackage{fixltx2e}
4688 \fi

```

1.4 cmap パッケージ

エンジンが `(u)pLATEX` のときに `cmap` パッケージが読み込まれるのを阻止する。（実際は警告が出るだけで無害であるが。）

```

4689 \if j\bxjisp@engine
4690 \pandocSkipLoadPackage{cmap}
4691 \fi

```

1.5 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

```

4692 \if j\bxjisp@engine \else
4693 \PassOptionsToPackage{verbose=silent}{microtype}
4694 \fi

```

エンジンが `(u)pLATEX` のときに `microtype` パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は `standard` ドライバでこの処理を行っていたが、元来は `Pandoc` 用の処理なので、1.5 版で `pandoc` に移動。

```

4695 \if j\bxjisp@engine
4696 \pandocSkipLoadPackage{microtype}
4697 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2] [] {}
4698 \fi

```


I.6 Unicode 文字変換対策

Pandoc で \LaTeX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「 \LaTeX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

$\cdots \rightarrow \backslash\ldots\{ \}$ ‘ \rightarrow ’ ‘ \rightarrow ’ “ \rightarrow ” “ \rightarrow ”

日本語 \LaTeX では「 \LaTeX の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の `--no-tex-ligatures` オプションを指定すれば抑止できるが、「 \cdots 」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「 $\backslash\ldots\{ \}$ 」を『 \cdots 』に戻す」という処置を行う。

`\pandocLdots` Pandoc 用の $\backslash\ldots$ の実装。非数式でありかつ後続が $\{ \}$ の場合は代わりに \cdots を実行する。

```
4699 \DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{%
4700   \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots
4701   \else \expandafter\bxjsp@ldots@a
4702   \fi}
4703 \def\bxjsp@ja@ellipsis{…}
4704 \let\bxjsp@org@ldots\ldots
4705 \def\bxjsp@ldots@a{%
4706   \futurelet\bxjsp@tok\bxjsp@ldots@b}
4707 \def\bxjsp@ldots@b{%
4708   \ifx\bxjsp@tok\bgroup \expandafter\bxjsp@ldots@c
4709   \else \expandafter\bxjsp@org@ldots
4710   \fi}
4711 \def\bxjsp@ldots@c{%
4712   \afterassignment\bxjsp@ldots@d \let\bxjsp@tok=}
4713 \def\bxjsp@ldots@d{%
4714   \futurelet\bxjsp@tok\bxjsp@ldots@e}
4715 \def\bxjsp@ldots@e{%
4716   \ifx\bxjsp@tok\egroup \expandafter\bxjsp@ldots@f
4717   \else \expandafter\bxjsp@ldots@g
4718   \fi}
4719 \def\bxjsp@ldots@f{%
4720   \bxjsp@ja@ellipsis \let\bxjsp@tok=}
4721 \def\bxjsp@ldots@g{%
4722   \expandafter\bxjsp@org@ldots\expandafter{\romannumeral-`} }

\ldots の実装を置き換える。
4723 \AtBeginDocument{%
4724   \let\bxjsp@org@ldots\ldots
4725   \let\ldots\pandocLdots}
```

1.7 PandoLa モジュール

インストール済であれば読み込む。

```
4726 \IfFileExists{bxpandola.sty}{%  
4727   \RequirePackage{bxpandola}\relax  
4728   \PackageInfo{bxjsp@pkgname  
4729     {PandoLa module is loaded\@gobble}  
4730 }{}
```

1.8 完了

おしまい。

```
4731 %</ancpandoc>
```

補助パッケージ実装はここまで。

```
4732 %</anc>
```